

## 同窓生寄稿

## あのことろ・このころ

## 劇映画

「長良川スタンド  
バイミー一九五〇」は  
実現するか？

松田 悠 八

昭和33年卒



る文学賞が多い中で、小島賞は年配の書き手の作品を大切にしてくれる、とてもうれしい存在なのだ。

「長良川…」は、小学生当時、夏の毎日を通じた長良川のこゝろ、柳ヶ瀬に出没したオトコオナナのシヨちゃんのことなどを、記憶の奥底に眠っていた懐かしい岐阜訛りをたっぷり使って描いたものだが、当時八九歳の小島さんの温かい批評によれば、「岐阜弁が物語を紡いでいる」とのことだった。

そして昨年、この「長良川…」を映画にしようという話を持ち上がった。世界中が不況の嵐に見舞われているというのに、億単位の資金を要する映画なんて出来っこないと、はじめは笑った。しかし、こういう時世だからこそ夢は大きい方がいいという声も聞こえてくる。映画の惹句は、「何もなかった。しかし子供たちの笑顔は輝いていた」

と決まった。東京のスタッフによる映画の企画書が完成し、岐阜県庁や市役所、関係各地を訪問する内に、映画に期待する地元の人々の熱い思いが感じられるようになってきた。それは、長良川の映画を製作するという大きな目標を掲げること、沈滞して出口の見つからない地域に何か新しい風が吹くかもしれない、という切なる思いの集合体のようであった。

折しもインターネットの人気投票で、長良川は全国でも一、二を争う清流として人気があることが証明された。千年の歴史に彩られる鵜飼を世界遺産に、という取り組みもはじまったという。「長良川…」を読んだ他県の読者から、自分の故郷とまったく同じだという感想も届いている。つまり長良川は、決して大きな川ではないけれど、堂々たる全国区、誇り高い川なのである。太平洋を隔てた対岸の国

の新しい指導者の叫ぶ「Yes, we can」という声さえ、まるで映画の応援歌のように響く。

「なんやしゃん、おもしろそうやな」「こら、やりたいね」……去年の十一月に岐阜で開かれた「劇映画・長良川を成功させる会」に集まった一六〇を超える人たちから、こんなささやき声が続出した。「あれ、あんた、なんでここにおるの?」「へえ、珍しいとこで会ったな」と、お互いに出席の理由を確かめ合う人たちもいた。どうやら、映画という見慣れない旗印が効果的な触媒となって人たちの好奇心をかき立て、結果的にいろいろな分野の才能が一堂に会したということなのだろう。久しぶりの故郷へ土足で踏み込むようなことにならなければいいが、という気がかりもあったが、それは杞憂に終わったようだ。集まったみんなが心から映画の実現を祈ってくれているようで、とて

も頼もしい。こんなふうには市民レベルで人が集まり、それが新聞やテレビで取り上げられ、何かが動きはじめているらしい、とさらに多くの人気があつて、そのちいさな波動がやがて大きなうねりになって行政や企業家が耳をそばだててくれたら、映画は実現するかもしれないぞと、小さな希望の灯がともった。

この映画の計画は、今ほどの手を離れて多くの人の灯になつてきたように見える。小島賞の後援委員の青木さん（彼は岐阜高の先輩で作家・評論家、「長良川…」の第一発見者で、現在は映画プロデューサーとして岐阜中を走り回る優れた「手配師」でもある）をはじめ、小島賞の会の会長吉田豊先生、応募前の拙作を読んでもらったこばやしひろし先生（ともに忘れがたい恩師である）、最初に映画化を企画した大学同期で長年映画の

二〇〇四年、ぼくの処女作「長良川スタンドバイミー一九五〇」が小島信夫文学賞を受賞した。この賞は岐阜生まれの芥川賞作家小島信夫さん（旧制岐阜中学を出た大先輩でもある）の文学的業績を顕彰してはじまったものである。若い才能を重視す

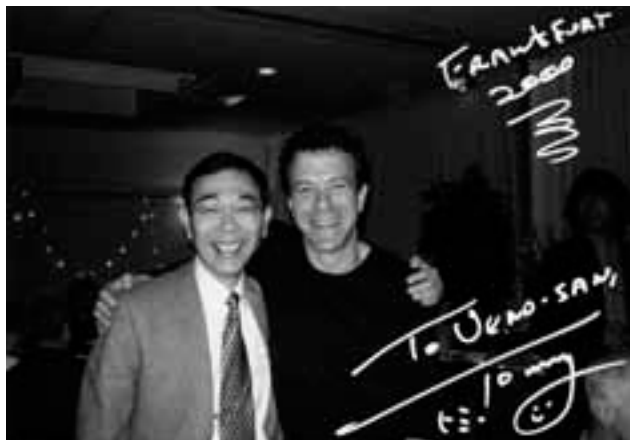
仕事をしている高島さん、シナリオの第一稿をまとめた映画監督の松本さん、計画に興味を持った地元ジャーナリストたち、「成功させる会」に集まった一六〇人の人たち、それに新聞記事を読んで関心を寄せて頂いている市民県民の方々——つまり「長良川：」は、こういう人たちのものになりつつあるような気がする。いや、そうやってほしい、と言い換えたほうがいい



長良川1950年。はち切れそうな笑顔ばかりである

は大きなチャンスをもたらした。一年間、ぼくは「円空流し」と題する小説を連載した。「長良川：」で小学生だった主人公が高校進学するところから話をはじめた。その高校の所在地はもろろん岐阜市大縄場、桜が散る頃には出版の予定なので、手に取って「あの頃」へ思いを馳せてもらえればうれしい限りである。

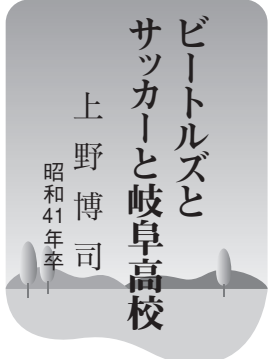
か。いずれにせよ映画に関して、今やぼくは只の言い出しっぺにすぎなくなつた。夢を共有する人の数が多くなればなるほど、ぼくは小さくなる。それがうれしい。それでいいのだ。目下、資金はゼロ、すべてはここからはじまる。ほんとうに故郷というのがあるがたいもので、映画計画をさかのぼる二〇〇五年の春、岐阜新聞の文化部から「長良川：」の続編を連載しないか、という依頼があった。駆け出しのもの書きとして



元ゴダイゴのドラマーでシンガーソングライターのTommy Snyder氏とのツーショット

いは、高一の時に同級生Aの自宅に呼ばれて聞かされたレコードが最初である。中学校時代の先生に感化されて、クラシック音楽一辺倒だった私には、衝撃的な音楽との出会いとなった。「なんじゃこりゃ」。不思議なコード進行と初めて耳にするサウンド。しかし、その後何度も耳にするうちに、いつの間にか

坂を駆け落ちるように、試験の成績は大幅に下がっていった。当然、それなりに悩んだ筈であるが、嫌な思い出が殆ど無い。良い思い出はそのまま残し、嫌な思い出はオブラートに包んでしまおうという記憶の仕組みが人間の脳にはあるらしい。ビートルズマニアが昂ずると、普通はミュージシャンを目指したり、あるいは音楽関連のソフト産業などに進むのだから、どういうわけか私は、電子楽器をつくってミュージシャンに提供する側の、ローランドという



「ベートルズなんかというのはい体何者だ？ そんな連中に武道館を使わせてたまるか」。これは一九六六年六月、ビートルズ初来日に際しての、当時の読売新聞社主で日本武道館館長をしておられた正力松太郎氏の言である。その頃の日曜日の早朝テレビ番組「時事放談」を

彼らの音楽に魅入られていった。岐高でのいま一つの出会いは、サッカーである。サッカーも興味があつて始めたというよりも、友達に誘われるがままに何となく始めた感じなのだが、これらとの出会いがその後の私の進路に大きく関わることになる。誘いを受けると何となく乗ってしまふというのは私の性癖のようで、振り返ってみると人生の重要なターニングポイントで、人の誘いに導かれるままに歩んできたような気がする。岐高時代の私は、このビートルズとサッカーで明け暮れ、当然勉強など二の次である。三年間、急な

製造会社に勤めることになり現在に至っている。仕事柄、プロのミュージシャンにお目にかかる機会は多い。会社がまだ小さかった頃は「ユニークな楽器をつくる日本の小さな会社を見てみたい」と、こちらからお願ひしなくても、有名ミュージシャンが浜松にある開発部門を訪れるということがよくあった。同輩や先輩諸兄は、ジャズピアノの巨匠、オスカー・ピーターソン氏をご存知であろう。二年ほど前にお亡くなりになったが、浜松の工場へは二度ほどお越しいただいている。大変な巨漢と上背に圧倒されたことを思い出す。当然魔法のように動く指使いにも。

彼のビートルズは大学四年生のころ解散してしまったが、ポール・マッカートニーがウィングスのメンバーと共に一九八〇年一月、来日することになった。直前になって、お忍びで浜松の工場を訪れたいという連絡が日本のプロモーターから入った。「来日後一〇日ぐらい後、名古屋公演の前後に訪れたい。詳細は追って連絡する」とのことであった。「これはえらいことになった」とばかり、来日後の彼らの

スケジュールを調べ入念な準備に取り掛かるうとしていた矢先、ポールが麻薬を所持していたという事で、成田で足止めされ入国は許されず、結局日本での公演予定は全てキャンセルとなった。当社訪問のチャンスもなくなった。

会社が大きくなるにつれ、有名ミュージシャンの突然の来訪というこのようなサプライズは少なくなつた。ビートルズに魅せられて、それまでクラシック音楽しか聴かなかった私が、ロックミュージックが好きになり、それが昂じて楽器を作る会社に入り、電子楽器の設計を二〇年以上させていただき、プロのミュージシャンと直接話をするチャンスに恵まれ、まあ、楽しく仕事をさせて頂いた。ここ一〇

だが、これを通じて親しくなった仲間とは、今でも名前を呼び捨てで呼び合う間柄で、これも私の大切な宝である。



岐阜サッカー部  
出身の大竹です  
大竹 利則  
昭和41年卒

私の子供の頃からずっとスポーツをしていたので、岐阜に入ってから何かスポーツのクラブに入って頑張ろうと思っていました。それで、入学後すぐに、サッカー部に入りました。

当時は昭和四〇年の岐阜国体に向けて、各競技の強化が行われており、岐阜には本荘中学のサッカー部（県大会で優勝）から多くの優秀選手が入学したため、岐阜は強化校に指定されました。そのため、岐阜には東

京教育大学（現筑波大学）から新任教師が赴任していました。その新任教師こそ、市川忠男先生（チューさん、チュー先生）です。先生は、当時流行っていた天皇杯獲得のための請負人であり、教員チームでの優勝を期待されていました。当然のことではありますが、岐阜サッカー部の国体出場にも並々ならぬ熱意で取り組まれ、我々を鍛えてくれました。

その頃のサッカーは、最近のサッカーのような細かいパスを繋ぎ組み立てると言うレベルの高いものではなく、いわゆるキックアンドラッシュ（大きくボールを蹴って、ゴール前に突進する？）に近い大味なサッカーでした。チームのポイントゲッターは浅野晴好君で、彼にボールを集めて点を取るのが、我々の形でした。守備陣はスリーバックで樋口洋平君をセンターに山本潤和君、西脇康雄君でした。

チュー先生がデイフェンダーであったため、守備陣はかなり鍛えられ、スライディングタックルで敵のフォワードを根こそぎ倒すと言う、ファウルぎりぎりの守備をしていました。私ほど言えば、なんと最後の皆であるゴールキーパーをしていたのです。伊奈波中学でのハンドボールの経験？を生かし、自分で言うのもなんですが、華麗なセービングでゴールを死守していたのです。（まあ、守護神？と言うところでしょうか。）

その頃のライバルは大垣工業と加納高校でしたが、我々のチームは、一点を取り、後は守り切ると言うサッカーで、一年生の冬まで、県大会のベスト四あたりの成績を取っていました。

ところが、県営グラウンドで合宿までして臨んだ二年生の春の大垣大会（県大会）で、なんと斐太実業に一回戦で負けると言う、失態を演じてしまうのです。その試合には、三年生の先輩（加納さん、松崎さん、土川さん）も先発メンバーで出場していたのですが、確か「前半〇対〇で終わったのは、三年生の出来が悪かったからだ」とチュー先生が怒り、後半は三年生全員が交



チュー先生は岐阜国体の教員の部で見事優勝し、ミッシェンも果たされました。

現在、岐阜サッカー部のOB会（昭和四十二年卒の柳瀬秀治君が会長）は、発足二〇周年を迎え、活発に活動をしています。毎年、一月と八月にOB戦をやっているのです。八月のOB会には、現役のサッカー部も参加し、元氣なプレーを見せてくれていま

す。もちろん、チュー先生（現、岐阜県サッカー協会副会長）は、毎回元氣に参加されており、できの悪い昔の生徒に「一緒にピッチで汗をかこう！」と呼びかけられています。我々の同世代では、土川さん、浅野君、佐藤君、山本君、柳瀬君が常連で、私はと

言いますと、最近は見学（サボリ）が多くなっています。「よし！今度の夏のOB戦には…ピッチに立とう！」まあ、無理をしない程度にね…。

団体には出場できませんでしたが、私にとって岐阜サッカー部は、一生付き合える友に出会うことができた貴重な場だったと言えます。

「岐阜サッカー部出身の大竹です。よろしく!!」

代させられ、一年生部員が加わった後半に1点を取られ、0対1で負けてしまったのです。その失点の状況は、今でも私の記憶に残っています。

それ以降は、ただでさえ高くない部員のモチベーションが一気に下がり、簡単に担任の先生の説得に応じ、次々と退部していくのでした。その後、三年生の後半までクラブ活動を続けたのは、私と樋口君と山本君の三人だけだったと思います。生徒たちの体たらくとは対照的に、



門誌以外の一般メディアはほとんど取り上げず、巨星が墜ちた一九九二年七月四日でさえ、小さな死亡記事で済まされてしまったのだから。メディアの眼と

アの登場は正に干天の慈雨。音楽に飢えていた私は、あらゆるジャンルをむさぼるように聴いていた。ある日のタンゴ番組でかかったピアノ初期の傑作『ロ・ケ・ベンドラ（来るべきもの）』。その複合リズムの面白さ、音楽本来のもつ生命感・躍動感、ゾクゾクするような音の積み重ね・響き、たとえようのない旋律の美しさ、かつて耳にしたことがなかった現代タンゴの響きに、世の中にはまだ私の知らないこんな音楽があったのか—当たり前だ—と驚き、たちまち虜になったのである。以来、英語そっちのけでスペイン語を独習したり、混血文化を生んだ多民族社会アルゼンチンの本を読み漁ったり、私の関心は二氣に中南米に向かうことになる。もちろんドイツ生まれのアルゼンチン育ちという、数奇の運命をたどった摩訶不思議な楽器バンドネオンのことは、寝ても覚めても頭から離れることがなかった。

さて、G・マラーは「やがて私の時代が来る」という有名な言葉を残したが、時代を切り開く人間の宿命といえようか、ピアノもまた正當な評価を受けることなく、常に二〇年先の時代を生きた芸術家であった。九〇年代後半G・クレメーメルやヨーヨー・マがクラシック界に

世界の中の音楽家がピアノ作品に注目。彼こそタンゴの概念を根底から覆し、二一世紀に生き延びる活力を与え、ワールド・ミュージックからコスモポリタンな都市音楽へ昇華させた、戦後のアルゼンチン文化を代表する最大の作曲家・バンドネオン奏者である。時代は今、ようやく彼に追いつこうとしている。

私がピアノの音楽に強い衝撃を受けたのは四五年前、高校一年のことであった。まだNHK・FMが実験放送と称していた時代、この新しい音楽メディア

六六年東京・代々木の四畳半のアパート。私は夢にまで見たバンドネオンと格闘の日々をスタートさせていた。ビートルズ来日で東京中が沸き立っていた

アストル・ピアソラという名をご存知だろうか。クラシック、ポピュラーを問わず音楽ファンの貴方なら、この一〇年彼の音楽を聴かずして通り過ぎることはできなかつたはずだ。いや、音楽にさほどの関心はなくてもあのフレーズを耳にすれば、ああ、あれを書いた作曲家なの、と納得していただけに違いない。彼の存在をまったく知らなくても、もちろん貴方に罪はない。彼が来日公演を果たした一九八二・八四・八六・八八年、専

頃である。師事したバンドネオン第一人者の池田光夫氏には高三のときにその旨を伝えていたので、楽器の入手も自炊の鍋釜を買うより早かった。さすがに東京である。一年間の基礎練習の後、大学のタンゴ楽団に入団、その春からステージ・デビューとなった。学生バンド華やかなりし時代、都内でのコンサートがひと月に一〇回という月も珍しくなかった。春・夏には幾度日本全国をツアーしたことが。

大学対抗バンド合戦（司会：大橋巨泉氏）タンゴ部門三年連続優勝を手土産に七〇年卒業。永遠に続くかと思われた経済繁栄も陰りがみえ、変革の時代が始まっていった。学生バンド界も外タレ・ブームなど音楽状況の変化で一気に下降に向かう。

生涯に一度の願い、アルゼンチンへの旅は、結局五度実現。果報者である。しかもヨーロッパを活動拠点とするピアソラのライブを、七八年初訪まで経験できたのはほとんど奇跡に近い。その日小さな小屋でのコンサートは、想像どおりの素晴らしさであった。コマージュリズムやマーケッティングで計算された音楽ビジネスとは対極の、真摯

で本気の音楽だけが持つ緊張感、力強さ、壮絶な気迫、激しい感情の高揚：私は打ち震えていた。

八二年三度目の訪亜時、私はピアソラ自邸に招かれた。帰り際ピアソラは楽譜出版社編集者宛のメモを私に渡し、欲しい楽譜があれば要るだけ貰っていきなさい、と。一抱えもの楽譜は貴重な宝となった。タンゴへの旅、ピアソラへの旅はまだ続いている。もし「青春」という二文字が精神のありようと心のかの持ち方を意味するのであれば、私は今なお青春を引きずっているのかもしれない。

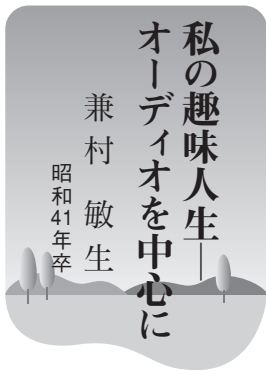
（下りオ・ポルテーニヨ主宰、バラ栽培家）

若い頃から私は勉強や仕事よりはるかに遊びの方が好きでしたので、いろいろな趣味に手を出してきました。一時はスキーに夢中になり、子どもたちにも無理やりつき合わせて毎週のようにスキー場へ通いました。しか

## 私の趣味人生 オーディオを中心に

兼村 敏生

昭和41年卒



そんな中でも長く続いているのが囲碁とオーディオです。囲碁は三〇代にかなり頑張りました。東京で学会があるたびに発表もそこそこに日本棋院中央会館での昇段試験に通い、五段の免状をいただきました。しかし近くに同好の人が少ないので最近あまり打つ機会がありません。



診察室にて

それに比してオーディオは一人でできるのもう四〇年近く続いています。スピーカーボックスやアンプを作って楽しんできました。以下はややマニアックな話になりますが、オーディオについて少し語ってみたいと思います。

私のオーディオの情報源は雑誌「MJ無線と実験」です。特に同誌に長年掲載されてきた「金田式DC（直流）アンプ」が私のオーディオ遍歴の主軸です。スピーカーを動かす電流を作る装置、すなわちアンプ（amplifier）には真空管式とトランジスタ式がありますが、私はトランジスタ式ばかり作ってきました。それも金田明彦氏（元秋田大学助教授）という鬼才が発表してきた金田式DCアンプばかりです。

至ってほぼすべてのメーカーのトランジスタ式アンプがDCアンプに変わってしまいました。それくらい金田式DCアンプは画期的だったのです。

金田氏はその後も「バッテリー駆動アンプ」や「完全対称アンプ」など、まさに天才的な着想によって幾度もオーディオアンプに革命をもたらしてきました。私はそのたびにその斬新さに感動し、新たな金田式DCアンプの製作に挑戦してきました。部品を調達し、回路図と首っ引きになり、半田こてを片手に幾夜も至福の時間を過ごしたものです。

しかし金田式アンプは入手しにくい特殊な部品を使ったり、製作法も独特のものがあって困難な面があり、広くオーディオ



私が作ったアンプ（内部）

ファンに流布した訳ではありま  
せん。一部の熱烈なマニアには  
支持されてきましたが、いささ  
か独尊的な氏の発言もあつたり  
して、メーカーが氏とタイアッ  
プすることもなく、金田式アン  
プそのものが量産されることは  
ありませんでした。しかし、メ  
ーカーが出してきたアンプを振  
り返ってみればその基本的な動  
作原理において結局は金田式を  
模倣し、追隨してきたものが多  
いのです。それがこの三〇数年  
間の日本のオーディオ史の一面だ  
つたように思います。

一方最近では金田式アンプが  
海外でも徐々に知られるようにな  
りました。海外のオーディオ  
専門店では自分のアンプは金田式  
だと言つと「Wow! Great!」と  
言われる場面が出てきたとか。  
やはり本当に優れたものはいつか  
は広まっていく、といういい話で  
はないかと思えます。

私のこれまでの半生は、まあ  
仕事もそれなりに一生懸命やっ  
てきましたが、どちらかと言う  
と遊びや趣味の方に気持ちが行  
つていたことが多かったと思ひ  
ます。そんな趣味三昧を送りな  
がらも不自由なく生活してこれ  
たし、子どもたちも順調に育つ

てくれました。何と自分は幸せ  
な男だろうと思ひます。そうい  
う人生を支えてくれた家族、特  
に妻には本当に感謝しています。  
これからも妻と仲良く、お互い  
の趣味を大切にしながら、益々  
人生を楽しんでいきたいと思つ  
ています。：おっと、私の趣味  
の中で言い忘れたものがありま  
した。旅行、山登り、映画、読  
書、野菜作りなども一応やつて  
おります。

## 不思議の国、 中国

後藤 祐三  
昭和41年卒



五千年の悠久の歴史の国中国、  
東西五千キロ南北五千五百キロ、  
面積は日本の二六倍（世界第三  
位）人口三億五千万人（世界  
第一位）日本の二倍の超大国  
中国、共產主義と市場経済理

論が共生する国中国、貧困と  
繁栄が共存し貧富の差が拡大  
する国中国、五四の民族と九五  
%の漢民族の国中国、二百以上  
の方言と普通語（標準語）の国  
中国、最先端技術と昔ながらの  
農業の混在する国中国、乾燥の  
北部と洪水の南部の国中国、拜  
金主義と儒教精神が共存する  
国中国、深い眠りから覚めた獅  
子中国、外貨準備高一兆八千  
億ドルを保有し世界の工場とな  
つた国中国、一人っ子政策で老  
齡化が進む中国、全てが現在の  
中国です。五年半の香港勤務と  
二年半の北京の勤務にも拘わら  
ず理解出来ない国、不思議な国  
中国です。

○日中国の一国二制度の原則の  
下英国により香港は中国へ主権  
返還。懐かしさで家族全員で香  
港に里帰りしました。返還日の  
前後の四日間は大雨、香港人の  
気持ちを象徴していました。最  
近の香港はその頃の輝きは曇つ  
た様に感じますが、皆様はどう  
思つておられますか？

想像を超える大造形物は圧巻で  
す。北方や西方中国は乾燥地  
帯で建築物が朽ちない為二、三  
千年前の遺跡の宝庫です。

一九九八年六月北京に着任、

仕事や実生活はお世辞にも快  
適とは言えません。表面は近代  
化しても一歩中国内部で生活す  
れば共産中国の弊害が色濃く残  
っています。有名な言葉に「没  
有（メイヨウ）」（ありません）、  
何処へ行つても「没有」。飛行  
機出発スケジュールの変更はごく  
普通で、理由や新スケジュール  
説明も一切アナウンス無くその  
場で待つしかなし、私も北京空  
港で二日間出発便を待たされま  
した。サービスって何？欲し  
ければあなたが待ちなさい！  
This is Communist Chinaで  
す。居住する住居や場所は外  
国人専用に管理されたアパート、  
会社の従業員や社有車の運転手  
も政府人材会社よりの派遣社員  
何処に行つても外国人は差別  
待遇で常に誰かに監視されてい  
る緊張下での仕事や生活、中国  
人との個人的な関係が何となく  
憚られる重苦しい雰囲気です。  
米国との通商協定、WTO加盟  
を間近に急激に改善する経済、  
急増する生産能力と輸出圧力、  
開放（自由化）と締付けの反動

一九八二年初めての海外転勤  
で香港カイタック空港に降り、  
その喧騒に驚愕しその活気に大  
感激をしました。中国本土は四  
人組の処刑により近代化に舵を  
切り、自由貿易港の香港を利用  
した商売は急増、当時の香港  
は輝いていました。飲茶で有名  
な超煩い広東人の街中に、大英  
帝国の威厳や文化がブンブン  
残り、エキゾチックな街香港  
で五年半の海外生活を大いにエ  
ンジョイしました。日本に帰国  
して一〇年、一九九七年六月三

二年半の本土の生活が始まりま  
した。数千年の歴史の国中国、  
その見所は数々あります。北京  
近郊だけでも故宮、天安門、天  
壇公園、北海公園、万里の長城、  
明の十三陵、頤和園、全国的に  
は北の長春・ハルピンの東北地区、  
大連、青島、上海、蘇州、黄山、  
アモイ、広州、深圳、南京、西  
安、成都や重慶、九寨溝、チベ  
ット、桂林、雲南省等、見所は  
数え切れません。移動距離も  
長く交通の便も悪いため数度の  
訪問程度では到底回りきれませ  
ん。私も北京近郊の探索の後は、  
仕事の都合をみて氷点下三〇度  
の冬のハルピン水祭り、兵馬備  
に代表される西安、三峡船下り、  
敦煌、トルファン、河西回廊に  
代表されるシルクロード、外国  
人規制のあるチベットのアサ等  
に家族旅行をしました。どこも

の繰返しの中でも突き進む中国人のバイタリティは強烈です。「政策には対策」は中央政府と地方政府、政治家や官僚と経済界、共産党と一般市民には当然の行動で、外国人には新鮮な驚きです。役所との公式会議には相互監視のため、中国側は必ず二人以上が参加します。偶然一対一になるとパラボラアンテナを外に出さずに国際放送を見られる方法が無いかと役人から聞かれビックリ。大半の間は働いても働かなくても給与は同じの大釜飯喰いでも、一部エリートは我々以上に国際人で

す。六千万人の共産党委員は利権を利用し私腹を肥やし、一部の党幹部は国営企業の株式化に悪乗りし大金持ちになり大威張。大半の留学生が帰国しないことを判りながら、年間一〇万人以上（日本は国費、自費を含め年間一万人程度）の国費留学生を出している中国、不気味な中国があります。今後の中国はどうなるの？

God only knows!



今から三〇年ほど前に遡る。私に毎日新聞の文化部の記者から一本の電話が入った。

「大正一〇年の一〇月頃だと思うんですが、川端康成が初恋の人と瀬古写真館で写真を撮ったという情報があるんですが、わかりますか？」

というのである。私は一笑に付して、全く気のない返事をした。大正一〇年まで戻るとのこと自体が不可能に近かったのと、撮影時点で、この学生が将来のノーベル文学賞作家になることなど、思い図って然らざるべき事であったらうと思われたからである。

ところが……である。

五、六年前であろうか、三木秀生さんという方が、私どもを尋ねてこられて、こう言われたのである。

「私は岐阜の文学、とりわけ、岐阜から繋がる川端文学を研究していましたが、間違ひなく、川端康成は大正一〇年の一〇月九日に瀬古写真館で、川端康成の初恋の人である伊藤初代さんという方と、友人の三明永無さんと三人で写真を撮っています。」

私にとっては、まさに青天の霹靂を超えるべき事柄であった。

三木先生は、本来は平家物語の一線級の研究者でありながら、ひよんなことから岐阜の文学に興味を持たれ、その中でも川端康成の「篝火」や「非常」



「南方の火」などの作品が全て岐阜の町を舞台に書かれていることに興味を持たれ、「篝火に誓った恋」という本（岐阜新聞社刊）を発行され、引き続き、「篝火・非常・南方の火」（川端康成短編集出版編集委員会編）という本も発行されたのである。

私なりに、そのルーツを辿ってみると、その三作品には多くの岐阜という文字が登場し、鶴飼や岐阜城・長良橋を始めとして伊藤初代が養女となって住んでいた西方寺（作品では澄願寺となっている）や、柳ヶ瀬菊人形も登場し、宿となった鍾秀館や港館（現在のホテルパーク）、そして決定的な記録を残した瀬古写真館も登場している。特に「南方の火」の中では、岐阜市の裁判所前の写真屋だった：という出だしで、川端康成は初恋の人・伊藤初代への切々たる思いを込めて、撮影された時の情景を赤裸々に書き綴っている。

そして、伊藤初代を岐阜へ連れてきた東京のカフェのママの養女であった石樽和子さんが伊藤初代に関する数々の写真を所有されていて、小説中の澄願寺が西方寺であることを発見さ

れた故：青木敏郎氏が所有されている写真の中に三人の写真が復写されたものが残っており、その写真の裏には年月日と共に、それぞれの年齢まで記されていたのである。

川端康成の伊藤初代に対する想いは尋常ではなかったようで、友人の三明永無（東京大学時代の友人）と共に岐阜へ赴き、そこで伊藤初代に結婚を申し込むのである。そして、そのある日（大正一〇年一〇月九日）に三人で写真を撮ったのである。

川端康成は伊藤初代の結婚承諾を得て、意気揚々として東京に戻り、今度は岩手県江刺市に居る伊藤初代の父親を尋ねて結婚の承諾も得た。ところが暫くして、伊藤初代から「結婚できない旨の一通の手紙」を受け取るのである。その時の揺れ動く心の様が、「非常」という短編小説（大正一三年 文芸春秋一二月号掲載）を執筆させるきっかけとなった。川端康成にとってはまさに非常事態であり、はかなくも篝火に消えた恋となってしまうのである。

●岐阜の写真のルーツ  
瀬古写真館は明治八年に創業した。その創業ルーツは画期

的である。それ以前に営んでいた「時計屋」を廃業し、初代瀬古安太郎は単身、ドイツのケルン市に向かい、ポトレート写真用のレンズの製作を依頼し、六ヶ月間ケルン市に滞在して完成を待った。その後、一ヶ月ほどかけて帰国し、今度は宮大工にスタジオ用の写真機本体の製作を依頼した（現物が岐阜市歴史資料館に寄託されている）のである。フィルムは当時はガラスに感光材料を塗布して作成し、湿板法から乾板法へと推移した。暫くして感光材料を塗布できるバライタ紙が開発され、現在の「写真」らしき形が整った。師匠は、写真の開祖といわれる上野彦馬の流れを組む小島柳蛙であった。初代瀬古安太郎がドイツへ向かったのが明治五年と言われている。その後三年間で撮影技術を習得し、感光材料の作成技法を学び、撮影機材を揃えて開業したのだから、「驚嘆」以外に言葉が見当たらない。

● 川端康成・伊藤初代・三明永無の三人の写真を解明する  
大正一〇年頃、初代瀬古安太郎は七〇代後半の年齢で、二代目瀬古安太郎（本名 瀬古真一）は四〇歳代近くであったろう。

初代は典型的な職人気質であったが、二代目は一番弟子に撮らせるタイプだったようである。いずれにせよ、瀬古の撮影技法でとられている事は間違いなさそうである。写真から推察すると、この頃撮影された写真と同様なバックグラウンドが見られるし、三角図法のポージングもまた、瀬古で撮ったという匂いがくんとくんと漂っているような写真である。しかも、現在のSEKOの写真にもこの匂いが残っているとすれば、それは是非かかである。

・「南方の火」の中にも、撮影時の撮影者とのやり取りや川端康成自身の細やかな心の動揺、すなわち、初恋の人とともに写真を撮るといふ大胆な行動が縷々綴られている。その本の中では、伊藤初代との二人の写真も撮ったような著述がしてあり、それは、江刺市にいる伊藤初代の父親に見せる写真であったようだ。（残念ながら二人の写真は現存していない）

・この時の撮影者の観点から類推すると、大正一〇年当時、大学生という身分は岐阜の一般人からすれば相当高貴な部類であったし、東京大学生であると

いうことが判明していたならも、撮影者は驚嘆したに相違ない。しかもこの三人のメンバーは撮影者にとっては相当異様なメンバーであったろう。現在に照らし合わせてもお客様としてこういうメンバーでお見えになることは珍しい。

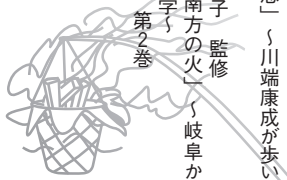
・前日の一〇月八日に宿泊先で「瀬古写真館」を紹介されて予約したとすれば、少なくとも人数や大人・子供の類別くらいは確認していたであろうし、予約せずに行つたとすれば、撮影者はどのように撮影すべきかに相当頭を悩ましたかもしれない。すなわち、撮影するにせよ、誰を主役とすべき写真なのか、三人の間柄に関して根柢り葉柢り聞くことは出来なかつただろう。しかし、当時の写真価格は現在の消費者物価から比較すると、少なくとも一ショットで一〇万円するくらい高価なものであったから、そう簡単に「ハイ、どうぞ」だけで撮影を済ますことも出来なかつたに違いない。

・少なくとも、奇妙なりつちな大学生と美しい少女が現れたという感覚で受け留めて、主役を川端康成と捉え、代金を支払うのも、この人にとらんだのだろう。何故なら、撮影者の感覚としては、一番、メインライト（この場合は左から注がれている）に近いところに重要な人を配置するからである。然も、肘掛け椅子を配置しての肘掛ポーズは、当時は、ハイソサエティの人々を撮影するときにとつたポーズであったのだ。それと、当時の時代背景は女性の手が見えたり、大きく見えるのが、好まれない風潮もあったようだ。

・3人の配置に関しては相当苦慮した形跡がうかがえる。何故ならば、こういうポージングは姉と弟二人という撮影依頼の時に採用するが、このように学生二人と少女という設定の場合には非常に珍しいが、何らかの空気を感じて、すなわち、撮影者は川端康成と三明永無、各々が伊藤初代に対する何らかの想いを察して、年少でありながら中央に配したと思われる。

・いずれにせよ、猛烈な想いを寄せた初恋の人がそばに居るだけに、川端の心は相当、高揚していたに相違ない。しかも、髪を掻き上げる仕草を見たり、そばに居るといふ空気を感ずるだけで興奮したことだろう。

・注目すべきは、伊藤初代の両手が二人の背中か腕のどこかに配置されている点である。こういう場合、例えば姉と弟二人というような姉弟の設定の場合に、姉が弟を想う、というように意味合いで、写真には写らなくても、「そつと後ろに手を回すように」と撮影者は言うものなのだ。一番右側に居る三明永無も伊藤初代に想いを馳せていたことは、撮影者は知るすべもなかつたのだが、通常では有り得ないメンバーでの撮影依頼に、伊藤初代を中央に配してどちらつかずのポージングをさせ、極めて無難な配置で撮影を切り抜けたのだらうと思われる。



参考文献  
三木秀生 著  
『三木秀生 著  
た岐阜の町』  
三木秀生・林正子 監修  
『篝火：非常・南方の火』  
岐阜から繋がる川端文学  
『川端康成全集』第2巻



# 終わり良ければ、すべてよし

田下 憲雄  
昭和41年卒

過去の苦勞話によって現在を裁断するのは、人間が老化した証拠である。

という台詞(せりふ)は、私が今の会社に入社して、二年後に結成された労働組合の委員長に就任した頃のものだ。今から思えば、生意氣そのもの、若氣の至りである。

それから、三〇年以上が経過した。私も過去の苦勞話をしたくなる年頃になってしまった。だから、苦勞話をしようというのではない。過去のことは、現在から見たときの評価であり、現在が幸せであれば、過去のあらゆる失敗が輝いて見え、その逆であれば、あらゆる成功が色あせて見えるから不思議だ。偶有性(Contingency)という言葉をご存知だろうか？茂木健一郎著『脳整理法』(ちくま新書)によると次のような概念だ。○半ば偶然に起こり、半ば必然に起こる

○完全に規則的ではないが、まったくランダムではない

○ある程度は予想がつくが、最終的には何が起きるかわからない

○完全に予想することはできないが、ある程度の脈絡がある

○偶然と必然の微妙な「あわい」脳科学者である茂木は知の世界を二つに分類する。ひとつは「世界知」で、人間が住む世界は「このようになっている」という世界観にかかわるものである。もうひとつは「生活知」で、一人の人間としていきいきと充実した人生を送るために必要な知恵のことだ。

「世界知」は科学と技術によって支えられている。天体や物体の運動といった例外的な現象を除くと、科学が扱うのはまさに確率にもとづく統計的な真理に他ならない。多くのサンプルを集めて、そこに成り立つ傾向や法則を明らかにし、その知見に基づいて世の中をコントロールしようとする。私はリサーチ会社に所属しているから、この理屈は、よく理解できる。

これに対して「生活知」は「一人称の真理」を扱う。茂木は「科学的知見が、統計的な処理に

よる傾向としての真理でしかない以上、科学の知識を運命論のように受け入れてしまうのは正しくない」(同書30p)と主張する。一人ひとりの人生は、まさに偶有性に満ち満ちており、一生に一回しか起こらない出来事によって、個々の人生が変わってしまうことは、私自身が身をもって経験しているところだ。

六〇を越える齢(よわい)を重ねて、「百年に一度」と言われる経済危機に遭遇した。アメリカ型金融資本主義は「世界知」に属することなので、その末路は、確率的に予測できたことかもしれない。残念ながら、逆に世界は金融工学の確率論にコントロールされ、「強欲」の暴走を許してしまった。金融工学の危うさを見抜けたとしたら、同じ確率論の土俵ではなく、「強欲」に対する一人称の違和感しかなかったように思う。

結局、世界は「破綻」によって学習し、新しい秩序を模索するしかなかった。幸か不幸か、私はまだ会社の経営責任を預かる身である。経済危機の影響をひしひしと感じる。まさに、これから何が起こるか「ある程度は予想がつくが、最終的には

どうなるかわからない」という状況に置かれている。

危機の広さや深さや長さは、現時点では誰も予測することはできない。しかし相当、はつきりしていると、私が思っていることがある。景気回復は元に戻るということではなく、サステイナビリティ(持続可能性)をキーワードにした新しい価値観と成長モデルが登場し、歴史的な転換が始まるに違いないということだ。金融はもろんのこととして、環境、エネルギー、医療、教育など、多くの分野でパラダイムシフトが起きるだろう。

嵐が過ぎざるのを、じっと待っている何も始まらない。こんな時だからこそ、「一人称の真理」に従って行動し、出会いを作り、その「真理」を鍛えることが必要だ。

「終わり良ければ、すべてよし」。最近、こんな言葉を使うことが多くなった。「本当の終わり」にそう言えることを願いつつ、世界知と生活知、偶然と必然の狭間(はざま)の中で、私の悪戦苦闘は継続中である。

# 100%の安全をめざして!

滝谷 博志  
昭和41年卒



私は昭和四七年に医学部を卒業以来、心臓血管外科医として病院勤務のかたわら、最近は医療安全という分野も担当しています。医療安全とはいかに安全な医療を提供するか、裏を返せばいかに医療事故を防ぐかということになります。ここで医療事故という言葉に誤解があると日ごろから感じているので改めて解説すると、医療事故とは医療者の過失の有無にかかわらず患者さんに有害な事象が発生したことを意味します。つまり過失のない合併症も場合によっては含まれます。もっと身近な例を挙げると患者さんが自宅で転んでも問題にはなりません、

病院内で転ぶと原因にわからず医療事故といわれます。

ここで安全管理を考えるとき、忘れてはならない大事なことがあります。

"To err is human"つまり人間

間というものは必ず誤りを犯すという事実です。このことはいかんともしがたい事実で、医療に限らずどの分野でも言えることです。私を含めてみなさんもおそらく犯罪は絶対に犯さない自信はあっても、交通事故を絶対に起こさない自信はないと思います。ですから安全を確保するには、人間は必ず誤りを犯すことを前提にした上で、いかに間違いをしないシステム、環境を整備するか、あるいはもし間違えても事故につながる前にくい止めたり被害を最小限にするシステムを構築するにかかっています。しっかりとしろ！気をつけなさい！などの精神論では事故は減らないのです。それではわれわれはどのくらいの頻度で事故が起きると危険と感じるのでしょうか？すなわち何%以下の危険率なら安全と認識して受け入れるのでしょうか？交通事故、列車事故、航空機事故、天災、どれも可能性はゼロではありま

せん。でもわれわれは車に乗り、新幹線に乗り、飛行機に乗り、日々生活をしています。確率的に危険は低いと認識すれば、一応安全だと許容し受け入れていくのです。ところが世の中には受け入れがたい危険なこともあるようです。たとえばバンジージャンプの死亡率は統計的には0.1%といわれ、損害保険の対象からはずされているそうです。千回やったら死ぬかもしれないといわれて挑戦する人はそうはいないと思います。では医療事故で死亡するような極端なことがどれくらいの頻度で起きるのか？正確な数値はなかなかつかめませんが、ひよっとすると交通事故死の確率よりは高いかもしれないですね。バンジージャンプはやらなければそれまでのこと、やった人の自己責任だといわれて終わりですが、医療に関しては誰も本意ながら避けては通れません。ですから少しでも安心して医療を受けられるように医療界ではこの医療安全が重要課題として取り組まれているのです。ところが医療事故というのは複雑な要因が絡んでいることが多くなかなか一筋縄ではいきません。そこで薬を間違え

て渡してしまった以下のたとえ話を読んで皆さんも考えてみてください。 「あなたは病棟勤務の看護師です。いま朝七時三〇分、もうすぐ長い夜勤勤務も終わろうとしています。あなたは受け持ち患者さんの中居さんに飲んでもらう消化薬のスキリンを準備しているとき、木村さんという患者さんが急変してほかのスタッフはそちらに行ってしまうしました。人手が足りなくなつて隣の部屋の稲垣さんに抗癌剤のドツキリンを渡すように頼まれました。ナースステーションを出ようとしたら草剪さんに電話がかかってきたのでそれを取次ぎ、部屋に行く途中、ボケ気味の香取さんがトイレで立てなくなっていたのを助けました。せっかちな中居さんは配薬が遅いとすぐ怒るので急いで部屋に行つて薬を飲んでもらいましたが、それはドツキリンのほうでした。」

みなさんいかがですか？この誤薬投与のたとえ話の中には、いくつかの要因を指摘できます。夜勤明けの一番疲れている時間帯であったこと。スキリンとドツキリン名前が何となく似ていたこと。本来の業務でないドツキリンの配薬を頼まれてしまったこと。それで二人分の薬を持つていったこと。電話の取り次ぎ、転倒患者の介助を途中でしたこと。怒りやすい患者さんなのであわてて薬の照合を忘れて渡してしまったことなどです。

この事例を分析すると患者さんに薬を渡す時に確認をしなかったのが、不注意、マニュアル違反であることは間違いありません。ですが、それだけかたづけられてしまつて本当に再発を防ぐことができるでしょうか？そこにはマニュアル違反に至つた様々な誘因が隠れているように思われます。このような誘因が重なつて事故が起る場合以外に、やっかいなことに人間の宿命ともいえるまた別の現象が誘因となることもありえます。すなわち確率論でいくと、普通の人間はひとつの作業は〇、九九九%の精度で行なえるとしても、二五回のステップを踏んだり、繰り返すとその精度は〇、九八%に落ち、一〇〇回繰り返すと〇、九%に落ちてしまうのです。つまり工程が複雑になるほど人間の精度は落ちていき、一〇〇回目には一〇〇倍の誤りを犯す可能性が出てくるのです。われわれも電

話の掛け間違いは何回かに一回はやってしまいますね。慣れた作業の繰り返しになかにも危険は潜んでいえると言えます。そうすると安全を確保するためにはどうしたらよいのでしょうか？

労働災害を考えるうえで、有名なハインリッヒの法則というものがあり、これはひとつの大きな事故が起る底辺には三〇〇もの事故には至らないヒヤリハット（ヒヤツ）したり、ハットとするようなことの意味です）といわれる事例が隠れているといふのです。医療安全の分野でも大きな事故の芽となるこのヒヤリ、ハットをどんどん報告してもらつてそれを分析し、防止策の先手を打つことが重要といわれています。

みなさんもおそらく何らかのかたちで事故防止、安全確保にいつも心を砕いていると思います。私も必ず誤りを犯すといわれる人間が数多く携わる医療の現場で、安全確保に自分なりに日々努力をしています。限りなく一〇〇%に近い安全を求めて、どこまでも続くわれわれ医療人の永遠の課題と言えるでしょう。

## 市民の政治力・議員の市民力

田中 和子

昭和41年卒



年末年始のお休みに入り、静まりかえった都立駒込病院の棟エレベーターに同じ階から一人の女性と乗り合わせ、同じ階で降りた。乗っていたのは二人だけ、軽い会釈後彼女は売店へ、私は遅い昼食をとり食堂へ向かった。しばらくして彼女が「一緒にさせて頂いてよろしいですか」と私の前に現れた。同年代に見受けられる彼女は、夫が肝臓がんの手術を無事終え、お正月は病院で過ごすこと、病院までは埼玉の自宅から二時間以上もかかるので近くのホテルから通っていること、駒込病院で如何に手厚い看護を受けている

かなど、熱心に語ってくれた。私は自分だけ一方的にしゃべり続ける人は苦手であるが、なぜか彼女の話はだまって聞いていて心地よかった。家族の死を覚悟した人が、再び一緒に生活できる喜びを得て、言葉は全てのもへの感謝となつて表われていた。感謝に満ちた会話はこんなにも相手まで心地よくすることゝを改めて教えられた。

食事を終え、「笑顔で聞いていただけありがとう。感謝がまた一つ増えました」という言葉を残し彼女は席を立った。区議会議員活動も二期目に入り、私のところへ多くの相談がある。私は相手を心地よくする会話をしているだろうか。そして笑顔で他人の話を聞いているだろうか。反省である。

私は、「ここを変えれば区政は良くなり、多くの区民の福祉の向上につながる」と判断した相談には動くが、個人的な利益のためだけのお願いはいっさい応じないことにしている。行政と議員の馴れ合いはお願い事から始まり、議員は議会で鋭い質問ができなくなる。

私は議会では無所属議員で小教派であり「こまめの歯ざしり」

も十分味わっているが、区が決めたことをひっくり返すことも行ってきた。勿論ひっくり返せるのは、小教派議員の力だけではできない。

小学校の統廃合と公園の廃止という二つの事例をお話ししたい。

区立小学校統廃合にあたり、教育委員会は学校数の減少と効率性の観点から、小規模校を廃止し、大規模校に児童を集中させる計画を決定した。統合はするものの、教室数が確保できず、四年生だけを統合される学校に通わせる計画、ある学校では一年生から三年生までと四年生から六年生までの校舎を徒歩一〇分ほど離れたところに別々に設ける計画など、教育的観点が欠如した学校統廃合計画に私は反対した。議会の大勢はこの計画に賛成であった。この計画が子ども達や地域に何の効果ももたらさないことに気付いた区民からも反対の声が上がった。地域ごとに二二回行なわれた説明会の会場では、私の仲間たちがデータをもとに作成したこの計画に反証するチラシを配り地域住民に訴えた。二年間の闘いの末、教育委員会

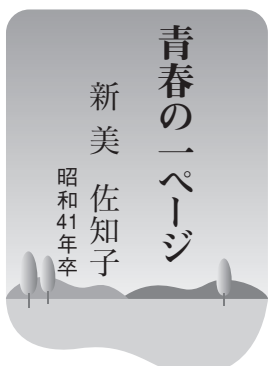
はこの計画を廃案にした。声をあげる区民が増えたことはなにより心強かった。

もう一つは、公園の廃止である。関東大震災の復興を記念して造られたすばらしい意匠の公園が文京区に残っている。区はこの公園に体育館を建設する計画を打ち出し、都市計画審議会に諮った。またも議会の

大勢は賛成である。区民から歴史的・文化的価値のある公園の廃止に反対の声が上がった。造園学会を始めとする多くの学会からも反対の声が上がった。いろいろ調べるうちに私は、区立ふるさと歴史館が計画したこの公園に関する企画展の開催を区が撤回させ、企画展のお知らせを掲載した「歴史館だより」を廃棄させ、改めてこの部分を削除した「歴史館だより」を発行させていたことを見つけた。驚いたことに書類(いつ作成されたかは不明)には、企画展を掲載した「歴史館だより」を廃棄した日付がなんと納入日より早くなっていた。区は公園廃止をめぐる、隠蔽の一角が崩れ始め混乱を呈していた。最終的には都市計画審議会の学識委員の賢明な判断により、区へ差し戻

しとなり、区は公園の廃止を断念、体育館は別の場所に建てられることになった。しかし、区に反旗を翻した都市計画審議会の学識委員は一人を除き再任されなかった。

これらの事例は、区民やそのネットワークと議員が情報を交換しつつ、区を論破する材料をそろえ共に闘ったことにある。市民の政治力と議員の市民力の協働により得たものであり、小教派が議論において多数を制するという民主主義が議会にまだ存在していることを示すものである。まもなく二〇〇九年第一回区議会定例会が始まる。笑顔で鋭い質問を闘わせよう。



### 青春の一ページ

新美 佐知子

昭和41年卒

一九六三年入学の私たちは、第一次ベビーブームで生徒数も多く、一クラス五五名、一学年五五〇名で教室の後ろの壁まで生徒で埋まっていた。その年にビートルズのデビュー曲「ラブ・

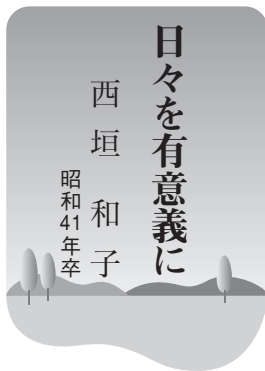
ミー・ドゥー」に続く第二弾の「プリーズ・プリーズ・ミー」が大ヒットして、ラジオからはいつもビートルズが流れていた。授業中は居眠りをして、数学の先生に「チョーク投げ」をプレゼントしていた。いた事しか覚えていないけれど、遊びの思い出は一杯だ。放課後、黒板にビートルズのメンバー四人の名前を書いてそのまま帰り、翌朝ホームルームの先生が、苦々しい顔で黒板を消した。昼食時間、放送部がビートルズの最新盤をかけ、生徒達は歓声をあげて喜んだけれど、生活指導の先生がとんで行って中止させ、ガツカリした。修学旅行の広島

の宿での思い出はさらに鮮烈だ。一部屋二五名の女生徒は、消灯後持参したラジオをつけたらビートルズの、のりのいい曲が流れて来て、誰彼ともなくツイストを踊りだし大いに盛り上がった。その時、懐中電灯を持った見回りの先生の気配を感じた。薄明かりの中あわててフトンにもぐるうとした一人の女性徒は、机で脚をおもいっきり打って



東芝EMI株式会社CD

黒あざをつくり、「名誉の負傷」といまでも語り草だ。大学一年の夏に日本武道館でビートルズの公演を見た時の興奮は忘れられない。高校卒業してすでに四年。今もビートルズを聞くたびに、私の青春の一ページは蘇ってくる。今も心のより拠となっている一ページである。



私達、四一年卒は第一次ベビーブームの世代で、中学生の頃からそれを感じ始めていました。高校入試の頃は中学三年間をい

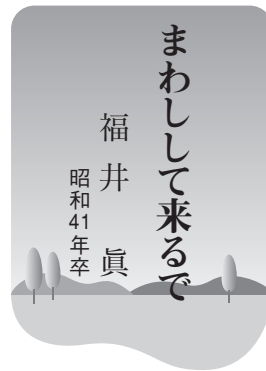


い加減に過ごしていた私は、最後に滑り込んだという感じですが、又、岐阜高校で頑張っていたらと思ったときはもう遅く、勉強嫌いな私としては三年間努力という事をしないで過ごしてしまいました。それがいつの間にか還暦を過ぎ、今時の言い方ではアラフォーならぬアラカン（アラウンド還暦）というらしいです。結婚をして岐阜を離れ三七年、海外生活も経験し、主婦として平凡に過ごして現在は東京に住んで、主人も会社を退職し年金生活に入りました。私は、一三年程前からひよんな事で人形作りを始めました。最初は陶芸をしたくて申し込んだのですが、応募者が多く一年待ちと言われ、すぐ隣でやっていた人形教室に行く事にしました。アンティ

ークドールから始まり、現在はオリジナルの「じゃばねすく」シリーズとして創作人形になりました。それがずっと続けてやっていたお陰でこの頃は銀座のデパートとか美術ギャラリーから出展の音が掛かるようになり嬉しくもあり苦しくもあります。自分の人形が創れるようになるまでに一〇年程掛かったような気がします。それまではいわゆる主婦の気まぐれな趣味の延長でやっていたのです。ところが先生やギャラリーの方達に認めてもらえるようになる其自然にぐんと自信が付き少しづつですが良い作品が出来てきたような気がします。自画自賛ですが、でも、こんなに長く続けられるとは思っていませんでした。人形を作り始めて三年目くらいからポタニカルアートを習い始めこちらも続けて勉強しています。二つの事を同時に力を入れなければいけない時、例えば人形展とポタニカルアートの展示会が重なる場合は、主婦の方を少し手を抜かさせてもらい何とか切り抜けています。有り難い事に主人も理解してくれています。だからこそ頑張ってもう少し続けてみようかなと言う気持ちに

なります。私は二人の息子がいます。それぞれ子供の親同士つながり、そして自分の二つの会の仲間、又、そのつながりと、今では本当に沢山のお友達が出来、言うまでもなく在居の岐阜高校の友人もこの頃は時間が出る人たちが多く（特に男性陣）なり、会う機会が増えました。高校時代はあまり記憶になかった仲間も寄ればすぐに打ち解けて昔からの知り合いのようです。そのきっかけは恩師の話とか何組の誰々さんという話が盛り上がり、そのうちに学生の頃の顔が浮かんできます。それでも人数の多かった私たちの事、全然接点のなかった方も一杯です。集まれば同窓生と言うだけで皆すぐに仲間になれるのは嬉しい限りです。そんな仲間たちも私の人形展とかポタニカルアートの展の時には応援をしてくれます。それに励まされ、兎に角、手と目が働いてくれる間は続けていこうと思っっています。絵の先生に「絵もサインも先ず百点を描いてからよ。」と言われ、それを目指して来ましたがまだまだモノになっていません。でも、いつか人形と絵の個展を開けることを目標としてこれからも努力を

して行きたいと思っています。この気持ちが生時代には芽生えていたら人生違っていたかも知れませんが、でも、今のこの毎日がとても充実していると思っ



「そしたら『まわしして来るで』、と云われた」

Y応援団長の言葉をきっかけに、近くで談笑していた会員達はいきなり長い時間を遡り始め

ました。岐阜高校生の時代が街の匂いまで含めて脳裏に甦ってきたようです。常連のNさんは「そういうえばああいう言葉もこういふ云い回しもあったね。」とはしゃぎます。「『もうやっこ』というのでも岐阜の言葉だよな。」と郡上出身のS君に質す会員も居ます。皆岐阜から首都圏に移ってきて、今はこの地で暮らしている人ばかりです。普段は郷里の言葉などすっかり忘れていたのに、この時は岐阜弁がひとしきり飛び交いました。顔つきまで昔に戻ってしまったようです。

S 四一岐阜卒 首都圏なりゆき同期会の一コマです。私がこの同期会の幹事役に指名されたのは数年以上前の事です。

それ以前も昭和四一年（四三年も前です！）卒業の同期生の集まりは肅々と行われていたようです。「ようです」とは、私自身こういう集まりが嫌いで殆ど出席しなかったからです。

そういう私が同期会の次期幹事に指名されたのは本心では迷惑な話でした。

入試に合格した最初の朝礼で「今年本校からN大学に××人

合格した。諸君らは是非三桁の太台に乗せて欲しい。」と訓示され、「何だこの高校は！」といたく失望したのは私の記憶に鮮明です。団塊のピーク世代の岐阜生には、当時上と下しか見ないようなところがありました。それで高校時代を通じて私の友達は六人しか居なかった！そんな私に在京同期会の幹事なんて不自然で理不尽でしょう。

然しY応援団長など数人に巧く乗せられ、とうとう幹事役を承る羽目になりました。何しろY君は岐阜の現首長F君を生徒会長に押し立てた黒幕だったそうだから、そんな人に楯突くなど無理な話です。

そこで私が幹事役を引受ける上で幾つか条件を呑んでもらいました。

①連絡は原則インターネットのみ。葉書は出さない。  
②会費は党派の左右で決める。上戸か下戸かと云う事です。以前は会費に男女格差があったようです。しかし今酒豪は女性にむしろ多いのです。

③開催はなりゆきで決める。春は花見、初夏は紫陽花見物、

秋は散策、会員の身辺に変化があればそれで、何となく寂しいから・・・と開催理由は千変万化。尤も最近は定年退職祝いが多くなりましたが。

④個別挨拶はやらない。こういう集まりでは名刺の交換や自慢たらたら近況報告が定番です。しかし当会では「上と下しか見ない」気風を引かずしては下らない。「□◎さん？○△です。いやあ改めて初めまして！」そういう雰囲気が良い。

高校時代は全くの没交渉同士でもこうして会って会話すると、「おう！中々いい奴じゃん！」となる事が多いのです。

⑤幹事の呼称は「就寝幹事とする」。

これは無論私自身がいつでも逃げられるようにする為です。全くなりゆきでカジュアルですからその都度出席者の顔ぶれは変わります。でも毎回二〇名弱の出席者を得て、楽しく一宵を過ごしています。会員の皆さんも楽しみにしてくれているようです。

人間は色々な形や所で縁を作ります。そしてこの縁は生きて

いく上で大事な糧でもあります。地縁、血縁、職場の縁、…。同窓会や同期会は学窓の縁という事で、部分的に地縁とも重なります。

縁を全く持たない人などは有り得ないと同時に、縁を新たに作っていくのは大変に困難です。「青春の一時期に岐阜高校で共に学んだ」という縁は、我々が既に等しく共通に持っています。新たに開発する必要はない。

又、縁は功利的にのみ考えるべきではありません。我がなりゆき同期会では会員のSさんが旅先で不慮の病に倒れた時、有志のネットワークで会員同士が連携し、スピーディに最良の病院に搬送できたなどという事がありました。困った時も縁なのです。又特段の事由もなく集まっても、前置きや堅苦しい挨拶も無しに、いきなりタメ口で会話が出来るのは実に中々良いものです。

世界中がネットワーク化されてグローバル化が進み色々便利になりました。然し現在の金融・経済情勢のように、その所為で「他人の尻を此方で拭かされる」ような事にもなります。ケータイやネットですらいつでも誰とでも



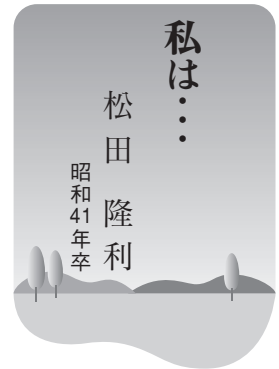
皆さんそれでは次回まで

知り合える代わりに、一方で匿名性は強くなり、個人としての孤独は深くなっています。

こういう中では、学窓を縁とする同期会(平面)や同窓会(立体)の持つべき意味や意義はいよいよ大きくなっていくのだと、(今頃になって)私は思うのです。

さて冒頭に登場したY応援団長は、中学時代に四国から岐阜に引っ越してきた「移民」です。四国では「仕度をする」のを「まわしをする」とは云いません。

生徒会だかの用事で或る女子生徒に来て貰う必要があり、自宅まで迎えに行ったY応援団長は「まわしして来るでちよっと待ってとって」と云われて、彼女の裸のまわし姿を想像してしまい、待っている間中ドキドキしていたのだそうです。



私は... 松田 隆利 昭和41年卒

私は、一九六六年に岐阜を卒業し、一九七一年に京大法

学部を出て政府職員となり、三年の勤務を経て二〇〇七年夏、総務省の事務次官を最後に退官した。総務省は国の行政管理、地方自治体、通信放送、消防

と幅広い所管だ。次官在職中岐阜県の裏金問題が騒ぎとなり、地方自治体を所管している立場から記者会見で「言語道断だ」と言ったことが、岐阜でも大きく取り上げられたと聞いた。

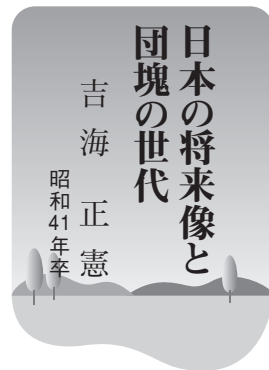
長い政府職員としての生活の中で郷土岐阜との関わりは殆ど無かったが、最後にこのような非難の発言をすることになって残念だった。幸い岐阜同級の古田肇君が知事となり、梶原前県政の負の遺産だった裏金問題を解決してくれた。この度古田君が再選されて、真に目出度い限りだ。経済を始め情勢は厳しいが、古田君は元気で豊かな岐阜県づくりに邁進してくれる

だろう。

古田君は、岐高生徒会長で国体の聖火ランナーという文字どおり健康優良児だったが、私は社会が悪い、世の中を変えるべきと文句を言う不平不満分子だった。ところが京大に入ると、時は全共闘運動の最中で滅茶苦茶だった。勉強も碌に出来ず、紛争を遠くから見ているだけだった。

社会改良の思いは、政府職員となり行政管理庁という役所に入ってから実現できるようになった。一九八〇年代は日本の高度経済成長後の行政のあり方が問われ、国鉄、電電など三公社の民営化に従事した。一九九〇年代は日本のグローバル化に対応し、行政の透明化のため情報公開法の制定や証券取引監視委員会の創設を推進した。二〇〇〇年代に入り政治主導、内閣機能強化のため、中央省庁を統合再編し、経済財政諮問会議の設置等を行った。行政改革は私のライフワークとなつて、退官後も政府から委嘱され一つは国家公務員制度の改革、もう一つは地方分権を進め道州制を目指す改革に参画している。いずれも明治以来の官

僚制や府県制を変える難題だが、二一世紀の日本のため為遂げないといけない改革である。国家公務員制度改革本部事務局次長 地方分権改革推進委員会専門委員



日本の将来像と 団塊の世代 吉海 正憲 昭和41年卒

還暦を過ぎると自分のことよりも社会や後世のことが気になるものだと先輩の言葉を、なるほどと実感する境遇に私もなりました。数の年齢よりも行動としての年齢(つまり行動学的には還暦に達していない)を重視してきたつもりですが、それでも昨今の日本のことが気になります。

国の豊かさを測る尺度としてGDP(国内総生産)が一般化しています。確かにこれにまさる指標はなかなか容易ではありません。このGDPで見る国の盛衰に大変気がかりなことがあります。ご存知のように日本の高度成長を実現してきた過程には製造業の目覚ましい成長がありまし

た。ところが九〇年代初期のバブル経済崩壊後の軌跡を見ると、製造業のGDPは、単にその相対的ウエイトを小さくしただけではなく、絶対額においても縮小しています。一方、欧米を見ますと全体としての経済成長率が日本よりも大きい中で製造業においてもその絶対額を増大してきています。もはや製造業は衰退したと言われる英国ですら、製造業はそのGDPを増加させているのですから、日本の現象は特異的と言わざるを得ません。

バブル崩壊後の一五年間の国際統計を見ますと、日本の経済成長率がOECD平均を上回ったことは一回もありませんでした。この間に一人当たりのGDPがどんどん低下して、いまやOECDの中で中の下にあるようです。今回の金融危機によって一時的にはこれに変化が出現しようが、この背景には構造的な問題があると思います。

その一つは、GDPは国内生産ですから製造業が海外に進出するとその生産はカウントされないこととなります。いかなれば英国の製造業GDPはそこに進出した日本企業によって計上されているということになりま

す。その結果英国の一人当たりGDPは維持されます。ところが日本に拠点形成として来る外国の企業は、製造業のみならず全産業にわたって著しく少なく、日本からの進出と受け入れのバランスは極端に進出に偏っている状況にあります。なぜそうなのかということを実験に考える必要があります。また二つ目には、製造業が成長の基点である時代は終わり、いまや第三次産業としての金融・保険業やサービス業の時代だともよく言われます。実際にGDPでは第三次産業は第二次産業を上回り、就労人口はとくに第三次産業優位な状況にあります。しかし問題はこれらの三次産業の成長性が高くないということです。欧米の半分しかありません。なぜでしょうか。

要するに日本は成長基盤としての製造業の縮小を見る一方において、その役割を代替的に期待される三次産業の成長性が低いという誠に困難な状況にあるわけです。一人当たりのGDPが低下の一途にあるというのもこの現実からは仕方のないことかと思えます。

経済学の公式では、国の成長

性は生産性上昇率と人口増加率によって規定されるとあります。残念ながら後者の人口増加率は明らかにマイナスです。将来外国から移住者を受け入れるか、出生率に劇的な変化が出ない限りこの傾向は続くでしょう。では生産性を高くすることはどうか。これはやり方によって大いに可能なことですが、問題は何ぞか生産性上昇に力強さがな

さて気分が暗くなることに耐えてもう少し現実を見ながらこの国の将来のことを考えて見ましょう。生産性という経済学の概念は庶民感覚的に言えば、活力という言葉に置き換えられるかと思えます。生産性上昇率はかばかしくないとすることは社会の活力に何か問題があるということことです。生産性に直結する企業の投資活動から始まり、新しいビジネスを生み出すベンチャー活動、NPOなどの社会活動、そして消費者の消費行動などなどこれらの総体が社会全体の生産性として反映されます。日本の実力は、製造業の技術力や研究活動のレベルの高さ、あるいは消費者の高い品質志向で示されていますが、こうした局

所的な強さは過去のようなキャッチアップの時代には自ずから目標共有の中で全体の強さになり得ました。しかし世界全体の変化が速く、不確実性が高い時代環境の中で大事なことは、こうした局所的な強さを全体の力に反映・統合していく設計的な思想でとらえることを必要とすることです。

たとえば人材という視点で考えて見ましょう。あらゆる生産活動には必ず人材が介在します。人口減少の日本社会ではそれによる活力の衰退を懸念するものですが、有能な若い世代が海外から集まることで社会の活性化は大いに促されます。文科省の留学生増加政策は対外的な日本の貢献という意識が強いようですが、残念ながらその効果は希薄でアジアの有能な人材は欧米志向第一にあるようです。むしろ有能な若い世代は日本社会にとって価値の高い大事な資産であること認識すれば、単なる留学政策から彼らの就職政策、社会在住政策と脈絡のある政策を動かす必要が出てきます。現実はこちらになっていません。むしろ研修という名目のもとに社会側に便利な就業形態として社会

問題を生み出している状況にあります。

同様に社会投資の視点でも政策の脈絡に問題があつて要素的な強さを新しい総合力として発揮できない場合があります。たとえば道路整備に公的資金をどの程度投入するかという課題があります。現下の不況で旧来の公共投資促進派が勢いを吹き返しつつあります。社会資産の形成や地域振興としてその意味を否定するものではありませんが、なぜ道路の延伸にのみ議論が集中するのか理解できません。道路という公共財は様々な可能性を秘めており、たとえば昨今の地球環境問題や社会の安心・安全の視点からハイテクを活用した多様な価値を織り込むことができます。一部にはITSのような試みが始まっていますが、しかし大半は旧来思想の道路を作るか否かのデジタル思考の議論に終始しているのではないのでしょうか。

私が言いたいことは、今の日本社会はこれまでに培ってきた個々の力を統合し新しい価値体系にそれを活用していこうという意識や意欲、意思に欠けているのではないかと心配です。

こうした一種の構造転換は社会の中に利害対立を生み出すことは避けられません。しかし未来志向を失えば間違いなくその社会は衰退します。ましてや少子高齢化の傾向にある国においては、生産性は個々の要素と全体設計の調和・共鳴があつて初めて力強さを体現できます。世界的な構造変化が感じ取られる今だからこそ、日本の将来のあり方をしっかりと語り合い、間もなく行なわれることが間違いなく衆議院選挙における焦点に置いて欲しいと願っております。

現在の状況は年金問題のような個別の分配論争(事務的ミスで資格を失う国民が多数存在するという事態は、基本的政策論に入る前の明らかな行政の失態)に終始する懸念があり、大事な課題であるからこそ日本の将来像としての視点から社会全体の活力を形成する一環として個々の問題を判断するということらえ方にならなければ、個別問題に根ざした世代間闘争という歪曲された焦点に誘導される恐れがあります。

還暦を迎えた私たち団塊の世代の責任は、若い世代に未来志向を強く持つてもらえるような

社会環境を整えることだと思  
います。投票人口として政治に大  
きな影響を及ぼす力を持って  
いる私たちだからこそそれを実現  
できるのではないのでしょうか。

### 曖昧な記憶

吉崎 正則  
昭和41年卒



このごろ気になりだしたのは、  
元々良くなかった物覚えがますます悪くなっている一方で、物  
忘れが日に日に良くなっている  
ことである。記憶が曖昧になっ  
ていくことに、これが「古い」  
を感じていくことなのかとも思  
うようになってきた。

岐高時代の記憶で、一つ確認  
しておきたいことがある。私の

思い違いもあるだろうし、虚実  
ない交ぜになって「面白おかし  
い逸話」に作られてしまった部  
分もあり得るような記憶でもあ  
る。「本当はこうだった」を憶  
えている方がいらっしやれば、  
是非とも、その事実を教えてほ  
しい。

昭和四〇年（一九六五年）の  
二月頃（確か二年生の後期の終  
わり頃、もうこの時点から記憶  
があやしい）、私は新年度の生  
徒会長選挙の「選挙管理委員長」  
に選ばれた。縮切り間近になっ  
ても立候補者はなく、選挙管  
理委員会で候補者を推薦するこ  
とになった。縮切りの前々日だ  
ったと思うが、われわれはI君  
を推薦することにし、生徒課（当  
時そう呼んでいた？）に報告に  
いった。しかし、生徒課の先生  
方（どなただったか記憶にない  
が、お二方だった）は了解をし  
てくれない。窓の外は真っ暗に  
なっても、「なぜダメなのか」  
の説明がない。ひとりの先生が  
席を外された後だったと思うの  
だが、私と部屋に残ったもうひ  
とりの先生が、以下のようなこ  
とを話された。

一、我が校の生徒会長は応援  
団長を兼任する。

二、今年、岐阜国体がある。  
三、できれば、体育系のクラブ  
に属していることが望まし  
い。

確かにI君は「新聞部」であ  
ったし、校旗（応援団旗）を  
長時間立てていく体力があるか  
には「？」がついた。しかし「国  
体」の意味がわからない。

しばらく問答を続けている内  
に「体育系でないと岐大に」と  
いう言葉が先生の口から出てき  
た（この言葉の意味は、後日わ  
かるのだが）。ともかく今年の  
生徒会長は「岐阜国体と絡んで  
体育系が必要条件」ということ  
は何となく理解した。

最終的には誰が適材かという  
ことになり、何人（？）かの名  
前があがった末、生徒課は柔道  
部のF君が最適と考えているこ  
とがわかってきた。このへんにな  
ると、私も根負けしていたよう  
だった。といっても私はF君の  
顔も人柄も知らなかったの彼  
を推薦することができなかった。  
翌日にF君の意思も確認する、  
ということになった。

翌朝、この記憶が甚だ曖昧  
なのだが「逸話」ではこうなっ  
ている、F君の顔を知っている友  
人をつれて私は校門で待ち伏せ

をして、登校してくる彼を生徒  
会室に拉致し、無理矢理に生  
徒会長を押しつけた。

F君のことを知っている人を  
探したのは、記憶がある。また  
生徒会室でF君と話をし、彼の  
立候補の意思を確認したこと。  
また彼と話をした結果、人柄に  
好感を持ち推薦するに相応しい  
と感じたことも憶えている。つ  
まり「生徒会長を押しつけた」  
のではなく、会長になる気があ  
るかを確認したつもりだった。

最終的にF君は立候補するの  
ではなく、選挙管理委員会が生  
徒会長に推薦することになった。  
ただ、私が校門で待ち伏せし  
ていたかについては、記憶が欠如  
している。もう一つの「拉致し  
た」ことも違うと思うのだが、  
そういった状況は、私に前歴が  
あるので可能性がない話ではない  
ような気がする。曖昧なのだ。

前歴とは、一年の時、私の所属  
していたクラブの部員を勧誘す  
る際、人違いで他のクラスの部  
屋に飛び込み「O君は君か？」  
と部屋に連れ込んでM君を強引  
に入部させたこと（もちろんO  
君も入部してもらった）である。  
そうした強引さが私にあったと  
思うと、F君からしてみれば「拉

致され、押しつけられた」こと  
になるかもしれない。

最終的には、会長にF君、副  
会長にI君が決まり、他の執行  
部も管理委員からの推薦もあり  
順調に決定して、私たちの仕事  
は終わった。書記（そう呼んで  
いた？）に親友のY君とクラブの  
後輩であるSさんにも加わって  
もらった。しかし、よく考えれ  
ば生徒課主導の「人事」でも  
あったわけで、それを受け入れ  
た私が「体制迎合主義」と非  
難されたことも故ないことでは  
なかった。

その年の秋、岐阜国体の開会  
式で聖火の最終ランナーとして  
登場したのが、生徒会長のF君  
だった。二〇一二年に二回目の  
国体が岐阜で開催されるようだ。  
体力と健康が許すのであれば、  
岐阜県知事としてF君には、若  
い最終ランナーに聖火をバトンタ  
ッチしてもらいたいと思っている。







僕は、岐阜卒業生の中では、少々変わっているかもしれない。それは、いまだに千年以上の昔のかぐや姫の時代の仕事を生業（なりわい）にしているからである。

以前、青森県の三内丸山遺跡（縄文時代）を見学したことがあった。その発掘品の中に、すっかり炭化してしまっていたが、ぶどう蔓で作ったポシエットを見つけた。ということは、僕は三千年以上前の仕事をしているのかという不思議な気持ちになったことがある。

今、僕は還暦を迎えて静かに昔のことを振り返るようになった。岐阜は昔から良質な竹を産した。その竹を使って岐阜提灯、和傘、うちわ等が作られてきた。しかし、いずれも竹は、和紙の中に隠れてしまうか、漆で塗りこまれてしまい、日本の竹だけがもつ表皮の美しさが、前面に

押し出されることは、なかった。僕の祖父である初代竹遊齋はこのことを深く憂え、竹そのものの美しさを世の中の人達に知ってもらいたいと考えた。

竹は不思議な素材である。始め、緑色をしていた青竹の籠が、やがて白くなり、何十年も使うと髓甲色に変わっていく。大切に使えば使う程、確実に

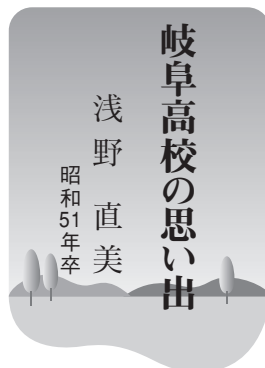
僕は、職業選択のとき、明治時代に海軍を退官して始めたこの初代の夢をどうしても叶えなかった。三代目の宿命だとも、思った。京都で修行も積み、その文化にも触れた。二代目である父からは、地元の技術も学んだ。

そうやって竹一筋で、僕の家は岐阜高校の歴史と同じぐらいの年数を積み重ねていった。

竹は、竹を割ったような性格とか、破竹の勢いといったような比較的良いイメージがあるが、決してそんなことはない。曲がっている竹もあれば、節くれだつて使い物にならない竹もある。僕が選ぶ絶品の竹は、千本に一本あるかなしだ。

雪の中、長良河畔の竹藪に行き、自分の気に入った竹に出会

った時、白川郷の合掌造りの家の天井の煤竹を使って、傑作が出来た時、僕は至上の喜びを感じる。これからも、もっと日々精進して、岐阜の伝統文化に貢献していきたいと思っている。



## 岐阜高校の思い出

浅野 直美

昭和51年卒



岐阜高校を卒業して、もう三

二年になりました。高校時代の記憶は遙かかなたですが、断片的に思い出すのは、初めて経験した下宿生活でしょう。私は益田郡金山町（市町村合併により、今は下呂市）の出身です。当時は大学区制をとっており、金山町からも岐阜市の高校へ進学できました。朝六時発の始発列車に乗り、朝夕四時間かけて岐阜市内の高校に三年間通いとおした友人もいましたが、私は中学の担任の先生の薦めもあり下宿することになりました。

下宿は大縄場の堤防沿いになりました。机と本箱を置くと、後は蒲団を敷くスペースしか残らないような小さな部屋で、私の下宿生活は始まりました。食事は二食付き、お風呂は近所の銭湯、洗面所とトイレと洗濯機は共有。男子の先輩が三名（？）、女子の先輩が四名みえ、部屋から時折ラジオの英会話やギター

の音が聞こえてきました。なんだか自分がとても大人になったような不思議な感じがありました。高校時代の三年間を振り返ると、ただ必死であったの一言でしょう。女子の先輩方は下宿の

シックになったらどのような慰めようかと相談してください。でも、田舎の中学から初めて岐阜に来た私にとっては、同級生のレベルの高さに圧倒され、毎日の豆単と山貞のテストに振り回され、ホームシックを感じる余裕さえありませんでした。先輩のほとんどは三年生で、皆受験勉強に大変忙しく、あまり密な交流はなかったかもしれない。しかし何か困ったことがあったら、トンと先輩の部屋をノックすれば解決できるでしょうという安心感が私を支えていたと思います。

朝食と夕食は食堂でとりました。私は食事中の会話には中々入っていきえず、ただ先輩の話に尊敬をこめてうなずくだけでした。食堂には少年ジャンプと少年マガジンが置いてあり、愛読していました。これらは下宿生がお金をだしあって、毎週購入していたものですが、私はお金を払った記憶がありません。

一年生の一月二十五日の夜、突然クリスマス会を開こうという話になりました。さっそく近所のケーキ屋さん

んど売り切れてしまったとの事。小さなマーブルケーキが二個だけ残っていたのでそれを買ひ、先輩の部屋で女子四人で食べました。小さな部屋で小さなケーキ、ラジオからクリスマスソング、そしてローソクのゆらめくあかり。ぼんやりとした記憶の中でこれだけは鮮明に残っています。

三年生が卒業し、この年から学区制が変わったため新しい下宿生は来なくなり、下宿もすっかり静かになりました。また私自身も、父親が仕事の関係で岐阜市に単身赴任してきたためいっしょにくらす事となり、私の下宿生活は二年間で終わりました。初めての下宿生活に対してあまり深く考えずに飛び込んだ私ですが、この経験をしたおかげで、どのように環境が変わっても何とか順応できるでしょうという変(?)な自信がついた感じがします。また高校入学時、将来については何か一生続けられる仕事がしたいとは漠然と考えていました。しかし、非常に志の高い同級生に引きずられ、医学部を受験し、今医師として仕事を続けることができているのは、岐阜高校に入学し、すば

らしい先輩や同級生と出会えたおかげだと感謝しています。

現在私は病院勤務の後、羽島市で主人(内科)と共に小児科のクリニックを開業しています。毎日笑顔と泣き顔とおしっことうんちとミルクの匂いに囲まれて、とてもにぎやかに診療を行っています。受診されるのは五歳以下の小さな子供達がほとんどですが、時々青い顔をして体の不調を訴える中学生や高校生もいます。私達がすごした中学、高校時代とは比べようがないほど、スピードが早く、膨大な情報量と複雑な友人関係の中で疲れきっている子供達。「そんなに頑張らなくてもいいから、一休みしようよ」と彼らに話し掛けながら、心の中では当時の私が自身を必死に励ましていたように、大変だと思っけれど、ガンバレ、ガンバレとエールを送っている今日この頃です。



### 南国宮崎からの便り

浅見 尚規

昭和51年卒



昨日のオベ患者の様態が落ちてきているのを、ほっとした気持ちで確認しながら病院から駆け出す。対向車の少ない高速道路を愛車で飛ばし、馴染みの駐車場にキーを預け、空港にてウエブチケットインを行い飛行機に飛び乗り、空港バスや車を購入し、外來患者さんたちで賑わう県外の病院玄関に入る。オペ室受付に、Rimowaから愛用の手術器械を取り出して消毒を依頼し、着替えてからマスクの上に保護用めがねを装着しつつ、明るく無影灯に照らされた部屋

に入る。パソコンで編集しプリントアウトした画像を灯りのつかないシャーカステンに貼る。最近では、どの病院も画像電子化が普及し、フィルムレスとなっている。容易にパソコンで多画面に編集できるようになっているが、一方でモニター画面のみでは、画像が小さくなってしまい、一〇数枚のレントゲンフィルムをシャーカステンにずらりと掲げていた時代の便利さを懐かしむ外科医も多い。患者さんは、すでに全身麻酔がかかり体位もとってあるため、麻酔医に挨拶し術中の手順を説明した後、体位、助手、直接介助のナースの位置、レントゲン透視器械の微調整をした後、呼んでくださった医師たちと症例について話しながら手洗いを始める。清潔シートをかけ、マーケティングしておいた皮膚に切開を加えるとき、口が心地よく渴く。以前はフィルムに焼かれていた画像を頭の中で解剖学図と照らし合わせ、再びフィルムや紙にスケッチしてアナログ的な再構成をしていた。最近ではコンピュータイメージングの進歩で、リアルタイムに三次元画像への再構成が容易になり、術前のシミュレーシ

ョンは格段にうまくいくようになったが、やはり何度同じ疾患に同じアプローチを行っても思ひもかけぬ出血やトラブルに見舞われる。術前に安易に考えている症例ほど落とし穴があるので、一例一例気は抜けない。一心不乱に手術野の展開をし、病巣に到達していく。外科医にとっては、術野の展開さえできれば手術の八割は成功と思ってしまう。うまく展開できないからつまらないことで焦り、出血のコントロールが不良となり、冷静な判断ができず手技はいいかげんなものとなる。時々外回りの私語や雑音が気になることもあるが、そのときは、手を止めて周りを見渡し、自分の気持ち落ち着ける雰囲気を作って行く。病巣の処置を終え、創部を縫合して行くとき、術前のイメージ通りの行程を終えた充実感と安ど感で、心地よい疲労感を味わう。麻酔が覚めるのを待ちつつ、種々のモニターの規則的な音を聴きながら、時々、ふと、どうしてこんなことをしているのだろう、と思うことがある。一人っ子で社交性はあるが協調性がなく、泣き虫、女っぽい、短気、すね男、不器用。小さいと

きからずとそう言われてきたこの私が毎日のように手術をしている。手術書、解剖書などいろいろな医学書を読むのは本当におもしろく自分の好奇心を満たしてくれるし、たくさん手術を通して、いろいろ不思議な人間の回復力というものを実感できる。周りの患者さんや後輩たち、スタッフのおかげで、差し引きで見ても本当に充実した外科医としての生活を送らせていただいている。若い頃、しっかりと書いた論文を書かなかつたのと、生来の性格上の問題で出世はできなかったけれど、専門の関連学会や研究会、種々の病院で、後進の若い先生の指導もさせていたたく機会も与えていただき、それはそれで大変おもしろい時間を過ごさせていた

と向上心を忘れない姿に励まされる。さて、私は岐阜高校を昭和五年三月卒業した。もう三三

ない。もちろん、すぐさま参考書を買いきりに行つたものの、へたに記憶力に自信があつたため、暗記に頼つてしまふことで

ただ医学書は太く厚く、それを手にとって調べていいか、毎日の勉強にも追われ頭が混乱するだけであつた。一方、生活し授業を受けるクラスは三年間とも男子ばかりで、皆、向上心と自信にあふれている男らしい男に見えて、自信喪失の毎日が続いた。そんなとき、通学途中や校内でみかけるかわいい女性を遠目に見ては癒されていた。写真部の友人が撮ってくれた写真を一枚生徒手帳にしのばせたりした。しかし勇気を出して声をかけても、メンタルにもフィジカルにもポトムに近い私に振り向いてくれる女性はおらず、落ち込みはさらにひどくなつていった。体を鍛え、背を伸ばそうとバレーボールや剣道を始めたものの生来運動神経音痴の自分は部活動レベルでは、全くついてい

の世界に浸り時間をつぶした記憶がある。列車で京都まで向かい、京大構内を散策したり文学部の大講堂での講義に紛れ込んだりしていた。自分の進路は、父親のように教育に情熱があるわけではないが、理系が苦手という単なる消去法で、文学部と漠然と決めていた。昭和五〇年四月、岐阜高校最終学年のクラス替えがあつたばかりの私は、学校帰り小説を買いに自由書房に向かつていた。そこで、小学時代大変かわいがつてくださった先生にお会いした。“浅見！三年になつたな、進路は決まつたか？”そう聞かれた私は、実は京大文学部で学び、人間を扱うことができる教員になろうと思つている旨を話した。先生は目を見開いて激怒した。そして、“それでは、お前は京大というところに漠然と憧れているだけだ。大学じゃないぞ、何をしたいかだ。お前は、社交性は確かにあるが、我が強い。絶対に教員には向かない。人間を扱いたかつたら医者になれ！”そう言われた日から数日後、生まれて初めて進路を悩み悩んで自ら決断した私は、三年一組担任の岩田望先生に無理なお願いをしに行つ

た。政治的理由や思いもかけぬ医療事故で、一線から退き枯れて行く先輩も確かにおられるが、学会でお会いする、定年をはるかに過ぎて目も輝かせアグレッシブに働く先生たちの好奇心

残らない、特に筋道が理解できない。もちろん、すぐさま参考書を買いきりに行つたものの、へたに記憶力に自信があつたため、暗記に頼つてしまふことで

た。政治的理由や思いもかけぬ医療事故で、一線から退き枯れて行く先輩も確かにおられるが、学会でお会いする、定年をはるかに過ぎて目も輝かせアグレッシブに働く先生たちの好奇心

た。政治的理由や思いもかけぬ医療事故で、一線から退き枯れて行く先輩も確かにおられるが、学会でお会いする、定年をはるかに過ぎて目も輝かせアグレッシブに働く先生たちの好奇心

た。政治的理由や思いもかけぬ医療事故で、一線から退き枯れて行く先輩も確かにおられるが、学会でお会いする、定年をはるかに過ぎて目も輝かせアグレッシブに働く先生たちの好奇心

た。”実は、医学部に進みたいのですが。“先生は南山大学の親父の後輩であり、昔からいろいろ相談に乗ってくださいと安易に考えていた。”なにい、何言っとるんやお前、このクラスは文系だぞ。英文科に行くと聞いていたが、どうするんや!”と、怖い顔。確かいつものように竹刀を床に叩き付けられた記憶がある。”あのお、数学だけでも、数三の科目を、別の理系クラスで受けるわけにはいきませんか?と、私。当然私の願いは許可されなかった。甘い自分に腹がたち図書館に籠り参考書に埋もれていった。ただでさえ苦手な理系の道筋を、図書館で参考書のみを頼りに独りで理解するのはすでに限界を感じていた。

その年の秋、岩田先生から呼ばれ”浅見!お前は確実に浪人するだろうから、駿河台予備校に枠があったので推薦しておいた。東京で入学試験を受けてこい!”先生は優しさから推薦してくださいましたようだったが、あの当時の私には、その”確実に落ちるだろう”という言葉がショックで、神田の駿河台に行ったものの、試験の成績は散々で、結局医進コースには入れず(トイレ

には一〇回は途中退席して全く集中できず)、一般コースとなり二重のショックで東京から戻った。あのときの帰りの列車の中で、”予備校にまで落ちてしまった”と独り泣いたことを忘れない。一学期の最終願書提出のとき、また、うだうだと二年生の時までの志望校であった京都大学文学部と他の大学医学部かを本当に悩んだものの、初志貫徹ということで知人の勧めで岡山大学医学部を受験したが、惨敗。そのときも寒い試験場でおなかの調子は最悪で、何度も手を挙げてトイレに向かった。その後も数学の独習は依然進まず、もう図書館では、やけくそに英語や社会の暗記科目に精を出していた。

あまりに心身ともに落ち込んでいたので、二期校の願書は、心寒いイメージのあった北には向かわず南の宮崎医科大学を選んだ。もう三月なのに雪が舞う岐阜と違い、初めて降り立った宮崎空港の明るさ、そして玄関を出ると広く青い空!タクシー運転手さんの色の黒さに驚いた。タクシーの中は、暖房ではなく、冷房!クーラーが全開であった。まだ医科大学としての校舎も整

っていないので試験は別の大学を借り行われた。数学は、全くできず白紙に近く〇点だった。しかし、宮崎医科大学の入試では、あの時代、生物、歴史が選択できたので、それが幸いしたのと、入学後聞いたところ他の受験者も数学が難しく〇点に近い人が続出し差がつかなかったらしく、運良く合格した。



れた岐阜高校。ある意味、一歩間違えば、今でいう引きこもり、劣等感による性格異常者になる恐れもあったが、良い意味で突き放してくれた諸先生や同窓生に感謝している。あの当時、独り教室や図書館で踏ん張って勉強したことは財産である。ただ、あのまま、東京、京都や名古屋に出て行っていたら自分もたなかった。高校入学時、できないことが一斉に降り掛かってパニックになり神経症になってしまったことを思い出すと、自分には、運良く出会った宮崎というこの環境が自分のリズムに合い、勉学や仕事を続けていく最適な土地だったと思う。

一方、岐阜高校を卒業するまで一八年間暮らした故郷岐阜を思い出さない日はない。先祖代々、祖父母、両親、親戚が生を繋いできた岐阜の実家は人が住まなくなり朽ち果てつつある。それをどうしていったものか、心にひっかかりを持ったままではある。すでに若くして死んだ父と私の区別もつかなくなってしまう施設に暮らす年老いた母以外、私の高校時代を語ることでできる親戚はすでに誰もいない。

外科手術というのはその病気を完全に治癒をさせることではない。手術することなどか少し上のステップに向けて患者さんの治る力、意志の手助けをするだけである。うまくいかない、思いもかけない不幸な経過をたどることも多い。外科医は成功が三割バッテリーでは「やぶ」であるが、完璧な一〇割近い成功率などと言う外科医は詭弁である。病気に苦しむ患者さんはほいほいと県外には出かけてはいけない。毎月何回も医師と会い説明を受けることで気持ちも落ち着き、症状の改善にもなることがある。患者さんとの会話、医者のお話す言葉というのは、とても大切な治療となる。そのためにも、本を読み、広く人と接し、言葉も磨いていかなければならない。今後、この南国宮崎で外科医としての生活を終えたいと思っているが、自分の人生がどうなっていくか全くわからない。ただ、自分に合うリズムの土地で、人間の体に対する好奇心を持ち続け、勉強してきたことが少しでも役にたつ生活をしていけたらと思う。

了  
平成21年2月

霧島連山麓の街 小林にて

## 軟式野球部のこと

市橋 正樹

昭和51年卒

文武両道という言葉が、岐阜高校にはよく似合います。県下随一の進学校であることは誰もが認めるところですが、私たちが同窓生が誇りに思うのは、そのことよりむしろ、体育系、文化系の多くの部活動の活躍ぶりであり、学業と部活動などを立派に両立する多くの仲間がいることであつたのだと思われまふ。

私が在校当時、強かつた部活動と言えば、硬式野球部、軟式テニス部、柔道部、サッカー部などであつたと記憶しています。いずれも県内でトップクラスと言つていい実力を備えていました。軟式テニス部はインターハイに出場しましたし、私が卒業した次の年のことですが、野球部は甲子園出場を果たし初戦突破しました。囲碁将棋部にも全国大会常連の時期がありましたし、近年の音楽部（合唱）に至っては、全国のトップという恐るべき地位を築いていま

す。

「応援団はなんで硬式野球部しか応援に行かんのや。頑張つとる部はほかに一杯あるやないかー」と、こうした部活動の実績を上げながら、HRの討論の時に力んだことがあります。同じクラスにいた硬式野球部のM君はブスツとして怖い顔をしていましたし、柔道部のキャプテンをやっていたK君は「そやそや」と囁し立てながらにやにやしていました。

私自身にとっては、軟式野球部で自分なりに頑張つたところが、高校生活の中で最も楽しく充実したこだわりの部分であつて、大切な思い出となつていきます。部員も少なく成績も大したことはなく、一時はつぶれそうな部でした。中学校の部活動で野球を経験していた者は、半数程度だったでしょう。一学年上の先輩は三人しかおられませんでしたから、二年の春から試合に出してもらえたのは良かったのですが、デビュー戦でその年全国優勝した県岐商にあわやノーヒットノーランのコールド負けを喫したのは当然だったのかも知れません。

狭いグラウンドで、二つの野球部、

サッカー部、陸上部などが一緒に練習するわけですから、危なくしてしょうがない。軟式のセンターの選手は、硬式のセカンド近くに守備位置をとるようになるので、ヘルメットをかぶっていません。当時は華陽高校が同居していたので、練習時間は五時からそこまで。あんな環境でよくもまあ立派な成績を上げることができたものです。

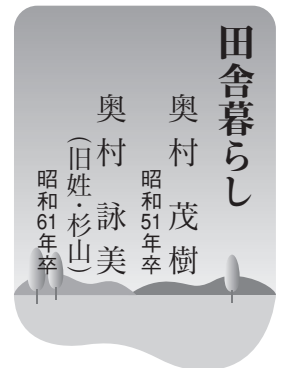
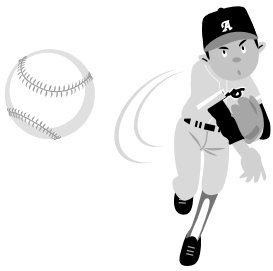
我が軟式は弱小チームだっただけあつて、練習もやる気があるのかないのか、ほとんど自由参加みたいな雰囲気があつたことも否めません。一応月曜から土曜まで毎日練習するのですが、私は授業が終わると真っ先に部屋に駆けつけ、こそつと帰宅しようとする同級生や下級生をつかまえては引つ張り込む嫌味な役柄を務めていました。しかたなく観念して参加する者、何のかんのと言いつて逃げていく者、いろいろいましたが、うとうとしがられながらも、クラスメート以外に多くの友人を得ることができたのは、とても良かったことだと思つていきます。

平成二〇年度の岐高のホームページを見ると、部活動の記録が出ています。軟式野球部のべ

ージを開くと成績が掲載されていて、部員は少ないながら、まだつぶれずに頑張ってくれていることが分かりました。試合成績からはそれほど強いという感じはしないのですが、県岐阜商に勝って地区総体で優勝したことが紹介されています。私のいた時には考えられなかったことです。我がことのようにうれしくて、選手諸君にはただただ「感謝」したい気持ちです。

ホームページでは、岐高のSIが紹介されている部分も目に留まりました。SIには、将来あるべき人間像として、「トータル・パーソン」を目指すとあります。トータル・パーソンとは、「知性と精神性を高い次元で統合した人間」という意味だそうで、「知的・専門的能力に優れ、人道的・精神的価値を兼ね備え、模範の行動で人の心を動かし、真に社会を変革する責任を担いうる個人」と解説してあります。要するに、ただ勉強ができればいいということではないよ、いろんなことに挑戦して、いろんな人と関わっているんな経験をして（だから部活も頑張らなさい）、人間として、社会人として大きく成長しなさい、ということだと思います。

同窓の先輩、後藤寿彦氏は、文武両道というより、むしろ「文武両立」だとおっしゃっています。文と武の「両方でできるエリートではなく、両方で努力できる人間」であることが大切だと文武両道はなかなか難しい。才能や環境に恵まれないと、努力だけを頼りにしては誰にでもできることではありません。しかし、文武両立なら私にもできる、かも知れない。文武両道ではちよつと荷が重い私にも、自信と希望を与えてくれます。軟式野球部も、あまりいい成績は残せなかったけれども、ちゃんと一所懸命やっていたじゃないか。OBが、「軟式野球部出身です」と、今よりもつと胸を張って言えるよう、岐阜高校軟式野球部には、これからもずっと「文武両立」をモットーに頑張ってもらいたい、と、心から願います。



田舎暮らし  
奥村 茂樹 昭和51年卒  
奥村 詠美 (旧姓・杉山) 昭和61年卒



国道二五六号線を下呂から中津川に向けて走っていくと加子母とのちよつと境目に舞台峠がある。峠のてっぺんからさらに山の上に二キロほど上がると、大鹿野（おおじかの）という集落到ちる。ここに降り住んでもう七年になる。暮らし始めて三年目の春のこと。午後八時、仕事を終えての帰り道、温泉牧場のカーブを曲がったところで、ドストドスンという地響きとともにヘッドライトに映し出されたのは道の脇を一直になつてゆつくりと走っている大きな体の

動物たちの後姿。とつさに頭に浮かんだことは、(牧場の牛たちが、逃げ出したんだ。)車を止めて、よく見ると、生ではなく、鹿であった。それにしてもおかしい。すぐに、向きを変えてこちらに向かつて走ってきた。一頭、二頭、三頭・・・興奮気味に横を通り過ぎていく鹿を数えた。車のすぐ脇、ドアを開ければ手で触れそうな気もしたが、少しばかり怖くて固まっていた。八頭の方へ消えていった。オスだったのかメスだったのか、覚えていない。とにかく茶褐色の毛をした牛のような体であったことと牛よりは長い足を持っていたことだけは、鮮明に覚えている。ここは、地名の通り、大きな鹿の住む野原なのだ。それ以後、近所で鹿に出会ったことは、三回。一回は、飛び出してきた鹿のおしりと自動車が接触した。どんつと音がしてバンパーには鹿の毛が付いた程度で、倒れた鹿はすぐに起き上がって草むらへ消えた。一回は、家のすぐ隣の敷地(牧草地)に座っていた大角鹿。角の影だけがヘッドライトに映し出され、(こんなところにセイタカアワダチソウが

はえていたっけ?)と不思議に思い車をバックさせもう一度ヘッドライトで照らしてみた。それはそれは大きな角を持つ一頭のオスの鹿だった。窓を開け、鹿に声をかけてみた。ゆつくり立ち上がった鹿は、だまって向きを変えて歩いていってしまった。後一回は、ガードレールを見事なジャンプで飛び越えた子鹿(バambi)であった。胴には、白い斑点もみえた。子鹿は、軽やかなジャンプが得意なはずである、群れで見た鹿と同じ種とは思えないくらいスマートで、後ろ足はとて長かった。

我が家は、三年かけて夫が手作りしたログハウス。小さいけれど考え抜いて設計・建築・内装をした。ストーブ煙突やデッキ、カウンターや食器棚、子ども部屋のベッドや机すべてが原寸を測りながらの手作り家具。お金には換えがたい世界でたった一つの住宅環境になった。現実的に、家族で幸せに暮らしていることが夢のようである。妻は、カーテンを作るつもりで生地は買ったが、近くには家がないため、あわてて作らなくても・・・と生地は倉庫の片隅にねむったまま今に至ってしまった。しか

し、夜寝るときには、窓から星が見えるなんてロマンチック！  
一〇歳の娘とともに、冬の大三角は、あれとあれかなあ・・・などと話しているときに娘は流れ星を見ることができた。娘にとって初めての流れ星だった。もちろん、夏も冬も、天気の良い日には満天の星をながめほんの数分じっと目を凝らして（目の力を抜いて）いると、スーッと流星を見つけることもできる。

今年、暖冬だったが、いつもの年なら、外は氷点下一〇〜一五度になる。家の中は、薪ストーブのおかげで摂氏二〇〜二五度で暖かい。薪集めや薪割り、大変な仕事であるが、自然の材料に人間の労力をかけ大きなエネルギーを生み出すこの業は、至極贅沢な体験だと自負している。季節の移り変わりをいち早く肌で感じ取ることでできるこの自然の中で、ゆったりと時を刻む



「子どもの頃の夢は叶いましたか」と人にたずねられたら、迷わず「はい」と答えるだろう。漫画家を目指したこともあったので、すべてを叶えたわけではなく、すべてを叶えたいわけではないけれど、「グラフィックデザイナーになりたいたい」という夢は実現した。きっかけは、小学生の頃に近所の化粧品店で目にした、美しいポスターやパッケージへの憧れである。もともと、絵を描いたりものをつくったりすることが好きだったが、しだいに未来の職業として意識し始めた。岐高生としては珍しい東京芸大への進学という、デザイナーへの第一歩を踏み出したのだった。

芸大卒業後は、当時、斬新な広告で注目されていたバルコの広告制作局（現・宣伝部）に入り、そこでの経験を生かしてデザイン事務所に移籍。三〇歳で独立し、テレビコマーシャルを含む広告づくりから、企業や商品のロゴ、パッケージ、書籍やカレンダーのデザインなど、様々な実績を重ねるうちに、依頼される内容にも大きな広がりが見えてきた。

で発展した。古くから金属加工業のさかんな地域として輸出のシェアを誇っていた燕市が、近年、中国の安い製品の台頭などによって危機的状況を迎えており、国内外の市場で生き抜くためのブランドづくりを求められたのである。私は、さっそく各メーカーをまわって、実態の調査と分析を行った。

近年の私にとって、デザインとはものごとの本質を的確に捉え、企業と消費者の間に最良のコミュニケーションを創出することである。言い換えれば、企業の抱える問題を把握し、解決に導くことも言える。まるで医者のような仕事。その考えに呼応するように、表面のパッケージだけでなく商品自体を開発する仕事や、ロゴだけでなくブランドそのものをつくる仕事の依頼が増えてきた。経済的効果だけでなく、社会や生活文化に関わっていける可能性が出てきたのである。

その中で、新潟県燕市の金属加工業をブランド化して世界に発信するプロジェクトは、現在の私の代表作と言えるものに

は勝負できないだろう。伝統工芸には、和の素材や技術を生かしながら、現代の「洋」の食文化に合うアイテムを、実用的なハウスウエアには、伝統的な素材や造形との組み合わせで新しい「和」を。これらにより、ひとつの核へと向かう双方向のベクトルが出来上がると考えた。こうして、よそには存在しない

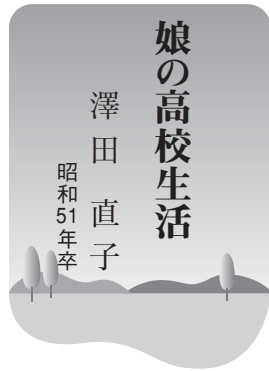
錘起銅器のワインクーラーやティーポット、漆を塗ったテーブルウエアや秋草文様をモダンにアレンジした透かしのバスケットが誕生したのである。ブランドのキーワードは、Japanese

古いものを新しくするベクトルである。しかし、燕の場合、銅板を叩く錘起銅器に代表される伝統工芸もあれば、実用的なハウスウエアであるナイフやフォーク、包丁、鍋などもあり、和洋・新旧が混在していた。これらを束ねてひとつのブランドとし、世界に向けて発信するにはどうすればよいか。それは、責任の度合いにおいても難易度の高い課題であった。



Fusion (ジャパネスク・フュージョン)。「和」をベースとした古今東西の食文化、素材、技術の融合による刷新を目指し、燕の音読みであることと、さまざまなものが出合う「縁」にちなみ、「am(えん)」と名付ける。二〇〇九年二月十二日の夕方、私と「em」の構成メンバーはフランクフルト国際空港に到着した。毎年この時期に開催される、世界最大規模の消費材見本市「アンビエント」に出展するためである。国際メッセへの出展は、パリやニューヨークも含めるとこれで七回目、ブランド立ち上げからは四年が経つ。回を重ねるごとに知名度が増し、引き合いも増えてきたので、世界的な経済不況という不安要素はあるものの、顧客のニーズに応えた新製品も準備してのぞんだ。

結果的には、不況による来場者数の減少で、例年ほどの成果には至らなかった。だが、商談の内容から、付加価値の高い製品への評価が、確実に上がってきているという手応えはあった。こういう時代であるからこそ、オリジナリティのないものや価格競争に陥っているものは淘汰され、想定した顧客層に向かった的確に発信しているものが生き残るように思う。このように活動の領域が広がってきている昨今、忙しさは増すばかりだが、どの仕事を通して、デザインで人を喜ばせることが何より楽しい。デザイン案を見せた相手の表情がぱっと輝く瞬間、メッセ会場で製品を手にとった人が「Very Beautiful」と声をあげるとき。「夢は叶いましたか」という問いに「はい」と応えながら、また次の夢を追っていききたいな、と考えている自分がそこにいる。



## 娘の高校生活

澤田 直子

昭和51年卒

大変楽しかったです。高橋先生もお元気で、懐かしかったし、皆さんいろんな分野で活躍しているようです。素晴らしいなあ、と思います。そういえば岐高にも久しく行っていないと思い、二年前、アメリカに引越してくる直前に見に行ってきました。満開の桜が風に散っていて、昔も桜がきれいだったなあ、と思います。あの頃は毎日毎日精一杯でしたが、熱心な先生方に恵まれよく勉強したなあ、と思います。

今、家族でニュージャージー州に住んでいます。娘がちょうど一五歳、現地のハイスクール一年生です。日本の同級生が受験勉強しているのこちらでは入試もなくハイスクールに入りました。二年前、楽しい日本の中学生生活を突然打ち切られてアメリカの現地の学校に入られた娘は、親が思う以上に辛かったようで、一日中英語でわけのわからない上に人種や文化、習慣など、全てがあまりに違う学校の生活に慣れるのに本当に苦労したようです。以前も住んでいたし、娘もこちらで生まれているのでそんなに大変ではないだろうと思っていたのですが、

予想に反して大変でした。日本の学校では、クラスや班や部活など、いろんなところに仲間がいてどこかに所属している安心感がありましたが、こちらではすべて個人行動、学力別に二人ひとりのカリキュラムが組まれており受ける授業が違うので、一日目から教室を探してうろろ。幸い同じ学年にいた日本人の子どもたちに助けられてなんとか中学生生活を送ることができました。英語も、外国から来た子たちのためのクラスがあったので、日本人や韓国人が中心だったので、似た境遇の仲間を見つけて少しずつ学校になじんでいきました。

去年から入ったハイスクールは、町にひとつの公立で、中学から進学したい人はみんな入れます。でも入るとまた学力別に一人ひとり取る授業が決められており、中学ではあったホームルームもなく、まるで大学のように自分の時間割にあわせて教室を移動して歩きます。日本で想像していたほどはじけた高校生活でもないみたいで、三回遅刻すると一回欠席したことになり、年間一二日欠席すると単位を落とすとか、追試、落第も厳しい代わりに、たくさん勉強して飛び級することもできる、上がるも下がるも本人次第、なので結構みんなまじめです。

勉強の内容も日本とはずいぶん違い、覚えることより考える自分の言葉で表現することに重点が置かれていて、こちらの子どもは小学生の頃からそういう訓練を受けているのでしょうが、日本の学校から来た子どもにとっては難しく感じられるようです。「どうしてこうなるか説明せよ」とか、「この出来事の原因とその後の政治の変化について述べよ」などという宿題を、英語力もままならない娘が、何時間もかかって資料を読んでレポートにしていかなくてはならないので、ほんとに大変だなあと感じます。

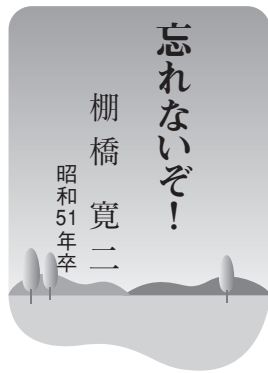
でも若さってたいしたもの、読み書きも会話もあんなに不自由していたのに二年のうちになんとレポートも一人前に書けるようになってきているのだから、鉄は熱いうちに打て、と言うことだなあと感じます。

私は、娘のおかげでこちらの学校の様子を知ることができて興味深く、機会があれば学校に出かけて行って子どもたちの様



子を見るのを楽しんでます。PTAだけでなく、学校のお手伝いのボランティアもいろいろあり、中学校の図書館の手伝いや、パーティーの準備、高校の音楽の基金集めのクッキーセールやクリスマスセールの手伝いなどしました。

世界中から移民が住み着いているこの国、日本人や日系人もたくさんいますが、理解の難しいこともたくさんあり、私の助けてやれないことも多いです。その中で娘がどう考え、この経験をどう役立てて成長していくのか、見守っていききたいと思えます。



高校卒業以来三三年、昭和五一年卒の同級生は色々な人生を歩んでこられたことでしょう。早くから目標を定め、着実に歩んでいる人、こんなはずではと思っている人、皆それなりに一生懸命人生を謳歌してみえることと

思います。しかし、残念なことこの会報を読めない人達がいます。

懐かしい名前が並ぶ中、物故者にかつて一時代をとともに熱い思いで一緒にした仲間の名前が多くあることに愕然といたしました。しばらく会わないまでも、皆それなりに元気でいるものとばかり思っていただけに、とても残念な思いで一杯です。今会報に寄稿するに当たりまして、特に親しかった彼らとの思い出を記し、彼らの名を永遠に刻みたいと思えます。

先ず、棚橋俊之君。彼とは小学校から一緒に、姓が同じであっただけになぜか他人とは思えない関係でした。私より小柄でしたが、スポーツ万能で、学業も優秀。女の子にとっても人気がありました。

松岡秀雄君。彼は精華中学の柔道部の部長で、私とはそれ以来の柔道仲間でした。極めて謹厳実直、クソが付くくらいじりめで家族思いでした。大学入試を直前に控えたある時、皆で希望大学を話し合っていた時、彼は長男である自分は家族に負担を掛けられないので、自宅から通える国公立しか行けないと言

いました。もし、不合格なら予備校へ行かず就職するしかないと思感を持っていました。結果はめでたく希望大学に現役で進み、就職もうまくいっただけにとっても残念です。彼が技を掛けるときの「ヤー！」と言う声が今でも昨日のように思い出されます。

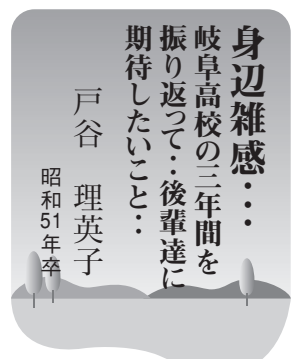
児玉真琴君。彼は平田町始まって以来の秀才との誉れ高く、颯爽と入学してきました。お互い皆と違って勉強もせず、現役での大学入試に失敗し私が東京の予備校に通っていた頃、東京の松尾君の下宿へ遊びに来ました。旧交を温めつつも目前の入試の話になった時、彼は未だに志望校のみならず大学進学そのものを決めていないと言う。それで我々の心配に對して、「京大

うって難しいかなあ」と人事のように言うではないか。今頃になって何を言ひ出すのかと思っていたが、なんと彼はその後、三月月猛勉強をし、見事合格。合格の報を聞いた時は皆揃って「え、うそ！」と、絶句した。秀才の誉れは本当だった。児玉治城君。彼には音楽や色々教わることが多かった。当

時、それなりにオーディオという物が皆の部屋に出現した頃、それぞれレコード屋によく通ったものです。しかし、今と違ってそれほど情報もなく、海外や東京で何がはやっているのか、よほどのことがない限り知りませんでした。ところが彼はいち早く情報を入手し、色々教えてくれました。日本発本格的ロックバンド「四人囃子」や、名器リッケンバックを教えてくれたのも彼でした。大学入学後は、好きな音楽方面に進んでいただけに残念です。

そのほか中学から一緒だった川口君や、おとなしかったけど極めてまじめな武藤君、藤井さんなど懐かしい思い出いっぱいあります。今でも本当に物故者リストに載っているのが信じられません。嘘であってほしいとも思いません。

この先我々の人生にどんなことが待っているか知れませんが、しかし元気でいる限り、卒業生名簿を見ることが出来る間は彼らのことを決して忘れることはいけません。[忘れないうぞ!]



高校進学に当たり、私は、京都の女子ミッションスクールにすでに合格しており、岐阜高校には、受ければラッキー程度の感覚でした。そして、合格してしまった結果、一五歳にしてミッション校なら文科系へ、岐阜なら両親の後を継ぐため医学部を目指すこと、という将来設計の二者択一をすることとなり、京都の寮生活と、バス五分で通える岐高（しかも父は岐中）と比べた結果、その後のこともあまり考えず、周囲の祝福もあって地元の岐高への進学を決めた。私が理数系を苦手なことをよく

知っていた母は、随分心配していたが、結局私はなんとかその初志を貫く事ができた。私が入学した年は、岐阜高校創立百周年にあたり、入学式は百周年記念事業として建てられた新体育館で行なわれた（今も新体育館と呼ばれているらしい）。秋の百年祭に向け学校全体が団結して熱気に満ちており、またそれを機に岐阜中学、岐阜女、岐阜高校という歴史の流れを知ることができた。岐阜は受験校で毎日が大変と予想していたが、一年目はクラス全体も明るく、恐い・厳しい授業も私には毎日が楽しかった。大学受験が近づくと、全体に緊張感が漂うようになったが、実は私自身はあまり現実感がなかった。私にとっての高校生活は、入学当初の決意の割には、毎日必死に勉強したという記憶はなく、いつの間にか受験期が来て、なんとかひっかかって医学部に進学でき、こんなことでいいのか?と思いつながら卒業してしまっただけの感がある。曲がりなりにも今の私があるのは、当時の岐高の受験校としての教師の熱意や授業内容などが素晴らしかったためだと思う。中でも、当時の佐光儀民校長が、

朝礼で必ず「岐阜高校バンザイ」と叫んでおられた姿や、数学の金武先生が1m定規を持ってあちこちたたきながら授業をされていたこと（私は当てられる頻度が多く、同列のクラスメイトには恨まれていたように思う）など、熱意のある個性的な先生が多かったのが、楽しく思い出される。

大学生活を含め一六年間東京で過ごした後に帰郷し、今は両親と一緒に開業医となった。一時岐阜大学病院にも研究生で籍をおかせていただいたが、その医局には岐高の同級生が六人もいたので、とても心強かった。医局員にも、医師会という団体の中にも岐高出身者が多く、それだけでなんとなく親近感もあってしまうこと自体、百折不撓の誇りに支えられた伝統ある岐高三年間で植えつけられた一種の連帯感かもしれない。社会人となった今も、高校時代の友人とはいろんなところでつながっている。

現在、私は岐高の校医をさせていただいている。以前担当されていた校医の先生が、女生徒が多くなってきたので、ご自分の後任を女性医師にお願いしたいとのことで、私が担当することとなった。その関係もあって、PSセミナーという、進路の参考の為に一年生を対象にOBが自分の仕事などについて三〇分ほど教室で話をする機会もいただいた。未だに独身で、家庭の苦労も経験せず、幸い元氣な両親に助けられながら、どうにか開業医と医師会の仕事をしている立場では、一五、一六歳の幼さの残る後輩に参考になるような話ではできなかったと思うが、医師会活動を通し、重要と認識していることはある。そこで、あらためてこの紙面を借りて、一言。今、岐高の女生徒の割合は増加し、四割前後と聞いている。成績優秀な学生が医学部を目指すのは医師不足の現在とても嬉しいことであるが、その一方で、出産・育児を機に離職してしまう女性医師が少なからずいることは、とても残念なことで、国の損失とまでも考えられている。医師一人育成の為に、大変多くの人的・経済的労力が注がれており、医師の離職は、社会的に非常に大きな損失である。男女共同参画が叫ばれているが、実際に仕事と家庭を両立させていくことは、社会的基盤が整備

されても容易ではない。また、日進月歩の医学の世界では、医療人として、生涯にわたり研鑽を続ける努力は必須である。現在、県医師会でこのようなテーマに携わる毎日の中、私を感じていることは、医師を志すにあたっては、男女を問わず、成績のみでなく、命を預かる社会的使命の重さを理解し、その使命を継続する強い意志を持つことの重要性を、是非ご理解いただきたいと願っている。

### 大阪万博から 愛・地球博へ

問所 陽一郎  
昭和51年卒



中学一年生の時、一九七〇年に、大阪万博が開かれた。人類の進歩と調和の旗印の下パビリオンが建ち並び、月の石を飾

ったアメリカ館、ソユーズを展示したソ連館、未来の生活を提示した三菱未来館など、見るものすべてが新鮮だった。

中学校からの遠足をはじめ五回ほど足を運んで、長蛇の列に並んだ。高度成長期真っ盛りの日本、半年で六、四〇〇万人を集めた最大の万博として、まだその記録は破られていない（二〇一〇年に開催予定の上海万博は七、〇〇〇万人を目標としている）。

時は流れて、二〇〇五年、愛知県で、愛・地球博が開催された。テーマは「自然の叡智（Nature's Wisdom）」。自然の有する素晴らしい仕組みや生命の営みに謙虚に学び、問題の解決の糸口を探し、二一世紀の望ましい地球社会を見出し、こうしようという思いが込められている。入場者は日を追うごとに拡大し、最終的には目標の二、五〇〇万人を大幅に超える二、二〇〇万人を数えた。

この愛・地球博にかかわることができたので、私なりに感じたことを付記してみたい。

やはり、こういう国際的な催しを企画してやりとげたことの皆の自信が大きい。残念ながら

昭和六三年の名古屋オリンピックは実現しなかったが、東京、大阪ではないこの大いなる田舎で、国際的な賓客や二、〇〇〇万人を超える人々を迎える大規模な催しを成功裏に開催できたこと、そして、延三六、〇〇〇人もの人々がボランティアとして参画したということは、大きな自信となつている。

自信はまさに愛着であり、愛・地球博ファンは数えきれないほどいることも付け加えたい。私が一周年記念行事に出た時のこと。万博には何回行かれましたか、三回以上の人、との問いがあり、ハイと手を挙げた。五回以上の人、ハイ。一〇回以上の人、ハイ。(私はここまででしたが)さらに、二〇回以上の人、五〇回以上の人。ここまできても半数以上の人が手を下さなかつたことを見て、皆の愛着はすごいと思つたところである。

海上(かいしよ)の森の精であるモリゾーとキッコロが、マスコットとして大きな役割を果たした。皇太子様が愛子様にご本の読み聞かせをしているところが報道され、一挙に認知度がアップ。どこへ行っても大人気

で、今も環境に関する催しがあるたびに森から出てきてPRに協力してくれている。

もう一つ、愛・地球博は環境万博と言われるように、環境のメッセージを発信できたことに大きな意義がある。今回のテーマは「自然の叡智」。人類の進歩と調和を謳つた一九七〇年の大阪万博とは時代の流れを感じる。

今回も、一九九四年に地元の構想をまとめた時には、「技術・文化・交流 新しい地球創造」がテーマだったが、より自然環境との調和を前面に出したテーマへと転換していったもの。会場も、自然との調和を図るため、海上の森に加え、青少年公園を中心とするなど、大きく転換させた。

万博では、自然の改変をできる限り少なくするためのグローバループや、燃料電池・太陽光発電・ドライミスト・光触媒など最先端の環境技術が導入された。ロボットの実演も未来を予感させ、印象深い。さらに、エコマネーなど、環境を意識した活動は現在も継続しており、環境というテーマが大きく広がつたのではないかと思つている。

さて、時は一九七〇年から二〇〇五年へ、そして今、二〇〇九年。私たちは一〇〇年に二度の世界同時不況の真最中にいる。先が見えない中にあつても、努力する者が豊かに暮らせるよう足元を固めるよう配慮をしつつ、万博が描く夢を追つて、さらに進んでいければというのが願ひである。

### お寺をめぐるご縁を探るのが今の仕事です

吉田 さくらさ

(本名、吉田裕子)

昭和51年卒



岐高時代は文芸部に所属していました。校門を入つて左手の古い建物内に、写真部、演劇部(それとも美術部だったかしら?)などと並んで穴倉のような部室

があつたのをご記憶でしょうか。それら文科系のクラブには一癖ありそうな連中が溜まつていましたが、その中でも、わたしはたぶん、異質な存在だつたと思います。なぜ異質かという点、あまり人付き合いが得意でなくて、いつも一人で本を読んでいたから。実はわたしは、そのころから、出版業界で仕事をしたいという夢を抱いていたのです。

その後、出版関係の就職に比較的可利といわれていた早稲田の文学部に進学し、就職難の荒波を乗り越えて、大手出版社の入社試験にパス。「ノンノ」という、当時飛ぶ鳥を落とす勢いだった雑誌の編集者になりました。このあたりの首尾は、自分でも上出来だつたと思います。

しかしわたしは、ちよつと甘かつた。ファッション雑誌の仕事は、見かけは派手でも、実はそう楽なものではありません。時間が不規則でいつも深夜営業、真冬の海でロケをして大風邪をひいても休めません。とはいえず、事自体は好きだつたのですが、無理がたたつて、一〇年ほどで体を壊しました。少し休んで、妊婦雑誌「たまごクラブ」の編集長として業界に復帰しました。

子育ての経験もないのに不思議なことですが、わたしはその仕事も大好きになり、昼夜を問わず、熱心に働きました。そしてまた体を壊し、つらつらわたしは考えました。「また休めば体調は戻るだろうけれど、再復帰すれば、同じことの繰り返しになるのではないだろうか」

すでに四〇歳も過ぎ、ちよつと立ち止まつて人生の来し方行く末について熟考してみたいお年頃でもありました。よし、ここでいったん、すべてを白紙に戻して長期休業し、次にやりたいことを探してみよう。

その問何をしたかというところ、お寺めぐりの旅です。大学時代に美術史学を専攻し、仏像や寺院建築について多少かじつたにもかかわらず、長い歳月の間にすっかり忘れてしまつたので、ちよつとおさらいしてみようかな。その程度の軽い気持ちで始めたのですが、各地の寺をめぐるうちに、仏教とその周辺の文化の奥深さに気づき、夢中になりました。うーむ、これは間違いなく、一生追い続けられるテーマだ!

お金はなくても暇だけはふん

だんにあつたので、そりゃもう、あっちこっちのお寺に行きました。今よりは多少体力もあつたので、青春一八切符なども駆使し、親切な寺があればずうずうしくあがりこんで、一宿一飯のお世話になったりもしました。

そんなことを何年か続けるうちに、「もっとみんなに、お寺の楽しみ方を知ってもらいたい」という意欲がわいてきて、テラタビストという肩書き（日本語で言えば寺旅研究家。わたしが造った言葉なので、日本で唯一です）で文筆業を始め、最初の著書、「お寺に泊まる、京都散歩」を出版しました。奈良、鎌倉、遠くは韓国まで寺めぐりの旅を続けるうちに、一眼レフのデジカメを使つての写真撮影を手がけるようにもなりました。最近では、旅行代理店とコラボレートして寺めぐりツアーを企画したり、カルチャースクールの講師として京都や奈良のご案内もしています。以前は、モデルさんを連れてロケに行くのが仕事だったのに、人間、変われば変わるものです。

変わったのはそれだけではありません。今のわたしは、岐高時代の人嫌いで無口な娘とはま

ったくの別人です。体重が一・二倍ほどになったとか、シワが増えたとかの、見てくれの問題ではありません。長年の一人旅を通して、いつの間にか、気さくなおしゃべりおばちゃんに変わっていたのです。

NHKで放送されている「家族に乾杯」という番組をご存知でしょうか。今のわたしは、あの番組内における鶴瓶さんのキヤラとほとんど同じです。知らない町を歩いていて面白そうな人を発見したら、速攻で友達になります。車でどこかに送ってもらったり、家上がりこんでお茶をいただいたりすることもまれではありません。なぜそうもあつかましいのか。それは、本を書くネタを探すためです。お寺について書かれた本はほかにも無数にありますから、わたし独自の内容にするためには、地元の人から話を聞きだすのが一番。しかしそういった職業上の目的だけでなく、それ以前に、人が好き、そして世間話が何より楽しくて、わたしは、すれ違う人々にどんどん話しかけます。

それにはもうひとつ、さらに深い理由もあります。仏教の教えの実践です。特定の宗派の信

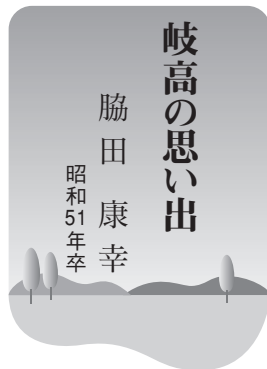
徒になったわけではないのですが、よりよい寺めぐりの旅をするためには仏教の勉強が必要なので、わたしは片っ端から本を読みました。むろん仏教はきわめて複雑で幅広い思想であり、素人には理解できないことも多いのですが、仏教の世界でもっとも大切な言葉である「ご縁」についてはよくわかりました。「袖擦りあうも他生の縁」や「一期一会」などの言葉も、もともとは仏教用語。偶然に見える出会いでも実は深い意味を持つものなので、決しておろそかにしないようにという意味です。この世には無数の人がいて、その中でたまたま出会う人とは、前世か来世かわかりませんが、何らかの形で、必ず結びつきがあるのです。

そういうわけで、わたしは、よきご縁を探すことを最終目的とする寺めぐりの一人旅を続けています。その途上で立ち寄ったお店や宿のことを本に書く、たいいはいとても喜んでいただけます。二度目に行くと、「あなたの本を読んだと言つて来てくれる人がいますよ」とも言われます。読者の方から「本に書かれていた店の大福は本当においしかったです」と、感謝のメール

をいただくこともあります。わたしの知らないところでも、よきご縁が次々に結ばれているんだなあ。ささやかでもそのお手伝いができることが、何よりもうれしい日々です。



テラタビスト(寺旅研究家)



岐高を卒業して名古屋の予備校に通ったあと、大学は京都、就職は東京と、岐阜を離れて三

○年余りになる。今では笠松の実家に帰るのも年一回あるかないかで、すっかり岐阜や岐高から遠ざかってしまった。地元に残った岐高OBには、自分の子女を母校に入学させることが一種のステータスのようであり、東京へ出てしまった身にはとても羨ましく感じる。そういえば子供たちが通った東京の高校でも、そういう雰囲気があり、それだけ母校への愛着が強く感じられ、名門校とか伝統高ならでのことだと思ふ。

卒業後同窓会やクラス会にも全く出ていなかったが、三年前の夏、岐高三年の時の担任だった高橋伸郎先生の叙勲をお祝いするクラス会に初めて参加した。当時の岐高には男子クラスと女子クラスがあつて、私は一・二年は男子クラス、三年だけ男女クラスで、三年が男女クラスになるのは、こういうときには好都合だ。三〇年たつていても皆、面影は濃く残っており、ほとんどの参加者の名前と顔が一致した。先生を囲んで昔に帰って楽しいひと時を過ごした。

岐高時代の一番の思い出は、将棋に打ち込んだことだろう。入学してすぐに囲碁将棋部に、

同じ中学から三人一緒に入部した。うち一人は囲碁だったので、

囲碁の方が高級だ、いや将棋だと張り合いながら、毎日将棋に励んだ。ちゃんとした部室だったか、何かの和室を借りていた

静かな部屋で毎日将棋を指していた。学校の帰りには、神田町通りと柳ヶ瀬通りの交差点にあった総菜屋で小判型のコロケを買って食べていたような記憶もある。将棋ばかりやっていて

数学がわかるようになってしまい、数学のテストの答案に、金武先生から「シヨウギばかりじゃだめよ」と大きく朱書きされた採点をされたこともあった。そんな甲斐あってか、三年の時に全国高等学校将棋選手権大会に出場することができた。と、偉そうに言うが、何のことはない、

予選の岐阜県大会に男子団体戦は岐阜含めて三校だけだったのだ。同級の浜崎裕君、一級下の松本宏克君と三人で組んだ男子団体戦で難なく予選を突破し、同様にほとんど選手が出ていない女子個人戦の同級の大野明子さんとともに、全国大会に出場した。八月の夏休みに確か長野県白樺湖畔にあった昭和薬科大

学諏訪校舎で大会は行われた。そこで忘れえぬ出来事があった。

大会は日本将棋連盟の正式行事であったため、大山康晴永世名人が審判長を務めていた。地方在住の高校生にとっては、

大山名人は雲の上の人であり、名人の顔を間近に見られるだけで幸せというくらい存在であった。一回戦、私は残念ながら負け、松本君は勝ち、残る浜崎君に勝敗がかかっているとき

だったと記憶する。相手選手が時間に追われてあせったのか、手駒の「飛車」を裏向きに打ち込んだのだ。盤側で見守っていた私は、アツ反則だと思っ

た瞬間、浜崎君も冷静にそれを指摘した。係りの人があわてて大山審判長を呼んできた。皆は固唾を呑んで名人の裁定を待った。名人は事情を聞き、盤面を一瞥して言った。「プロなら反則だけど、アマの高校生にはちょっと酷だから、この局面で私が優劣を判定して勝ち負けを決めることにするが、それでいいね。」もとより大山名人に逆らえるはずもなく、一同うな

ずくと、形勢の解説をしたあとで「浜崎君の勝ち」と宣言された。形勢は微妙だったから、

おそらく名人は反則負けではあるけれど、そうしてしまっただけに、負けた高校生が傷つくとお考えになり、このような裁定をされたのだと思う。将棋の普及に力を注がれ、アマチュアを大事にされた大山名人の、優しい人柄が滲み出た出来事だった。

一回戦は勝ち上がったものの、二回戦でやたら強い学校と対戦し、三敗で負けてしまい、暑い夏は終わった。しかし、大山永世名人と間近に接することができ、感動の夏となった。余談だが、この一〇年後に将棋部の後輩たちが全国大会で優勝するという快挙を成し遂げてくれ、我々の敗退が、その原点になっていたのでないかと秘かに自負している。自分自身は入学した大学の将棋部は強すぎたこともあって、将棋から足を洗ってしまい、

今ではテレビの将棋を見る程度になってしまったが、あの夏のひとコマは、忘れられない思い出である。県下一の進学校でありながら、部活動を熱心にやらせてくれた岐阜の懐の深さと言

うか、文武両道追求の校風なのか、良い学校に行くことができ幸せであると、遠くにあつてしみじみ思うこの頃である。

## 未来はためらいつつ近づき

伊藤陽子  
(旧姓・小鳥)  
昭和61年卒



「時」の歩みは三重である。

未来はためらいつつ近づき、現在では矢のように速く飛び去り、過去は永久に静かに立っている。

ドイツの詩人、シラーの言葉である。同窓会に出席するとき、この言葉を実感する。同窓会とは過去と現在が行き交う不思議な空間。そして未来は常に近づいてきている。

寄稿を書くにあたり、久々に自分の心の中にある古いアルバムのページをめくってみた。

時は二六年遡り、中学三年の春のこと。記憶がおぼろげだが三者懇談だったと思う。教室で向かい合ったクラス担任から

「志望校はどこだ」と聞かれ、「(岐阜)北高です」と答えた。担任教師は「そうか」と答え、隣に座っていた母も何も言わなかった。ところが夏休み、その担任から突然電話がかかってきて、「お前の内申書は岐阜高しか書かんから、そのつもりで勉強しろ」と言われた。親から「勉強しなさい」と言われたことは一度もなく、漫画や本ばかり読んで過ごしていた私は、担任の言葉にガンとシヨックを受けた。岐阜高を受けるんだっただけなのに勉強しないといけないではないか……と。

こうして、半強制的に岐阜高校を受験することになった。無事に合格したのはいいけれど、入学してからが大変だった。入学当時、一番苦しんだのは英語の授業の度に毎回あった英単語の小テスト。「どうやってこんなにたくさん英単語を一度に覚えるというのだ。私はなんて場違いな高校に来てしまったのだろう」と思ったものだ。しかし、次第にテスト漬けの生活にも慣れ、自主的に勉強する習慣が身につけていった。こうして岐阜高校の優秀な生徒たちに生まれ、それなりに学力を身に付

けた私は医学部を受験した。もしも、岐阜北高校へ行っていたら、今とは違う人生を歩んでいたかも知れない。今では、わざわざ自宅へ電話を掛けてくれて私を岐阜高校へ導いてくれた恩師に、大変感謝している。

さて、現在の自分は、平成四年の春から彼は一七年間、医師として働いている。この原稿を書きながら、岐阜高校を卒業するまでの一八年間と同じくらいの時間を医師として過ごしてきたことに、はたと気付き唾然とした。おぎゃあと生まれてから一八歳になるまで、人間は凄まじい成長を遂げるのだが、一七年前に医師として誕生した自分は、今までにそんなに成長しているだろうか？

大学を卒業して進むべき診療科を選択するとき、悩んだ末に内科を選んだ。内科の醍醐味は、患者さんの人生と大きく関わることだ。闘病中の患者さんや、彼らを支えるご家族から学ぶことは非常に多く、短い紙面ではとても書きつくることができない。一七年間、多くの患者さんと関わり、多くの死を看取るうちに、臍げにしかなかった価値観や死生観がしっかりと形成さ

れていったように思う。

病気になることは不幸なのだろうかというところではない。なぜなら、幸福は人の心がつくものだから。不幸なのは、いつまでも病気を受け入れられない心、他者や自分自身を責め続ける心。逆に、病気を受け入れ、どんな状況でも周囲へ感謝することができるとは幸せをつくり出す。特に感謝というものは自分ばかりか周囲の人たちをも幸せにする凄まじい力を持っているのだ。

死ぬことは悪いことなのだろうかというところではない。人は誰でも死ぬ。遅かれ早かれいつかは死ぬ。「死」は、いつかは誰もが受け入れなくてはならないものだ。しかし、多くの人は「死」について語ることを避ける。医師も、患者家族も、何が何でも一日でも長く生かせることがよいことのような錯覚をしてしまいがちだ。多くの場合、本人の気持ちは置き去りにされている。

現在、日本の終末期医療において、延命治療を行うかどうかは本人よりも家族の意思が尊重されている。ほとんどの人がはっきりと生前意思(Living Will)を残していないため、いよいよその場になって患者家族と医師と

の話し合いによって決定されることが多い。

本人の意思が置き去りにされている現実と苛立ちを感じ、それを吐き出すように「尊厳死」をテーマとしたフィクションの小説を描いたのは二年半前。せっかく描いたので多くの人に読んで欲しいと出版した。その節は多くの同窓生に本をご購入いただき、本場にありがたかった。出版は大赤字だったけれど、皆さんのご協力のおかげで第二刷までこぎつけることができた。それまで会話をしたこともなかった同窓生から本の感想をメールで送っていただいた。同窓生とは本場にありがたものだ。今回の同窓会で会報委員の役を引き受けたのも、同窓生の皆さんに少しでも恩返ししたいという気持ちからだ。

この先、私たちにどんな未来が近づいてくるのかわからないけれど、まずは六月、そして二〇年後、二〇年後、皆さんと再会できたら本当に嬉しいことだ。最後になるが、私が仕事をしている間、私に代わって子供たちの世話をしてくれている母に、最大の感謝を表したい。



皆さんも書いておられるように月日の経つのは早いものです。卒業してから二三年。私はいいますと、一回の転職を経てメーカー勤務の会社員をしております。

三〇才過ぎた頃から、里心がついたといいますが、つらつら



と、昔を振り返ることが多くありませんでした。インターネットでいろいろキーワードで検索すると、岐阜高校のホームページが開設されているのですね。それまで知りませんでした。現役の岐阜生の活躍を知ることができてうれしい限りです。

さて、少し前にクラス会があって、久しぶりに旧友と会う機会がありました。久しぶりに会うとなかなか思い出せない人もいます。おそらく先方もそうなのでしょう。名乗るときに「一組の」とか、「野球部の」とか、「ETの」というと、相手が思い出してくれます。最後の「ETの」とは私の高校時代のあだ名です。スピルバーグ監督映画に出てくるETです。このあだ名は、同級生に岩田が確か三人いて、区別するために私にだけ付けられました。私にだけ、です。誰が最初に言ったかは分かりませんが、見た目に起因するのでしょうか。このあだ名、当時、私自身はそれほど好きでは無く、しぶしぶ受け入れました。本人の気持ちとは反対に、割と定着していた様です。

苗字で呼ばれた思い出があまりありません（担任の杉山先生にもそう呼ばれてたなあ）。

このあだ名で思い出すのは、甲子園の県予選の応援の時の事です。私は硬式野球部だったので、応援の時の掛け声が「岩田」ではなく、「ET」だったことです。同級生からの掛け声はいいとして、下級生からもそう呼ばれるのが複雑でした（声援くださったことには今でも感謝しております）。

また、今でも草野球をやっております、ちょっと前に、といつても一〇年くらい前ですが、試合待ちの時に「おい、ET」って声をかけられたことがあります。振り返ると同じクラスだったK君。対戦相手チームの選手だったので、久しぶりの最初の言葉は、やっぱり「ET」でした。「人違いだったらどうするの?」とは言わなかったですが。

高校卒業後の大学入学や就職の度に違ったあだ名を頂戴しましたが、岐阜高校時代の良き思い出と共に、最初はしぶしぶであったこのあだ名を今では一番気に入っております。

## 同級生との再会 そして医療問題

大西 量一郎

昭和61年卒



岐阜高校を卒業して、二三年、医師を志し、現在、同級生の経営する病院に整形外科医として勤務しております。先日、後輩医師の結婚式にご招待いただきました。彼も岐阜高校卒業で、結婚式には高校時代を含め、彼の古い友人が、多数、招待されていました。彼とは、行き付けのゴルフ練習場で、高校時代の友人ときているところに、何回か会いました。昔からの友人を「連れ」とよく表現しますよね。

私は一〇年前に結婚式を挙げましたが、その時、自分が招待したのは、医局の上司や同僚、大学時代の友人で、比較的最近出会った上司や友人が中心でした。残念ながら、高校時代からの友人で、今でも交流があるのは、同じ大学に入学した友人のみです。大学時代の友人は、（特に私の場合は）将来の進路が関連するために、長い付き合いになるのは当然。しかしながら、高校時代の友人は、卒業後、異なる進路に進むわけで、その後も付き合いを続けるには、相当強い絆で結ばれないと続けれないと思います。そんな友人が、数多くいた彼をとっても羨ましく思いました。自分には「連れ」と呼べる付き合いのとても長い友人がいらないかと寂しく思いました。そんな私ですが、

二ス、ギター、フィットネスなど）、趣味を通じて知り合った友人は、全く住む世界が違う人たちで、飲みながら語り合うと、お互いに刺激を受けることができます。同窓会での再会は、それに近い感じがしました。ここから、また新しい絆が生まれるといいなあと思っています。

先日の学年同窓会で、懐かしい顔と再会。そればかりか、当時、話したことのない方も話がはずみ、お近付きになれました。何か、再会というより、高校時代の友人と、再び出会ったと表現したほうがいいのか……同窓会って本当にいいなあと思いましたが、自分で言うのも何ですが、私には趣味が多く（ゴルフ、テ

さて、冒頭にも申し上げましたが、医療というものに携わるようになり、一七年あまりが経過しておりますが、ニュースなどで、医師不足や救急患者のたらいまわしなどが問題となっていることは、みなさんご存知かと思えます。私が医師になった時代は、将来、医師過剰時代に日本も突入し、医師免許を持つていても仕事がない医者が溢れるであろうといわれていました。が、それとは全く逆の情勢になってしまいました。つい最近まで、特殊な専門性をもたない医者には、いざれ淘汰されるであろうから、我々も、様々な専門医という資格をとるように、先輩医師より強く勧められたものですが、このご時勢、あまり重要な意味を持たないような気もしてきました。

医師研修制度により、大学医局制度が崩壊し、都市や地方だけでなく、昼と夜における勤務医の数の格差が発生し、さらに医療訴訟によって、不可抗力ともとれる医療事故に対して、医師が刑事責任を負わされるケースも出るようになって、医師が最初から危険をとまなう可能性のある救急患者の診療を回避したがるようになったことが、診療科による格差やたらいまわしという問題を引き起こしております。このままですと、日本の医療は崩壊してしまいます。私の勤務している病院も、大学からの派遣医師の制限により、同じような問題をかかえています。このような問題は、現総理大臣が先日発言した「医師の怠慢」という要素は、全くないとは言いませんが、大学の医局が健全ではなかったため、政府が打ち出した改革というよりは改悪によって発生した問題であると考えられます。

私と同じような意見を持っている医師は少なくないと思えます。私たちは現状で、がんばっていくしかありませんが、医療崩壊によって、一番被害を受け

るのは、われわれ医師ではなく、患者である国民であることを、政治家が認識することを望みます。

後半は、硬い話をいたしました。再会できた、他の世界で活躍しておられる同窓の皆さんに、少しでも分かっていただきたくて、このようなことを書きました。どうぞお許しください。それでは、また再会できる日を、心待ちにしています。

### 文武両道

奥村 和之

昭和61年卒



岐阜高校を卒業して二三年が経過しましたが、希望と不安を抱えて過ごした高校生活のことは今でも鮮明に思い出されます。

入学直後にはじめて課された英文法のテストで、ほぼ百点満点の学生がいるなかで、自分はずか三〇点しかとることができずに愕然としたこと。英語授業のはじめに毎行行われる親単テストに合格することができず、再三、教室の最後尾に立たされたこと。男女共学でありながら、三年間通して男子クラスであったこと等々、正直、良い思い出の少ない高校生活ではありました。しかし、強豪校と常に互角の勝負をしていた剣道部での部活動は、たいへん良い思い出となっています。顧問の村瀬先生、望月先生、県トップレベルの実力を有する先輩らと、毎日、真剣な稽古ができたことはいまもって忘れることができません。県随一の進学校でありながら「文武両道」をモットーとする岐阜高校を卒業できたことはたいへん誇りに感じています。

卒業後、その当時の日本の大学の中では最も授業が厳しいといわれた関東の某私立大学の工業化学科に進学し、化学実験とそのレポートの作成に追われる過酷な日々を四年間過ごし、ふるさとの岐阜に戻って県職員に奉職することとなりました。

県職員となった私は、羽島郡笠松町北及にある繊維試験場、現在の岐阜県産業技術センター繊維研究部に配属され、現在もなお、繊維の加工技術に関する技術支援業務に携わっています。かつて岐阜県は、紡績・撚糸・織物・ニット・染色整理・アパレル・縫製といった川上から川下までの繊維製造業が集積した一大産地でありました。時代と共にその規模は縮小しておりますが、依然として多くの方が、繊維産業に従事しております。これらの皆様に対して、製造トランプルや製品クレームの原因調査試験、製品品質試験、技術開発のお手伝いをしております。

繊維工学は、材料工学、機械工学、品質工学等の各要素と製造現場における実学とが高度に融合し成熟した奥深い学問分野であります。工業化学をひととおりかじった程度の私には、刃が立たない難解なものでした。さすがにこの頃は、繊維工学や繊維試験法に関する理解が進み、最新機器による化学分析手法を併用することによって、依頼者の要求に見合った試験ができるようになってきました。また、試験のみならず、繊維加工技術

や、機械工学や情報処理に精通した同僚とともに加工装置の設計開発もしております。

岐阜県には産業技術センターのほか、関市の機械技術研究所、各務原市の情報技術研究所、多治見市のセラミックス研究所、高山市の生活技術研究所があります。プラスチック、繊維、紙、食品加工、機械金属、セラミックス、木製品分野等の「もの作り」に関わる皆様に少しでもお役に立てるよう頑張っておりますので、機会がありましたらお気軽にお立ち寄りください。

蛇足ではありますが、私には二人の娘と一人の息子がおります。一人息子が地元野球スポーツ少年団に入団したことをきっかけに、自分の体力づくりもかねて練習の手伝いをするようになりました。息子が最終学年になった年には父兄会の代表を務め、息子が卒団した昨年以降も、引き続き団の事務代表と低学年の指導者しております。週末の朝、ゆっくり休みたい衝動を抑え朝早くからグラウンドに出かけ、日中は子供達とともに運動をし、夜は、指導者仲間や父兄の方と酒を飲みながら野球談義と世間話に花を咲かせ地域

の方との親交を深めております。仕事とスポーツ少年団の両方でくたくたになりながらも、「文武両道」とボランティアの精神を思い起こし、疲れた体に鞭を打って毎朝出勤する日々が続いております。

### 野球部の思い出

春日 直道

昭和61年卒



岐高時代の野球部の思い出は数えきれないほどあるが、中でもPL学園との試合は二五年経っても記憶に新しい。他人でも何とか分かる話なのでその試合を振り返ってみる。

昭和五九年十一月三日、高二の秋。晴れてけっこう寒かつ



だが、県営球場のスタンドには数多くの生徒らが応援に来てくれた。真面目に授業を聞いたことがない化学の安平先生が後日、試合の写真は何枚かくれたのは感激した。この日、県岐商が創立八〇周年の記念試合として大阪のPL学園と岐高を招待した。

第一試合は県岐商対PL。PLは桑田が先発。ネット裏で桑田のカーブを見たが、とても高校生の球とは思えない。岐商の選手も「あんなカーブ、高校生が打てるわけがない」と語っていた。一四対〇で桑田の完封勝利。その試合中、PLのキャプテン松山（のちにオリックス。現オリックスコーチ）と先攻後攻を決めるジャンケンをしたらしいきなりパーを出されて負けた。「最初はグー」は岐阜のローカルルールだったのか、それとも分かっているパーを出したのか？ふてぶてしい態度に一瞬腹がたつたが「これが全国区のチームなのか」とも感じた。

さて第二試合。岐高対PL。なんと桑田はファンサービスも兼ねて？ライトで先発。なんで女子生徒に人気があるのか、当時から理解できないルックスの

桑田ではあったが、桑田が移動するたびに黄色い声援が発せられる場所も移動した。PLの先発投手は身長一九二センチの田口。甲子園に五期連続出場の皆勤賞チームだが、この二番投手は実はたいしたことなく、我々の実力でも打ちこめた。序盤で連打を浴びせると、岐高スタンドの同級生らは一塁にいる選手に相次いで怒声を浴びせた。「清原出て来い」「清原投げろ！」

「清原出て来い」「清原投げろ！」と宣言していたため、頑として代えなかった。五番ライトで先発の桑田に満塁で打席が回ったとき、「ここでホームランならこいつは本当にすごいな」と思っていたら本当に満塁本塁打を打たれてしまった。私はショートを守っていたが全然守備機会がなく、ポンポンと外野に運ばれ、ショートのくせに暇で翌日風邪をひいてしまった。一四点取られたイニングもあった。一イニングに二ケタ取られたのは人生でその時だけだ。招待試合のためコールドもなく、エース小林は投球数が三〇〇を超え、結果は三三対一〇で負けた。

翌日、学校に行ったら同級生に「ラグビーのスコアだね」とか知らわれた。でも、昭和四二年組が主力だったPL学園に対して、桑田が投げているとはいえない

大きく曲がるカーブに面食らいながらも得点を重ねた。

一方、PLの攻撃はすごかった。「これが高校生か。プロ野球の予備校じゃないか」とも感じた。

岐高のエース、小林がメツタ打ちにあった。岐高の浅井監督は試合前、「この試合はどんなことがあっても小林一本で行く」と宣言していたため、頑として代えなかった。五番ライトで先発の桑田に満塁で打席が回ったとき、「ここでホームランならこいつは本当にすごいな」と思っていたら本当に満塁本塁打を打たれてしまった。私はショートを守っていたが全然守備機会がなく、ポンポンと外野に運ばれ、ショートのくせに暇で翌日風邪をひいてしまった。一四点取られたイニングもあった。一イニングに二ケタ取られたのは人生でその時だけだ。招待試合のためコールドもなく、エース小林は投球数が三〇〇を超え、結果は三三対一〇で負けた。

翌日、学校に行ったら同級生に「ラグビーのスコアだね」とか知らわれた。でも、昭和四二年組が主力だったPL学園に対して、桑田が投げているとはいえない

一〇点取ったチームは全国で岐阜高校だけだと、今でも誇りに思っている。ちなみに当時のPLの最高得点は四〇を超えていない。



40歳  
河合 理香  
昭和61年卒



二〇〇八年一月二日、私は一八年ぶりにアメリカカ行きの飛行機に乗り込んでいた。今から

私は、懐かしい人々に会う。一人は一六歳の時、我が家に一年間ホームステイしていた留学生のアレクサングリフィス。同級生だった人は覚えてるだろうか、私たちが高校二年の時に岐阜高校にきたアメリカからの留学生だ。

アメリカ旅行をしようと思っただきっかけは、二週間の休暇がとれたからだった。私はNHKにディレクターとして勤めて一七年になる。毎日時間に追われる夜中に家に帰ってただ眠るだけの日々、疲れ果てていた。特に四〇歳はなぜか忙しく、体力的にその忙しさについて行けなくなったと感じた時には、気力もなくなっていた。大好きだったはずの仕事なのに、自分の中から何も出てこなくなったと気づいた。行き詰まった。もう一七年も作ってきたはずの番組が作れない。作り方は全部わかっているのに、その核になる「伝えたい何か」「新しく作りたい何か」が何も出てこなくなってしまう。そんな自分をどうすることもできない。それでも去年の夏から秋に、身を削ぎ骨を削る思いで大仕事をやり終え、精も根も尽き果てた。二週間の

二〇〇八年一月二日、私は一八年ぶりにアメリカカ行きの飛行機に乗り込んでいた。今から

休みは、そんな辛い仕事の代償にももらったものだった。

アレクサはニューヨークに住んでいた。長いフライト後、教えられた住所へタクシーで向かった。タクシーからスーツケースを降ろしているとき、古風で素敵なマンシ

オンからほっそりした女性が出てきた。腕には大きな瞳の可愛い赤ちゃん。「Hi!」長かった黒髪がグレイのショートヘアになり、はじけるようだった笑顔が柔らかく優しい微笑みに変わっていた。「ああ、この人は素敵な人生を歩んできたんだな」と感じた。建築家の素敵なご主人と結婚して、今は美術学校でデザイナーに美術史を教え、美術雑誌に記事を書いている。当時、たった一四歳で初めて日本に

来たアレクサ。ポニー・ジョージが好きだった。おきやんだった彼女は、今、娘がかわいくて仕方ない一生懸命なお母さんになっていた。その晩、私はアレクサと二人きりで食事をした。懐かしい昔話をしてから、ずつと伝えたかった言葉を口にした。「あの頃は、もっとアレクサに優しくすれば良かったのに、ごめんなさい」すると彼女も「私の方こそ子どもっぽいことばか

りしてごめんなさい。日本での一年間は私の宝物。あの一年で私は変わった」と言ってくれた。二四年ぶりに二人で涙を流して手を握りあい、初めて心が通じた気がした。

その旅行で、私はその後ノースカロライナに一八歳の時私自身がホームステイさせてもらったホストファミリーを訪ね、更に二二歳の時留学したオバリン大学の学友たちを巡った。みんなどうしているのか、どんな人生を送っているのかとドキドキしながら、それぞれに年を重ね、いい顔になっていった。二〇年ぶりの私を、涙を流して歓迎してくれた。期せずして、私のアメリカ旅行は青春時代の自分自身を辿る旅になった。人生で一番勉強した時間。自分の気持ちをもっと英語で表現しきれず悔し涙を流した日々、世界で働く仕事を夢見ていた一八歳や二二歳の頃の自分をまざまざと思い出した。そして今の人生は本当に自分が送りたい人生だったのか、自分は今どんな人生を送りたいのか、自問自答を始めてしまった。休暇が終わった今も、私は自問自答を続けている。

四〇歳は、論語では不惑と言

われる。でも私はまだまだ未熟で、不惑にはたどり着けない。今のこの迷いや模索は不惑にたどり着くための時間なのかな、と思いつつ、最近では、働き詰めの生活を少し改め、人間らしい、友達や自然を感じられる生活を心がけている。

私の仕事は「中学生日記」という番組の演出だ。一二歳から一五歳の若者達と日々出逢い、話を聞き、一緒に演技をして、番組を作り上げている。彼らの話を聞いていると、ハッとすることばかりだ。失敗を恐れる、勉強をしないなど、社会一般に言われることを感じることもあるけれど、彼らはいつもみずみずしく、繊細で優しい。彼らと話すたびに、人生を楽しむのは自分次第だと教えられる。二三年前の岐阜高校。文化祭直前、野球部と競うように夜遅くまで演劇部の練習をした体育館のステージ。狭苦しい部室。あの頃の自分もこの中学生と同じくらい柔らかくてみずみずしかったのだろう。傷つくことと同じくらい、夢見る力も旺盛だったに違いない。いつでもいつまでも成長することができ、新しい世界に出会える自分を、理想を追

い求める力を知っていた。そんな自分を思い出した。

四〇歳。もう一度自分とこれからの人生を見つめ直し、新たな歩みを始めるチャンスだ。体力がちよっと落ちた自分にも優しくして、時間をかけて、無理せず楽しんで、世界が、みんなが幸せになるよう、意味がある事を積み重ねていきたい。

そう思うと、四〇歳超えは楽しいと思う。

記憶の断片を辿ったら...

小西千晶 (旧姓・坂井) 昭和61年卒

昨年、大学の出身研究室の教授と仕事で面談する機会がありました。本題が一段落着いた頃、同行した同僚が「小西さんは、

どんな学生でしたか？」と尋ねたところ、曰く「バンカラ、のイメージだなあ」。「先生！それって普通、男の人に使いますか？」私の問いにも「坂井さん(注：旧姓)、岐阜高校だったよね。岐阜高校出身って、バンカラな人が多かったよ。坂井さんもそうだし。」と、答えは変わらず。今回の寄稿に当たり、まず思い出したのがこの言葉でした。本当にそうだったわけ？

一生懸命高校時代を思い出そうとしたが、二〇年以上(一)も経つと、断片的な記憶しか残っていません。それなら、その断片を辿ってみることにしました。

入学前後 どんな友人がいるんだろう、面白い先生いるかな、とわくわくしながら参加した入学前の説明会で、早くもどっさり宿題が出てびっくり。そして入学直後にはテストが。英語で単語の意味を問われ「thunder」が分からず、うゝむと悩み、はたと「サンダー杉山(プロレスラー)」を思い出して苦し紛れに「気が荒い」と解答。○だったか×だったかは憶えていません(×に決まっていますが)。

金武先生 忘れられない先生。

記憶の断片を辿ったら...

記憶の断片を辿ったら...

記憶の断片を辿ったら...



記憶の断片を辿ったら... 小西千晶 (旧姓・坂井) 昭和61年卒

記憶の断片を辿ったら...

記憶の断片を辿ったら...

最初の授業で、まだ猫を一〇〇

匹ほどかぶっていた私を「千

晶!」と大声で呼び「女の定義

を言ってみろ!」「?」「?」「お

しえてやるか。男に従順なこと

や」。一体全体どうして、いき

なりそんなことを言ったのでし

よう。それともこれは先生の決

まり文句だったのか?誰か同じ

こと言われた方いらっしゃいま

すか?(今だったら問題になり

そうですが、当時の大らかさが

私は好きです。)

センサ 柳ヶ瀬にあった当時ち

よっとおしゃれなビル。雨の日

サービスでパフェが半額になる

お店があり、バスケ部の仲間と

体験でした。

遅刻 年子の妹も岐阜でしたが

「お姉ちゃんと同じ高校と思え

ないほど、朝一緒に出たこと無

かったね。」と言われるほど、い

つもぎりぎりに家を出ていまし

た。間に合わないことも多く、

校門で見張っていた数学の生田

先生が授業のため居なくなるの

を見計らって門をよじ登ること

も。担任の江崎先生に「昨日ま

で坂井と河口の遅刻回数が多い

でしたが、今朝坂井が遅刻をし

たので、単独トップになりました

。」と発表され、褒められて

いるような錯覚を起こした思い

出があります。

断片があります。一見バンカ

ラとはちよつと違うようにも思

うのですが、よく見るとどこに

も軟弱さや軽率さは無く、先生

も友人も(多分当時の私も)い

つも真剣に物事にぶつかっていた

と思います。そしてそれが冒頭

の教授の印象になったのかもし

れません。

ここで現在までを簡単に紹介

します。大学卒業後、(株)東

芝の府中工場にエンジニアとし

て入社、九年目に営業職として

港区の本社に異動。再生可能エ

ネルギー及び資源の活用を目指

し、最新技術のアプリケーション

シ、最新技術のアプリケーション

在京の岐阜同級生達とは、飲

んで朝までハシゴが恒例となっ

てしまいましたが(苦笑)、二年

前には岐阜での学年全体の同窓

会が実現。彼らと話していると、

高校の頃からの、真剣に物事にぶ

つかっていた、そのベースは今

も変わっていないように思います。

きつと同じことが先輩・後輩方

にも言えるのでしよう。今回の

全体同窓会への参加で、新たな

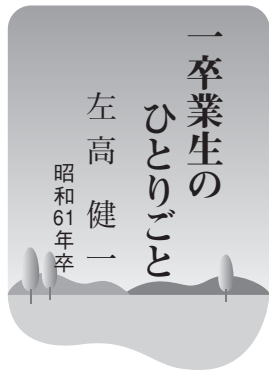
岐阜発の出会いに恵まれること

を本当に嬉しく思い、二〇年以

上前の入学説明会のとさのよう

に、今からわくわくしています。

(2009.2.10 大田区の自宅にて)



二十数年前、夏はもつと快か

った。柔道部の練習の後、頭か

ら水をかぶり、畳の上に寝転ぶ

のが、最高に気持ちよかった。

汗ばんだ背中に張り付くシャツ、

冷房なしの教室、なきやまぬ蟬

の声、どれも大して苦にならな

かった。

二十数年前、秋はもつと鮮や

かだった。金華山、長良川、道

行く人々、皆強く眩しい光線を

放っていた。空気の肌触りも心

地よかった。王将餃子、寿がき

やラーメン、立ち食いそば、み

んなうまかった。

二十数年前、冬はもつと寒か

った。寝る直前に入浴して洗髪

分も、皆若かった。当時、不惑を過ぎた自分自身の姿について、どんなイメージを描いていたのだろうか。思い出せない。

二十数年の月日が流れた。今は今、東京で弁護士をしている。国内外の企業を依頼者として、いくつもの案件を同時進行でこなしている。特に昨年のリーマン・ショック以降は、深刻で難しいトラブルが多く、対応に追われている。きついと思うこともある。しかし、依頼者に喜んでもらえる結果を実現できたときは、それまでに積もった疲労感は、このうえない充実感に変わる。

ワーカホリック気味な毎日、映画やドラマの見方も変える。「もし自分がこの登場人物だったら」ではなく、「もし自分がこの登場人物から相談を受けた弁護士だったら」と、自問自答するようになってしまった。スター・ウォーズでは、アナキン・スカイウォーカーの振舞について、ジェダイ騎士団が依頼者として自分に相談してきたら、どんな助言をすべきだろうか、自分は冷静で的確に判断できるだろうか、と、本筋そっちのけで考えにふけた。

仕事でもそれ以外でも、会食パーティ、その他様々な集まりに出る機会が増えた。違う世界に触れ、いろいろな方から刺激をいただくのはありがたく、積極的に参加している。我以外皆我師ということ、毎日実感している。

幸いなことに、特に大きな病気にかかったことはない。しかし、年に、三、四回受けている健康診断では、中性脂肪などが高い数値となり、毎回メタボと判定されている。

自分なりに健康を考えて、プールに行くようになった。上半身クロール、下半身平泳ぎという変則泳法が、自分に一番あっていることを発見した。腰に負担がかかるし、周りの目も気にはなるが、上達したいと思う。たまに気功もやっている。四階差以内の上下移動には、エレベーターではなく、階段を使っている。職場では、夜に四股を踏む。できるだけ自分にあつた健康法を見つけて、無理なくやっていくのがよさそう。

昨年末から、何とか一か月一キロ以上のペースでダイエットしており、六月の同窓会では、スリムな姿で皆さんにお会いし

たい。

子どもは二人とも一〇代になり、友達との付き合いで外出することが多くなった。聴いている流行歌を聞いてもよくわからず、というより歌詞が聞き取れず、世代の違いを感じる。しかし、ジョークを言えば、まだ多少は笑ってくれる。

旅行は、あちこち欲張って回るのもよいが、温泉でのゆるりとした時間に、何よりの安らぎを覚えるようになった。ついでに、和食、日本酒、焼酎も好きになった。

各務原の実家には、お盆、年末年始に帰っている。夕暮れ時に、近くの田んぼ道を散策するのが、妙に新鮮で楽しい。

同世代の清原選手の引退には、一つの時代の終わりを感した。その一方で、自分より年上のタレントが、いまだに少年隊を名乗って活動しているのを見ると、密かに嬉しい。

以前にも増して歴史への関心が強くなった。どの人物についても、四〇歳前後には何をしてきたのか、何を考えていたか、とても気になる。

ということ、見事なオヤジになつてしまったようだ。肩肘張

らず、後半の人生を歩んでいきたいと思っている。

## 立場かわって

関谷 篤  
昭和61年卒



昨年の夏、私は四半世紀ぶりに林間学舎を訪れる機会がありました。誰もが八階建ての素敵な建物と勘違いする、あのコンクリートむき出しの建物（今は「遊学館」という名前がついてます）は今もなお健在でありました。二五年前には、「近くの川が徐々に学舎の方に迫り、一〇年後には建物は流されて無いらう」などという噂がありました。あ

の噂に少々興奮したことが懐かしく思い出されました。あの頃のことを確認するように、ここで飯盒炊飯して、ここでおにぎりを握り、ここで夜の出し物をし、この風呂に、この二段ベッドで寝たのだと古い記憶が次々と蘇ってきました。今回初めて知ったことは、四階の上に展望室があったということです。男子にとつては、四階から上が女子の部屋なので四階以上は上がったことがなかったため、今まで知りませんでした。三六〇度近く見渡せるコの字型の廊下から、焼岳や錫杖岳が見渡せる素敵な場所でした。また、汚いお湯だと思っていたお風呂は温泉の源泉を引いたお湯であることも初めて知りました。まったく薄めていない温泉を引いているため、汚いと思っていたあの浮遊物の正体は「湯の花」だったのです。高校生には実に贅沢なお風呂でした。ベッドが畳（私の記憶では…）からフローリングになっていて以外、驚くことに昔と何一つ変わっていませんでした。時の流れがこだけ止まっているのではないかと思うくらい二五年間そのままでした。しかしながら、周りの様子は少々

変わっており、ペンションや民宿、旅館が多く建ち並び、昔の何もなかったイメージとは違い少しだけにぎやかな感じがしました。また、学舎の前には公営の足湯場があり、高校生が足湯に浸かり、ヒゲラシの音が響き渡る夕方に、赤く照らされている焼岳の景色を見ながら楽しそうに話している姿は昔にはなかったことでした。

さて、なぜ私が学舎へ訪れているのか不思議に思う方が多いと思いますが、現在私は母校に勤務しています。昨年四月に赴任しました。立場が変わって、生徒ではなく教師として母校に通うようになったわけですが、二五年前には座って恩師の授業を聴いていた出来の悪い私が、今こうして後輩の前に立って話をしていることが何か不思議ではありません。あの当時、最初の授業で英語だけで自分のことを紹介してくださった英語の授業、「山月記」「こころ」などの今も心に残る作品を格調高く教えていただいた国語の授業、黒板を見つめて静かに思いもよらない解答をし始める数学の授業、爆弾男のことを話してくださった化学の授業、皆既日食の写真を見せ

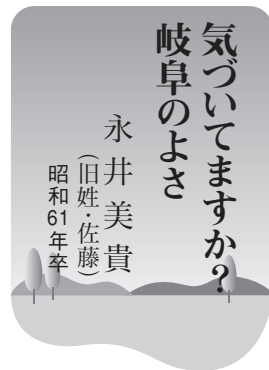
ていただいた地学の授業、天皇陛下のお名前を神武天皇から全て話された社会の授業、全校集会で「人間万事塞翁が馬」の話をしてくださった校長先生の有り難い講話など、高尚でかつ知的好奇心を誘う、感動的で印象的な授業を思い出すと自分にはその力量があるのか不安になります。すばらしい後輩達とこれから数年間、自分なりに関わっていくかと思っています。

赴任初日の緊張した一日（昨年の四月一日）が終わって、廊下を歩いていると、廊下にさす西日を見てふと二五年前の記憶が蘇りました。この景色を久しぶりに見た。これは岐阜高校の廊下だと。普通の校舎は南向きに建っているので陽が差すことは



正面玄関を望むイメージパース

無いのですが、岐阜は東向きなので、廊下に西日がさすのです。この廊下もあと一年で見ることができなくなりそうです。新校舎に替わるからです。現在、その工事が徐々に進んでいます。



昭和六一年（一九八六年）三月に岐阜高校を卒業して、私は東京にあるJ大学に入学しました。一八歳で東京で一人暮らしを始めたときは、どうして東京へきてしまったの？とホームシックにかかりましたが、それは今となっては懐かしい思い出です。岐阜を離れると岐阜の良さがしみじみわかりました。東京へ行って初めてわかったことは、岐阜の水は美味しいということ

です。東京では、岐阜と同じようにつくろのお味噌汁の味が違うのです。四方を山に囲まれ、夏になると蝉や蛙の鳴き声があるのも岐阜では当たり前ですが、東京の街中は、山はありません

し、車の音しかしません。長良川や金華山を美しいと心から思うのも、冬、ふと見上げた夜空の星の美しさに気づいたのも、伊奈波神社の荘厳さを改めて感じたのもすべて東京にいてはじめて気づきました。岐阜にいれば、当たり前ですが、いかに素敵なことであったのか、たくさん気づきました。

卒後は、高い学費を出してもらった親の元にせめて孝行をしたく岐阜へ戻りました。東京で勉強していると、東京に居たいと思いましたが、生活をするためには、現実を見なくてはいけないと思えました。物価の高い東京では、給料の少ない研修医



職場の岐阜高校出身者のみなさん  
前列（左から）A講師、K教授、K講師  
後列（左から）筆者、O助教、M先生、M先生、H先生

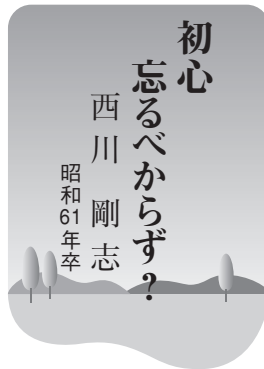
は経済的に簡単には自立できません。岐阜に戻り卒業二年間の研修医の間に、たくさん同窓生に再会しました。いまでも大切な友人として交流しています。その後、岐阜大学医学部D科に入局しました。入局して驚いたのは、出身大学は違っても岐阜高校出身者がすごく多いことです。岐阜高校在学中は、同年代の方しか面識がなかったのですが、社会人になると出身高校で縦のつながりができます。もちろん、K教授は岐阜高校出身ですし、K講師、A講師、O助教、後輩のM先生、T先生、H先生そしてM先生など先輩後輩ともに岐阜高校出身者だらけです。岐阜

高校出身というだけでなんだか同志のような気がして連帯感がわきます。診察中、岐阜高校で当時教えていただいた恩師が、患者さんとして受診されることもあり、威厳のある恩師を診察させていただいてよいものかと恐縮することもあります。

そんな私も結婚し、子どもを授かりました。最近社会問題になっている医師不足の原因の一つに女性医師の子育てのための離職があります。私の周りでもたくさん優秀な女性医師が子育てのために退職しています。女性医師の臨機応変に長時間働きたいという要望にもフレキシブルに対応してくれる保育園をつくることこそが、離職に歯止めをかけるのではないかと考えました。私のように考えている人は多く、女性医師のみならず、看護師や研究者、さらに岐阜大学全職員に輪が広がり、様々な方々からの理解をいただき二〇〇八年四月に岐阜大学は岐阜大学保育園”ほほえみ”を立ち上げました。ほほえみは、夜二〇時(場合によっては二二時まで)まで対応可能で、就学前まで利用でき、今は定員三〇名です。一人一人の子どもの成長を大切にしてくれる保育園です。〇、一歳児の入所者が多く、二〇名前後です。環境のいい保育園であれば、子どもを託し私たちは安心して、思いっきり働くことができます。黒野の自然あふれる環境で育った子ども達は、私のようにまた、岐阜の良さを肌

で感じ、岐阜の地を離れて勉学や仕事に活躍しても、やがては岐阜へもどってくるのではないのでしょうか。いつまでも岐阜高校がたくさんの子どもたちに夢と希望と可能性を与え続ける高校であり続けますようお願いしています。

ペンネーム ぽによ



思い起こせば岐高での三年間は人生で一番濃かった三年間ではないかと思えます。岐高の先生方には本当にお世話になりました。特に小テストの赤点、補習、追試で激しくお世話になりました。赤点をもらっておい

ほんとうによかった。岐高のありがたさはあとになって身に染みてきます。現在わたしは技術者として生計をたていられるのも岐高の先生方のおかげです。しかし当時のわたしはなぜあんなに勉強ぎらいだったのだろうか？

さて、ついこのあいだ卒業したような印象もあったのですが気のせいでした。岐高を出てからもう二三年くらいたっています。一方、わたし自身は終戦から二二年半で生まれた勘定です。この視点に気づいたときちよつとクラクラきました。歴史認識の観点ではなく、わたしが思っていた大昔のイメージと終戦という時代をすごされた先輩がたにはすいません。とにかく岐高生のころは大昔のことだと思っていました。うわあ、すごい未来にきちゃったんだな。とそれが一つの衝撃です。でもまてよ、今って未来としてどうなんだ？ というのが二つめの衝撃です。岐高生のころ二一世紀はどうなると思っていたつけ？ 焼け跡から復興したようなベースと卒業時から今までのベースを比較するとどうなるのかな？

岐高時代の自分にとって、空中を走る自家用車とか、一〇万馬力のロボットとか、家族旅行で月にゆくとか、二一世紀ってそういうイメージでした。しかし、どれひとつとして実現していません。今おもえばずいぶん無茶なこと考えていたわけですが、みなさんはどんな未来を迎えると思っていましたか？ みなさんだつて岐高生の感覚をとりもどせば、未来の生活(つまり二〇〇九年現在のくらし)ってけっこう地味だなくらいは思うんじゃないですか？ 比較例ですが、鉄腕アトムは二〇〇三年四月七日誕生ってことになっています。

〇九年現在の生活が地味なら、その責任の一端は確実に自分にもあるのではないのか？ もう自分でなんとかしなくてはいけないはず。前の段落は天に唾する内容であったことをまことに遺憾に思います。今、完全に頭の中身を大人の状態にもどしたところでは、初心に戻ってみるのもたまにはいいものですね。

鉄腕アトムは、大物すぎるとしても、とびだして見えるTVとか、自動車運動してくれる車とか、家事や介護をしてくれるロボットとか、リアル系未来商品ですらぜんぜん発売にいたっていないのです。これはどうしたことだ！ 責任者でてこい！ いやまてよ、わたしはもう岐高生ではなく、中堅の技術者なのだった。未来(二〇

昨今は社会全般に景気よくない話も多く、二〇〇九年も厳しいと言われ喰うための仕事に汲々としていましたが、より未來的な製品を作るための助走期間と思えば笑って乗りきれそうです。いずれは「なんじゃこりやー！」と世間の度肝を抜く製品を作りますので、そのときはお買い上げのほうよろしくお願ひ申し上げます。





発行所  
岐阜大学附属  
岐阜高等学校  
岐阜新聞部

# 卒業生に贈る言葉 （学校長、担任から）

「岐高新聞」昭和41・51・61年3月号より  
…紙面の都合上部割愛をお許しく下さい…

## 昭和四一年二月号

卒業生よ幸せに

学校長 永井 孝

諸君は、高校急増という時代の嵐に乗って本校に入学し、今や大学に急増の旋風を巻き起きんとしている。

諸君は時代の子である。そうした意味で世間の注目を浴びている。何か諸君には、新しい日本の時代的使命が感じられる。…

顧みると、本校としては、この三年間校舎改築のため落着かない日々を過ごさせただろうと気の毒に感じている。…諸君は、岐阜国体の思い出も大きい感激と思うが、本校校舎が漸く竣工を見るにいたったことは、卒業に当って感慨深いものがあるろう。…

頭と勉強だけではどうにもうまくいかない。諸君は、自ら自己がおかしいと自知したら、自ら方向を建て直すだけの自力を持って欲しい。不思議にも、ツバメは南の国へ飛んで行く。踏まれて

も、引きちぎられても生き抜いてゆく道端の雑草のようなたくましさ望む。

最後に、諸君は、岐高の卒業生として立派な人間として社会のためになり、そして、幸福を築かれんことを祈ってやまない。

一組担任 飯尾誠太郎

今日の最善を信じて勇敢に

よりよき明日を想うて謙虚に

二組 伊藤 秀幸

欺かれても信ずること、人の心は良きものなれば。敗れても尚敗れても努めること。成果は知らず。このほかに、人の生きる道なし。

三組 大野 哲男

桃李不言下自成蹊

四組 小野木 正

気を大きくもって生きたいものだ。

五組 木内 秀二

とにかく、前向きに歩くこと

六組 小林 勝己  
自分の心に問うて恥じない行動がとれたら、すばらしいと思う。

七組 後藤 勝

なさずして可能性を惜しまれるよりは、なして努力をたたえられる人間でありたい。

八組 鮫島登美子

"There is tomorrow" "Gone with the wind" の中でスカーレット・オハラは、いつもこのように独り言を言っていて、度重なる苦境の中を、明るく生きて行きます。

九組 沢田助太郎

"Tomorrow is a new day"

今年もまた新しい仕事を考えています。

諸君の御発展を祈る。

十組 寺本 成章

自今負雲飛

## 昭和五一年二月号

雪に耐えて梅花香し

学校長 堀 房夫

…諸君は、私どもの経験した中でも最も平和で豊かな世の中に生まれ育ってきた人達である。そしてそれが当り前だと思ふまでになっている。…世の中に甘え、自分に甘えいつまでたっても精神的に自立できない人間が多いように思う。…本校生徒のモットーは百折不撓の精神であるが、これは、どんなことに直面しようとも、どんなに目的が遠くとも、決して屈することなく努力してやまぬ精神である。昔の詩に「雪に耐えて梅花香しく、霜を経て楓葉丹なり」というのがある。…人間とても同様に苦勞して初めて立派な人格をつくることができるというものであろう。甘えることなく、それぞれの立場での役割を自覚し、その責任と義務を果たすことが大切である。…

…今や大学は特別なところではなくなっている。有名な大学へ入ることだけ

が人生のすべてであると思うがごときは、  
全くの錯覚でしかないことを自覚しても  
らいたい。問題はそこで何を勉強し、何  
を得たかである。：諸君は真の勉強と  
は何か、真の人間形成とは何かを考え、  
それに向って努力を続けてもらいたい。  
：

一組担任 岩田 望

「がんばりやあ。」

二組 岸野 武士  
空想力と情熱を取りもどせ。  
自由奔放に駆けめぐれ。

そして、幸福になつてください。

三組 土川 裕

美しきもの一心

いつまでも美しい心を。

すばらしきもの一若さ

いつまでも若さを。

四組 河瀬 治見

自分の言行には責任をもて。常に正  
道を歩め。どんな困難にあつても、決  
してよこしまな心をもつな。卑屈にな  
ってはならぬ。急いでではならぬ。常に思  
いやりの心を忘れるな。

諸君の活躍と健康を祈る。

五組 中村 善光  
旺盛な精神力でいつも向上を模索し、  
誠実で謙虚な心を見失わず、周囲の人々  
から信頼され愛される人となるよう、  
自己練磨に励んで欲しい。決して力無  
き者を踏みつけにするような人にはな  
るな。健康に充分注意しよう。

六組 金武 幸八

「わかつとるな！」

七組 山田 喜三

想像をこえる人生のきびしさを若人  
は、苦とせず、勇気をもって克服して  
ゆく……その姿は美に、美しくもあり、  
逞しくもある。

無限の可能性を秘め

さあ、出発したまえ。

八組 杉山 仁

自分のことは、自分が一番わかっている  
つもりでも、実はなかなか自己を正  
しく見ることはむづかしいものだ。とも  
すると、我々は自分を「棚」にあげて  
しまいがちである。これからより広く複  
雑な人間社会へ進んでゆく皆さんに、「自  
己に厳しく、他人には寛大であれ」と  
いう言葉を贈りたい。

九組 山田 三郎  
ご卒業おめでとう。  
望む！大学教育で真の理性を極めて、  
一人静かに深淵のいとなみに頭をたれう  
るような人に成長してほしい。

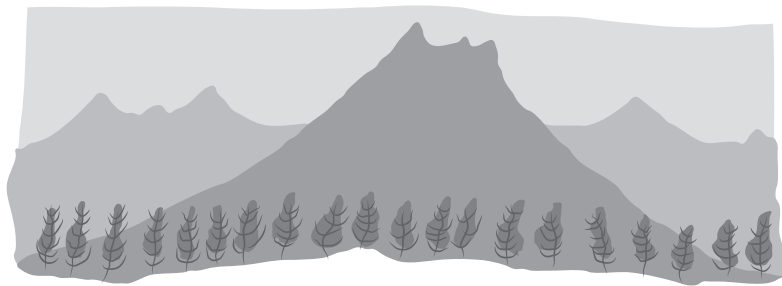
十組 高橋 伸郎

自分の力をフルに發揮して生きようよ。

そして、

腹の底から笑えるように生きようよ。

いつまでもな。



### 昭和六一年三月号

#### 竹に学ぶ

学校長 富成 侑彦

竹は不思議な魅力を持った植物であ  
る。一見ひ弱そうに見えながら、あの  
雪の重さを跳ね返す力はどこに潜んでい  
るのだろうか。僕には、その秘密は、  
あの節にあるような気がしてならない。  
：まことに竹の節というものは、不思  
議な植物の不思議な部分である。

人生にもいくつかの節がある。出生、  
入学、卒業、成人、就職、結婚、定年、  
そして死。卒業も人生の大切な「節」  
の一つである。諸君も、この大切な「節」  
に当たって、三年間を振り返り、矯め  
直すべきところは矯め直して、自分の進  
むべき方向を見定めて貰いたい。ただ、  
竹の節のように、思う通りに曲げる  
ことは難しいかも知れないが。

卒業生を送ることは、われわれ教師  
にとつては、育て上げた娘を嫁に出す  
気持ちである。：

竹のように素直な、竹のように強靱  
な、竹のようになやかな、竹のよう  
に生命力のある人間に育って欲しい。  
諸君の健闘を祈ります。



一組担任 杉山 勝美  
卒業は一つの節目であつて、三年間  
岐阜高校で学び過した事の評価はこれ  
からです。  
今後の健闘を期待し、健康を祈りま  
す。

二組 内川 史郎  
：現在の社会の大きな流れの中で真  
面目に考える事より、流れに身を任せ  
た方が楽である。：

大流の中、日本の足でしっかり立ち、  
納得するまで自分の頭で考える事が大  
切ではないだろうか。そして、その大流  
の流れつく所を考えてみる事も無駄では  
ないと思ふのだが。

三組 服部 岩夫  
チリも積もれば山となります。

「大きな夢、小さな一歩」  
初心を大切に頑張りましょう。お互い  
に。

：一段一段が初心でなければいけま  
せん。そうすれば、必ず、目標に到達  
でき、よい仕事ができると信じています。  
では健康で！

四組 江崎 正徳  
諸君達の新たな門出に際し、「運鈍根」  
という言葉を餞としたい。：

滴水石をも穿つと言うが、粘り強い  
努力を継続すれば、徒労はあり得ない。  
挫折することなく、地道な努力を積み  
重ねてほしい。御多幸を祈る。

五組 日比野安平  
：「かりそめの事にて、心の奥見ゆ  
るものなり」挨拶をしたり、掃除をし  
たり、あたりまえの事は、極あたりま  
えにやってみよう。そしてこのことだけ  
はというものが見つかったら、断固頑張  
って下さい。その激しい決意で自分を変  
えていって下さい。： 本物を求めて、  
時には孤独の中に身を置いて自分を鍛  
えていって下さい。：

六組 兼松 修司  
：幸福とは、我々が自己の全存在を  
賭け得るものを持ち、それを追求し、  
その結果手中にすることが出来るものだ。  
：

充実した時を持つことのすばらしさを  
味わってもらいたい。：  
君たちが去ったが故に賭けるものを  
無くし、寂しさにじっと耐えながら君  
たちの幸福を祈り続けている男を忘れ  
ないでほしい。

七組 大竹 克昌  
：現在の若者のことを嘆く年齢に達

してしまつた自分に、今気付くのであ  
る。将来は君達のものになろう。しつ  
かりしてほしいと切に願ひながら、君達  
の門出を祝すものである。調子に乗り  
すぎて失敗しないように自重してほしい。

八組 大月 竜郎  
：次の様なことは、思い出してほしい。  
災いや悪徳の充満した恐るべきパンドラ  
の箱の一番奥に、プロメテウスが入れてお  
いたと言う「希望」を、自分に対して  
も、人間や社会に対しても、決して捨  
てないことを。

九組 竹内 卓  
：知性だけでなく英知 (wisdom) も、  
兼ね備えた人になつてもらいたい。最近、  
留学のため英文の成績証明書や推薦状  
を、依頼に来る卒業生がいる。先輩に  
続いて国際交流に、積極的に参加して  
ほしい。そのためにも語学のレベルを維  
持するようにしよう。就職するにも、  
専門プラス語学力は絶対に有利である。  
Good Luck To You All!

十組 村木 正子  
：「してもらおう」ことを期待するの  
は、幼児か老人のすること。若年性老  
人症にかからぬよう常に自分に対して  
ある過酷さをさりげなく強いることです。

自分は作るものであつて守るものではあ  
りません。どんな体験の中に、どんな  
発見があり、どんな自分を作つたか、  
時には見せに来て下さい。豊かな未来  
を祈っています。



新聞局一同  
親単・山貞・基礎英にチャート等々  
小テスト 合間をぬつての部活動  
夕日の青春、長良川堤  
全ての苦難を乗り越えて  
岐高魂(百折不撓) いつまでも

# 部活動だより

平成20年度 部活動 試合結果等

## 体育系

部名	活動・試合結果など
硬式野球	秋季岐阜県高校野球大会 岐阜地区予選 2位 県大会 ベスト16
陸上競技	県高校新人大会 男子 400m 第3位 玉置 哲大 女子 800m 第1位 土岐英美子 女子 1500m 第1位 土岐英美子 (以上3種目2名、東海高校新人大会に出場) 第24回スーパーレディス駅伝(福井県) 土岐英美子 岐阜県選抜メンバーとして出場
サッカー	地区高校総体 1回戦 岐阜 1-1 各務原 2PK 4 岐阜県ユースリーグ (G3) 3勝1敗1分 2位 岐阜県ユースリーグ (後期) 2分1敗 3位
バレーボール男子	地区高校総体 1回戦 岐阜 2-0 加納 2回戦 岐阜 0-2 岐山 県高校新人大会地区予選 岐阜 2-0 山県 県高校新人大会 1回戦 岐阜 1-2 多治見北
バレーボール女子	地区高校総体 1回戦 岐阜 2-0 清美 2回戦 岐阜 0-2 東岐阜 県高校新人大会地区 1回戦 岐阜 2-1 岐阜北 2回戦 岐阜 1-2 富田
バドミントン男子	地区高校総体 3回戦 岐阜 60-58 岐阜高専 4回戦 岐阜 48-90 長良 県高校選抜大会 2回戦 岐阜 98-96 加茂 岐阜 80-67 本巣松陽 岐阜 35-112 富田
バドミントン女子	地区高校総体 2回戦 岐阜 74-38 各務原 3回戦 岐阜 12-177 岐阜女子 2回戦 岐阜 65-80 大垣東
卓球	県高校新人大会 男子団体 1回戦 岐阜 3-0 本巣松陽 2回戦 岐阜 0-3 岐阜農林 女子団体 1回戦 岐阜 1-2 関高工 高校新人大会 岐阜・中濃地区予選 女子個人 松波・廣瀬組 ベスト16 県大会出場
水泳競技	県高校総体 男子200m背泳ぎ 第5位 松野志道 (東海総体出場) 男子100m背泳ぎ 第8位 松野志道 (東海総体出場) 男子100m自由形 第8位 栗田浩佑 (東海総体出場) 女子200m自由形 第4位 宮川貴穂 (東海総体出場) 女子100m自由形 第5位 宮川貴穂 (東海総体出場) 県高校新人大会 女子100m自由形 第3位 宮川貴穂
卓球	全日本選手権大会岐阜県予選Kの部 3回戦進出 (男子) 加藤大樹、福田峻、岩田勇機、丹野裕貴 (女子) 浅野友里恵
卓球	県高校新人大会地区予選 岐阜地区順位決定戦 男子 地区2位 女子 地区2位 (県大会へ出場)
バドミントン	地区高校総体 男子団体 準決勝 岐阜 1-2 東岐阜 3位決定戦 岐阜 2-1 加納 (地区3位) 女子団体 2回戦 岐阜 0-3 長良 県高校新人大会地区予選 男子団体 決勝 岐阜 2-3 本巣松陽 (県大会へ) 女子団体 2回戦 岐阜 0-3 富田 男子個人 (ダブルス) 石田・後藤 県大会へ
柔道	地区高校総体 男子団体 1回戦 岐阜 3-2 羽島北 2回戦 岐阜 0-5 南岐阜
剣道	地区剣道大会 男子団体 ベスト8 岐阜 5-0 本巣松陽 岐阜 2-1 各務原 岐阜 0-3 東岐阜 女子団体 予選リーグ 岐阜 3-1 岐山 岐阜 1-3 岐阜城北 県新人大会 男子団体 ベスト16 3回戦 岐阜 1-4 益田清風 女子団体 ベスト16 2回戦 岐阜 0-2 岐阜城北
軟式野球	地区高校総体 岐阜 1-0 岐阜工業 岐阜 5-0 東岐阜 (優勝) 秋季(新人)大会 岐阜 2-0 高山西 岐阜 4-2 岐阜工業 岐阜 1-5 多治見北 岐阜 0-1 多治見工業 (県4位)
テニス男子	県高校新人大会 男子団体 県大会出場 個人シングルス 松久、足立 出場
テニス女子	県高校新人大会 女子団体 第3位 女子ダブルス ベスト8 藤田・村木
ハンドボール	権杯岐阜県選手権 1部 岐阜A 11-39 高山西 2部 岐阜B 13-24 岐阜工A 地区高校総体 1回戦 岐阜 18-15 岐阜工 2回戦 岐阜 9-39 東岐阜

## 17年ぶりの陸上競技部インターハイ出場

800m走 土岐英美子さん(2年8組)



東海総体出場常連の陸上競技部が、平成3年以來17年ぶりのインターハイ出場を果たしました。入賞は逸しましたが、インターハイ出場という久しぶりの快挙を成し遂げてくれました。

## 文化系

部名	活動・試合結果など
美術	岐阜地区高等学校美術展 絵画の部 優秀賞 長谷部早紀(2年) 絵画の部 奨励賞 古川野乃子(1年) 以上、県展美術・工芸展に出品 各務原市高校生美術展 絵画の部 入選 3名 国際高校生選抜書展 秀作賞 榎木祐介(3年) 他入選8名 団体 東海地区 準優勝
書道	各務原市高校生美術展 書部門 優秀賞 川瀬由紀子(2年)、北川万葉(1年) 他入選11名 岐阜県高等学校総合文化祭書道展 個人作品の部 最優秀賞 榎木 祐介(3年)
演劇	第56回県高校演劇岐阜北地区大会 奨励賞
音楽	第48回岐阜県合唱コンクール シード団体 第51回全日本合唱コンクール中部支部大会 金賞 第61回全日本合唱コンクール全国大会 金賞、香川県知事賞 第75回NHK全国学校音楽コンクール 岐阜県コンクール 金賞 第75回NHK全国学校音楽コンクール 東海北陸ブロックコンクール 銀賞 平成20年度岐阜市教育委員会賞
文芸	県総文 第8回文芸部交流会「詩のボクシング」第3位 生物班・日本昆虫両生類学会第47回大会「岐阜県に生息するカミサシショウワオの現状および保護活動と遺伝的多様性の分析」研究発表。 - 県総文祭 自然科学系部活動研究発表交流会優秀賞「絶滅危惧種カミサシショウワオの現状と遺伝的多様性の分析」 - 第43回全国野生生物保護実績発表大会、(現)日本鳥類保護連合会長賞状受賞 全国高校化学グランプリ2008 銅賞 古川幸太郎 日本化学会東海支部高校化学研究発表交流会 奨励賞「中和滴定における電導度の測定とその考察」(英語発表) 物理班 県総文祭 自然科学系部活動研究発表交流会 奨励賞「空気中の音速測定」
英語イベント	第2回岐阜県スピーチコンテストにて決勝進出
調理	岐阜県では6種類のマフィンを試作のうち、最高のものができあがり、多くの人に購入していただきました。
茶華道部	萬千家談会主催「学校茶道イッセイ」 一席 藤井 愛 二席 石原聖亮、岩田恵理子、北川舞、後藤 藍、森みな未
囲碁	県総文 囲碁新人大会 優勝 伊藤寛之(1年)
写真	岐阜県高校写真コンテスト 奨励賞 赤坂 衣理、出屋敷悠音、東松 明恵
吹奏楽	岐阜県吹奏楽ソロコンテスト県大会 最優秀賞 渡邊 有美 (コントラバス) 金賞 林 和歌 (クラリネット) 金賞 安田 有希 (フルート) 金賞 高見 知宏 (サキソフォン) 岐阜県吹奏楽コンクール 小編成の部 金賞、岐阜県教育委員会賞 東海吹奏楽コンクール 小編成の部 銀賞
クイズ研究	第28回全国高等学校クイズ選手権中部地区大会 決勝進出 竜野・若井・羽賀 その他 各地のクイズサークル主催の大会にも多数参加。 また、文化祭では百数十名の来場で大いに盛り上がりました。

## 局・その他

部名	活動・試合結果など
図書	図書部でカウンター当番や図書館だより「軽々なな読書三昧」の作成をしています。 10、12月に図書館講演会、新年1月下旬にカルタ大会を開催します。
放送	アナウンス部門を中心に毎日発声と基本的な話し口調の練習に努めています。 第43回岐阜県高等学校放送コンテスト 出場
家庭クラブ	岐阜県では岐阜の伝統料理の「かいもちおぼろ」を作って販売したり、「あんしんハウス桜木」(デイサービスセンター)の利用者の方々との交流会を実施できました。 第29回全国高校生ホームプロジェクトコンクール 優秀賞 西尾英里(1年) 岐阜スローフードコンテスト 準グランプリ 後藤麻由(2年) 優良賞 服部蓮花(1年)

# 部活動だより

平成20年度 部活動 試合結果等

## 体育系

部名	活動・試合結果など
陸上競技	東高校総体 女子800m, 女子1500m, 女子3000m 入賞 [東海高校総体出場]
	東海高校総体 女子800m 第4位 (全国高校総体出場) 岐阜県選手権 リレー女子4×400mリレー 第7位 (東海選手権出場)
サッカー	東高校総体 ベスト16
バレーボール 男子	スプリングチャレンジカップ1部 ベスト8 東高校総体 ベスト16
柔道	東高校総体 男子個人 73kg級 ベスト16 90kg級 ベスト16
	東高校総体 男子団体 ベスト16
硬式テニス	東高校総体 女子団体 準優勝 (東海高校総体 出場)
水泳	東高校総体 男子100mバタフライ, 100m背泳 女子100m自由入賞 [東海高校総体出場]

## 文化系

部名	活動・試合結果など
美術	岐阜県美術展青年部 優秀賞1名(デザイン部門) 入賞2名(絵画部門, 立体造形部門)
書道	岐阜県美術展青年部 書道部門 優秀賞2名 他13名入賞
写真	岐阜県美術展青年部 高校写真の部 入賞1名
音楽	6/21(土) 岐阜現代美術館/ekコンサートホールにてコンサート開催
囲碁将棋	第37回全国高校囲碁選手権大会岐阜県大会 ベスト8
自然科学	「平成20年度岐阜県野生生物保護功労者知事表彰」をカスミサンショウウオの保護活動に対して受賞
吹奏楽	第26回岐阜県吹奏楽ソロコンテスト岐阜県大会 金賞5名, 銀賞1名, 銅賞1名

## 局・その他

部名	活動・試合結果など
家庭クラブ	6/4(水)三世代伝統料理講習会を実施
空手道	東高校総体 女子個人形 3位入賞 東海高校総体出場



「岐高だより第92号」(2008年7月)から

## 体育系

陸上競技	春からのシーズンに向けて記録の日々です。 今年度以上の結果が残せるよう「高み」を目指して頑張っています。
サッカー	東高校新人大会地区予選 1位 岐阜 2-0 滝院 岐阜 6-0 羽島 準決勝 岐阜 1-0 各務原 決勝 岐阜 3-3 岐阜北 1回戦 岐阜 6-1 高山工 2回戦 岐阜 3-0 岐阜北 準々決勝 岐阜 2-0 長良 準決勝 岐阜 1-3 各務原
	東高校新人大会岐阜県大会 1回戦 岐阜 2-1 加茂(本郷) 2回戦 岐阜 0-2 岐阜工業
バレーボール	選抜優勝大会 岐阜県決勝大会 1回戦 岐阜 2-1 加茂(本郷) 2回戦 岐阜 0-2 岐阜工業
バレーボール	選抜優勝大会 岐阜県決勝大会 1回戦 岐阜 0-2 大垣南
バレーボール	東高校新人大会地区予選 第9位
バレーボール	東高校新人大会地区予選 第10位
ソフトテニス	地区高校室内大会 男子 1回戦 横山・七野 4-0 岐阜 新田・小林 3-4 岐阜第一 2回戦 横山・七野 1-4 津岐商 女子 1回戦 笠井・阿部 4-0 加納 松波・広瀬 4-2 加納 2回戦 笠井・阿部 0-4 鷺谷 松波・広瀬 0-4 岐阜総合
	東高校新人大会岐阜県大会 男子団体ベスト8 1回戦 岐阜 3-0 加茂農林 2回戦 岐阜 0-3 大垣西
卓球	東高校新人大会 男子団体 1回戦 岐阜 3-1 東濃実業 2回戦 岐阜 1-3 高山西 女子団体 2回戦 岐阜 1-3 愛大 全国選抜大会岐阜県予選 女子個人 矢野友重郎 3位入賞
	第18回全国高等学校選抜剣道大会男子選 男子団体 2回戦 岐阜 3-0 愛高 3回戦 岐阜 0-4 高山西 女子団体 1回戦 岐阜 5-0 関高 岐阜 0-2 市経商
ハンドボール	東高校新人大会 1回戦 岐阜 14-23 愛大

## 文化系

美術	岐阜市美術展 青年の部 絵画部門 秀作賞 高谷部早紀(2年) 吉川野乃子(1年) 入賞 入山 和代(1年)
書道	岐阜市美術展 青年の部 優秀賞 川瀬由紀子(2年) 出典 桂伊(1年) 他10名入賞
演劇	本年度の大会に向けて脚本研究に動いています。
音楽	平成20年度「岐阜県教育賞」受賞 第18回ぎふヴォーカルアンサンブルコンテスト(出場3チームとも入賞) - せーせーいっせい 「金賞」 - Aochim Plaza 「金賞」 - たなからぼたもち 「銀賞」
文芸	県誌文藝 文芸コンクール 小説部門 第1位 山田新加(1年)『魂』 部誌部門 第1位 R.LONCE7
自然科学	生物部 第43回全国野生生物保護実習者大会 (注) 日本鳥獣保護連盟会長賞状 受賞 化学部 様々な水溶液の電気伝導度測定を行っています。高分子のグル化とそれらの熱硬化性、金属イオンのゲル中での性質を研究しています。 物理部 固体・液体・気体中の音速測定をテーマに研究しています。
ESD-ディライト	第10回高校生スピーチの戦い 最優秀賞 小森成季(1年)
茶華道	(茶道) 平成20年度「学校茶道エッセイ」賞 高橋千夏 決交自給本部 学校茶道部 一賞 藤井 愛 佳作 石原亜弥, 岩田恵理子, 北川 舞, 後藤 藍, 森みな未 (華道) 3年生が華道剣道門「兼任」の許状を取得。
吹奏楽	岐阜県アンサンブルコンテスト県大会 サクソ混成七重奏 銅賞 金管八重奏 銅賞

## 局・その他

図書	10月27日, 12月1日に本校職員を講師に招き, 図書館講演会を実施。1日目は物理の村田先生による「科学でいこう!」, 2日目は化学の藤原先生による「鉄を知ろう~たたら(鑪)から近代製鉄150年まで」 また, 新年1月23日には恒例のカルタ大会(百人一首と本カルタ)を実施。
家庭クラブ	第29回全国高校生ホームプロジェクトコンクール 優秀賞 西尾 英里 第19回岐阜県福祉・福祉料理コンクール 優秀賞 立川 優果 2008年岐阜スローフードコンテスト 準グランプリ受賞 後藤 麻由 優秀賞 岩部 遥花 2月5日の白杖園訪問の際, 手作りのおマドレーヌと点字の手紙を持って施設の方々との交流を行いました。

「岐高だより第94号」(2009年3月)から

# お宝拝見!!

岐阜高校校長室を訪ねて「お宝」を拝見!!  
芸術の香り、歴史と栄光を実感できる展示であった。  
まだ眠っているものもあるらしい…。



「木バラ」 川崎小虎 (1886~1977)  
岐阜中学卒業。岐阜市出身の日本画家。  
恩賜賞受賞。東山魁夷の岳父。



「椿」 熊谷守一 (1880~1977)  
岐阜中学卒業。付知町出身の孤高の画家。  
岐高百年祭(1973=昭48)に寄贈。



中央の「虎」は大垣出身の画家・大橋翠石の作品。明治33年のパリ万博で「猛虎図」で優等金牌を受賞し、「虎の翠石」と謳われた。

# お宝拝見!!

全国高校野球大会(甲子園)は、昭和23年夏ベスト4、昭和24年夏準優勝(右の盾)、昭和29年度、36年度、52年度の3回春の選抜大会に出場。



岐高女の伝統を受け継いだ音楽部。昨年全日本合唱コンクール全国大会において6年連続8回目の金賞(うち平成16・18・19年の3年。文部科学大臣賞=高校部門1位)に輝き、県民栄誉賞も授賞。



囲碁将棋部、デベート部、放送部、クイズ研究部なども活躍。



## 平成21年度 大学合格者数（浪人含）

大 学 名	合格者数	大 学 名	合格者数	大 学 名	合格者数
北海道大	3	岐阜県立看護大	1	明治大	34
東北大	2	岐阜薬大	8	明治学院大	2
秋田大	1	愛知県立大	1	明治薬大	1
山形大	1	名古屋市立大	21	立教大	11
筑波大	4	大阪府立大	2	早稲田大	90
千葉大	1	兵庫県立大	1	麻布大	2
お茶の水女子大	1	神戸市外大	2	金沢医大	2
東京大	17	九州歯大	1	岐阜聖徳学園大	4
東京医歯大	2	自治医大	1	岐阜医療科学大	2
東京外大	3	青山学院大	13	愛知大	8
東京学芸大	1	学習院大	5	愛知医大	4
東京工業大	1	北里大	4	愛知学院大	4
一橋大	4	杏林大	1	愛知淑徳大	7
横浜国立大	6	慶応大	46	金城学院大	7
富山大	2	工学院大	1	中京大	8
金沢大	9	国際基督教大	2	豊田工大	4
福井大	4	芝浦工大	2	名古屋外大	1
山梨大	2	上智大	6	南山大	96
信州大	3	昭和大	1	藤田保健衛生大	8
岐阜大	29	成城大	2	名城大	26
静岡大	7	専修大	1	京都外大	2
愛知教育大	1	創価大	3	京都産業大	2
名古屋大	39	多摩美大	1	京都女子大	2
名古屋工大	12	中央大	37	京都薬大	1
三重大	1	津田塾大	6	同志社大	97
滋賀大	3	東京医大	1	同志社女子大	1
滋賀医大	1	東京女子大	2	立命館大	95
京都大	30	東京理大	43	龍谷大	2
大阪大	20	東邦大	1	大阪医大	1
神戸大	6	日本大	2	関西大	1
岡山大	2	日本女子大	1	関西学院大	14
広島大	7	法政大	9	岡山理大	2
高知大	2	星薬大	1	広島国際大	1
首都大東京	2	東京都市大	1	防衛医科大学校	1
横浜市立大	1	武蔵野美大	1	防衛大学校	1

## アトラクションの紹介



## アルゼンチン・タンゴの魅力

春日井 邦夫 バンドネオン・編曲 (昭和41年卒)

岩切 陽子 バイオリン

## トリオ・ポルテーニョ

「ポルテーニョ(港っ子)のトリオ」とは「ブエノスアイレスっ子のトリオ」の意。タンゴの花形楽器、春日井邦夫のバンドネオンを中心にバイオリン、コントラバスによって1982年結成。現在はこれにゲスト歌手を加え、東海地方を中心に演奏活動を展開中。

## 《曲 目》

- 1 **EL CHOCLO** エル・チョコクロ  
1903年A.ビョルド作曲。世界で最も愛されている古典タンゴのひとつ。  
ルイ・アームストロングの“Kiss of Fire”としても有名。
- 2 **LO QUE VENDRA** ロ・ケ・ベンドラ  
1954年A.ピアソラ作曲。「来るべきもの」という暗示的なタイトルに相応しい前衛革新的な現代タンゴの傑作。(参照「ピアソラと私」31頁)
- 3 **LA CUMPARSITA** ラ・クンパルシータ  
1917年G.H.M.ロドリゲス作曲。20世紀最高最大のポピュラー・ミュージック。隣国ウルグアイで生まれた永久不滅のアルゼンチン・タンゴ。

# 岐 阜 県 民 の 歌

作 詞 永 縄 半 助  
作 編 曲 服 部 正

*Allargo Moderato*

Vocal

Piano

み どり を そ め て 朝 の 日 が  
高 い 梢 に ゆ れ て い る  
嶺 か ら 嶺 へ 小 鳥 も よ ん で  
岐 阜 は 木 の 国 山 の 国  
伸 び る 希 望 を う た お う よ

*mf* 静 中 に 進 ん で

Vocal

Piano

花 も も み じ も 鶺 鴒 が が り も  
か が や く 文 化 に 色 そ え な が ら  
岐 阜 は 詩 の 国 水 の 国  
は ず む 心 で 進 も う よ

Vocal

Piano

三、 名 所 史 蹟 に 風 か お り  
花 も も み じ も 鶺 鴒 が が り も  
か が や く 文 化 に 色 そ え な が ら  
岐 阜 は 詩 の 国 水 の 国  
は ず む 心 で 進 も う よ

## 岐 阜 県 民 の 歌

一、 み どり を そ め て 朝 の 日 が

高 い 梢 に ゆ れ て い る

嶺 か ら 嶺 へ 小 鳥 も よ ん で

岐 阜 は 木 の 国 山 の 国

伸 び る 希 望 を う た お う よ

二、 つ づ く 平 野 の 雲 遠 く

虹 の いろ も え て い る

村 か ら 街 へ 生 気 に 映 え て

岐 阜 は 野 の 国 幸 の 国

力 む す ん で は げ も う よ

三、 名 所 史 蹟 に 風 か お り

花 も も み じ も 鶺 鴒 が が り も

か が や く 文 化 に 色 そ え な が ら

岐 阜 は 詩 の 国 水 の 国

は ず む 心 で 進 も う よ



# 岐阜県立岐阜高等学校 校歌

作詞 松平 静

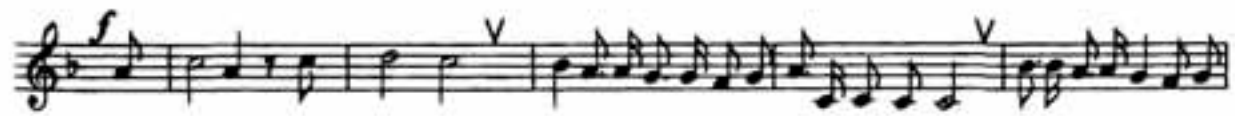
作曲 伊藤栄治



せ じんのたけ きんかざん ひゃくりのみずな がらがわ  
が かいのなみ あらくとも きぼうのきしと おくとも



か ようのけんじ ここにうまれてこっかのためにあけてくれまなぶ  
か ようのけんじ こころおおしくひやくせつふとうつとめてやまず



ふ るへ ふ るへ ほこるさいこのれきしある わがこーこーの



ほまれをばあげよ もろびともろともーに

千仞の嶽	金峯山	学海の波	荒くとも	葦湯の健児	ここに生まれて	香へ	香へ
百里の水	長良川	希望の峯	遠くとも	葦湯の健児	ここに生まれて	香へ	香へ
園家の為に	明け暮れ学ぶ	葦湯の健児	心雄々しく	葦湯の健児	ここに生まれて	香へ	香へ
我が高校の	誉れをば	百折不撓	つとめて止まず	百折不撓	つとめて止まず	香へ	香へ
挙げよ諸人	諸共に	誇る最古の	歴史ある	誇る最古の	歴史ある	香へ	香へ

### 岐高女校歌

一、ああすのらみ国 榮ゆるみ代に  
われら処女 生れあひたる幸  
胸の鏡と 日々にあふく  
教への道へ 勅語

二、見よ稲葉山の 姿は高し  
われら処女 高く心を保たむ  
国の御為に 人の為に  
力のかさり つくさはや

三、きけ長良川の 瀬の音は清し  
われら処女 清く心とみかたし  
はけみいそし み探かたく  
明るき微笑 うつくしく

### 姫小松

一、学びの庭の 姫小松  
千代の孫に たくへつゝ  
植へしその日の わくろりきね  
いそや 祝わん 諸共に

二、恵みのつゆに うらおいし  
みとうゆのいき 姫小松  
いよよますますしりし  
千代に八十代にせかちちん

豊水くらぶ

高木 あい華

姫小松(創立記念日の歌)



岐高女 校歌



## 平成21年度 岐阜高校同窓会総会運営委員会委員名簿

担当部門	卒年	氏 名					
運営委員長	41年	水谷 邦照					
運営副委員長	41年	小石千代子	後藤 真一	新美佐知子	西尾 有生	古田 肇	
	51年	平田 直彦					
	61年	山内 康史					
事務局	41年	※桐山 直泰	小石千代子	犬飼晋一郎	岩砂 三平	川出 正男	
		後藤 真一	新美佐知子	西尾 有生	岩崎 正則		
	51年	小森 龍二	野原 康正	桑原 克全	児玉智永子	田中登喜子	
総務部	41年	◎西尾 有生	○小石千代子	横山 仁美	山本 恵子	片桐 昌子	
	51年	山田 良彦					
	61年	関谷 篤	中嶌 誠治				
財務部	41年	◎犬飼晋一郎	○小石千代子	岡本 実	吉田 啓子	江崎 雅康	
		加藤 俊子					
	51年	加藤美津子					
	61年	川田 英章					
広告部	41年	◎岩砂 三平	○新美佐知子	小島 幸子	神野 利宏	古川 武光	
		宮田 博之	後藤 淳子	岩田 修造			
		〈支援委員〉					
		竹市 進	伏見 知彦	鷺見 敏郎	亀山 哲也	小石千代子	
		亀山 洋	塚原 一成	横森 俊雄	掛布 二三	平工 光子	
		山本 恵子	関谷 均	川出 正男	後藤 真一	赤尾 優子	
		赤尾 好夫	石樽三重子	林 八重子			
	51年	小森 龍二	羽田 能崇	野原 康正	志知 朋子	馬淵 清美	
		鳥澤 英紀	神谷真弓子	棚橋 寛二			
	61年	國井 重宏	野原 英樹				
動員部	41年	◎桐山 直泰	○掛布 二三	佐野 公平	窪田 智	田中 啓一	
		山田 憲治	石原 達己	宮崎 幸雄	兼村みち子	浅井 早智	
		杉浦 真理	戸野部勝司	豊田由紀子	山本 恵子	滝谷 博志	
		操 厚	佐藤 哲児	五島 孝夫	石樽三重子	吉崎 正則	
	51年	市橋 正樹	桂川 素明	河野 武夫	鷺見 正人	田中登喜子	
		谷口 博	間所陽一郎	村瀬 誠一			
	61年	早川 徹					
会報部	41年	◎後藤 真一	○石井 正志	佐久間朋子	兼村 敏生	酒井 和行	
		瀬古 安明	小林 曙	中谷 綾子	田中美恵子	加藤 俊子	
	51年	出口 和宏	江崎久美子	桑原 克全	松野 満代	三宅 茜巳	
		児玉智永子					
	61年	伊藤 陽子	西松 昭人	日比野祥敬			
会場部	41年	◎西尾 有生	○平工 光子				
	51年	津田 俊章	林 裕樹	寺町ひとみ	渡辺 裕子		
	61年	下野 泰輔					
在京部	41年	吉崎 正則					
	61年	左高 健一					

※事務局長 ◎部長 ○副部長

## 編集後記

この平成二十一年度の岐阜高校同窓会「会報」の編集にご協力いただいた多くの方々に、まずもって厚く御礼申し上げます。ご挨拶やエッセイなどを寄稿いただいた恩師、同窓生、座談会参加の皆様、同窓会事務局の先生方など、ご多忙な中でも、また失礼なお願ひにも、快く「会報」のためにお力をいただきましたことに心から感謝いたします。

昨年一〇月に会報部会が動きだし、前年度の会報部会からの熱心かつ詳細な引継ぎを受け、重いことを引き受けたと感じました。また、総会の議案など資料として必要事項の掲載はともかく、折角書いていただいても寄稿文などが、どれほど皆様に読まれるのか、などの疑問もありました。結局、あまり大部にならないように配慮しつつ、例年に恥じない、読んでもらえるものを作ろうと方針を決めました。

特集として総会幹事担当年度である四一年卒の古田知事の参加した座談会を行いました。企画力不足で知事をあまりフィーチャアできませんでしたが、しかし、多すぎないように思っていた寄稿文が予想以上に集まり、原稿量は十分になりました。また、経済危機の中、例年の広告確保は困難であるとの危惧もありましたが、広告部会の努力により昨年を上回る広告量になり、この「会報」がこれまでで最も厚いものになりました。

心残りなこともいっぱいありますが、編集を終えた今は、皆様に少しでも読んでいただけたら、そして「同窓会っていいな」と感じていただけたらという思いでいっぱいです。

最後になりましたが、皆様方の益々のご健勝とご発展をお祈りして結びとさせていただきます。

同窓会総会運営委員会 会報部会一同

## ▽広告ご協賛の

### 御礼

平成二十一年度岐阜高等学校同窓会総会の開催に伴う会報の発行に際し、広告のご協賛を賜りました皆様に厚くお礼申し上げます。

なお、ご紹介順序は会報の構成上原則的に頁数ならびに五十音順となっております。何卒ご理解下さいます様よろしくお願い申し上げます。

平成二十一年六月二十一日

岐阜県立岐阜高等学校同窓会  
平成二十一年度総会運営委員会  
運営委員長 水谷 邦照